



# 編集 中

令和4年度 ユネスコ活動費補助金  
SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推  
進事業 2022 年度成果報告書

国立大学法人 宮城教育大学

<http://xs269206.xsrv.jp/touhoku/>

Tel: 022-214-3300

9800845 宮城県仙台市

青葉区荒巻字青葉 149







「海洋プラごみゼロプロジェクト実行委員会 気仙沼市立条南中学校  
谷山知宏

3. 東北地方各地域団体からの活動リフレクション

自然環境・地域文化をテーマとした探究学習と国際協働学習

「蜘蛛の巣を飛び回る蜘蛛になる」

尚絅学院大学総合人間科学研究機構客員研究員 海藤節生

4. 教員による本年度の実践発表

ホールスクールで ESD に取り組む一妙高市立斐太北小の実践

妙高市立斐太北小学校校長 飯塚教裕・佐藤仁

**2022年度 コンソーシアム 第2回SDGsセミナー**

ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアムは、宮城教育大学が主催する事業として2021年度に立ち、東北地方のESD/SDGs推進のために、積極的に活動してきています。2022年度のSDGs推進のために、東北地方のESD/SDGs推進のために、積極的に活動してきています。2022年度のSDGs推進のために、積極的に活動してきています。

日時 2022年10月1日(土) 18:00~18:30  
会場 仙台市青葉区大倉1-1-1 仙台市立大倉小学校  
主催 仙台市立大倉小学校  
協賛 仙台市立大倉小学校  
後援 仙台市立大倉小学校  
講師 仙台市立大倉小学校  
お問い合わせ 仙台市立大倉小学校

第3回目「SDGs セミナー」ユネスコスクール北海道・東北大会（別予算）と共催

SDGs×探究学習・課題研究成果発表会 12月17日(土)

主催者挨拶 文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐 原文絵

記念講演 石森広美（北海道教育大学准教授・日本国際理解教育学会常任理事）

山形市立千歳小学校

福島県只見町立只見中学校

宮城県気仙沼市立階上中学校（オンライン）

山形県立米沢興譲館高等学校他

ポスター掲示

宮城県気仙沼高等学校（オンライン）

山形県立加茂水産高等学校

青森県八戸工業大学第二高校・附属中学校

青森県八戸聖ウルスラ高等学校

福島県立安達高等学校

宮城県仙台二華高等学校

宮城県仙台第三高等学校

講評：鈴木克徳（ESD-J 代表理事）

齋藤修一（ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアム副会長）

**2022年12月17日(土) 10:30~16:30開催**

2022年度 ユネスコスクール 東北ブロック大会 児童生徒の探究型学習・課題研究成果発表会

会場：宮城教育大学 4号館 420 講義室 (Zoom 併用ハイブリッド開催) GIGAスクールや EdTech の活用により、児童生徒の探究の空間拡大、ICT を活用した発表形式を推進しています。東北ブロック大会では、ESD/SDGs を推進している学校やユネスコスクールの児童生徒を中心に、探究型学習・課題研究成果発表と、交流の場を設け、互いに学びを分かち合える機会を創出します。

申込受付期間：10月1日~10月31日  
申込先：ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアム事務局  
〒981-8585 仙台市青葉区大倉1-1-1 仙台市立大倉小学校  
TEL: 022-254-2381

主催事業：気仙沼 ESD/RCE 円卓会議 2022:2022 年 11 月 4 日 (金)

パネルディスカッション

コーディネーター ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアム運営委員長

東北地方 ESD 活動支援センター 企画運営委員

宮城教育大学 国際理解教育 教授 市瀬 智紀

パネラー

気仙沼市 市長 菅原 茂 氏

人間の安全保障フォーラム 理事長 高須 幸雄 氏

個別教室のアップル 代表取締役 畠山 明 氏

気仙沼商工会議所 会頭 菅原 昭彦 氏

気仙沼市教育サポートセンター 主任運営員 佐々木光久 氏

面瀬小学校 校長 山田 潔 氏

指定討論者

# 富谷ユネスコ協会 顧問 阿部 弘康 氏 認定NPO法人底上げ 理事 成宮 崇史

## 気仙沼ESD/RCE円卓会議2022開催要項

- 1 日時 令和4年1月4日(金) 13:10~16:45
- 2 会場 気仙沼市立面瀬小学校 体育館
- 3 主催 気仙沼市教育委員会、宮城教育大学 ESD・SDGセンター、東北の学び  
気仙沼 ESD/RCE 推進委員会
- 4 共催 東北地方 ESD 活動支援センター
- 5 参加対象 気仙沼市立小・小・中学校教員、市内各高等学校教員  
大学・専門学校教員、行政担当者、産業界関係者、職員  
社会教育関係者、NGO/NPO 関係団体職員  
ESD 推進関係者（他地域含む）、地域住民 等

6 目的・趣旨  
2015年9月、国連は「持続可能な開発のための2030アジェンダ」として「持続可能な開発目標(SDGs)」を示した。このSDGsは、現代の社会が抱えている貧困の拡大、ジェンダー平等、エネルギー・資源の有効活用、脱炭素、生物多様性の喪失、気候変動等、様々な課題解決に向けて、世界が共有する共通目標である。様々な課題を抱える現代社会において、持続可能な社会の実現のために行動する重要性は一層高まっている。  
「持続可能な社会のための教育」(ESD: Education for Sustainable Development) は、日常生活の中で私たちが関与している課題を地球規模課題の解決と結びつけて考え、それらを解決するための教育であり、持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を培うための教育である。ESDの視点を導入し、学校教育に生かすことが、持続可能な社会教育活動を通じて育まれた知識、技能、価値観を行動実践に生かすことが、持続可能な社会を実現するための前提である。SDGsの達成につながる、ESDはこのSDGs全てのゴールを達成するための重要な鍵である。  
都市の発展はグローバルな世界的な成長だが、都市圏等による武力侵襲や人権侵害等は人々の尊厳という最も重要な人権への脅威と認識されており、普遍的な平和と幸福という人間の安全保障を危機的ものとしている。地球規模で実際に起こっている数々の問題が私たちの生活と地域の特性に深刻な影響を及ぼしている現状が日増しに顕著になっており、それらの解決に向けた取組を一層推進していかなければならない。  
「一人取り残されおぼれぬ」の取組に向け、全ての人の生命、生活、尊厳の保障を目的し、ESDを積極的に展開する本市においては、環境や経済の持続可能性だけでなく子どもを含む一人一人の権利(人権)の観点から、多様なステークホルダーを巻き込みながら気仙沼に生きる子供たちの「気仙沼・未来創造力」を育む「気仙沼 ESD」を再考したい。

【円卓会議テーマ】  
「ESD for 2030が目指す持続可能な世界」  
～持続可能な社会を実現する気仙沼 ESD のさらなる前進～

- 7 プログラム  
※ 故小金澤孝昭様(宮城教育大学名誉教授)のご冥福を祈りし、全員で黙祷を捧げる。
- (1) 開会行事 13:10~13:20  
開会のあいさつ 気仙沼市教育委員会 教員 小山 淳
  - (2) 基調講演 13:20~14:00  
演題 「SDGが目指す世界～持続可能な社会と人間の安全保障～」(仮)  
講師 国連事務総長特別顧問(元国連大使) 特定非営利活動法人「人間の安全保障フォーラム」 理事長 高野 幸徳 氏

- (3) 講話 14:00~14:20  
演題 「SDGへの達成に資するESD～SDG時代のESDの潮流～」(仮)  
講師 奈良国立大学附属 奈良教育大学 ESD・SDGセンター 准教授  
文部科学省・関係者「持続可能な開発のための教育円卓会議」議長  
全国 ESD 活動支援センター 企画運営委員長 及川 幸彦 氏
- (4) 気仙沼及び他地域の ESD for 2030 実践事例紹介  
事例① 気仙沼 ESD/RCE 推進委員会 委員 山田 潤 氏  
面瀬小学校 校長  
事例② (株)セレクトエイ 個別教室のアップル 代表取締役 14:20~14:30  
一般社団法人 学習能力開発財団 理事長 嶋山 明 氏
- (5) 気仙沼 ESD for 2030 へ「キリバス共和国」からビデオメッセージ(録画)  
(通訳: 一般社団法人日本キリバス協会 代表理事 ケンタロ・オノ氏) 14:30~15:00

～ 休憩・換気 ～  
(6) パネルディスカッション 15:10~16:30  
【パネルディスカッションテーマ】  
持続可能な社会を実現するために求められる力とは  
～ 気仙沼 ESD で育み、伸ばし、磨く子どもの可能性～

- コーディネーター  
ESD・ユネスコスクール・東北コンソーシアム運営委員長  
東北地方 ESD 活動支援センター 企画運営委員  
宮城教育大学 国際理解教育 教授 市瀬 晋紀 氏
- パネラー ※自己紹介・討論のみ(プレゼンでの実践紹介は割愛)  
①気仙沼市 菅原 政 氏  
②人間の安全保障フォーラム 理事長 高野 幸徳 氏  
③個別教室のアップル 代表取締役 嶋山 明 氏  
④気仙沼市立面瀬 校長 菅原 昭 氏  
⑤気仙沼市教育サポートセンター 主任運営員 佐々木光久 氏  
⑥面瀬小学校 校長 山田 潤 氏
- 指定討論者  
①富谷ユネスコ協会 顧問 阿部 弘康 氏  
②認定NPO法人底上げ 理事 成宮 崇史 氏
- (7) 結 語 16:30~16:40  
ESD・ユネスコスクール・東北コンソーシアム運営委員長  
東北地方 ESD 活動支援センター 企画運営委員  
宮城教育大学 国際理解教育 教授 市瀬 晋紀 氏
- (8) 閉会行事 16:40~16:45  
開会のあいさつ  
気仙沼 ESD/RCE 推進委員会 委員長 佐藤由美子

## その他共催事業：

- 気仙沼地区：ESD/ユネスコスクール研修会（6月10日/1月13日）参加人数約 80
- 只見町公開研究会（11月18日）参加人数約 40 名
- 東北 ESD 活動支援センター 東北 ESD/SDGs フォーラム 2022 みちのく SDGs（1月20日）参加人数約 50 名
- 仙台ユネスコ協会シンポジウム「共に生きる未来へ」（2月11日）参加人数約 50 名調査

本事業は 2 年間の継続事業である。令和 3 年度は、オンラインツール（オンライン配信・YouTube 配信）を活用した教員、学校、地域間で教育実践例や教材、評価手法等の成果のやりとりが行われた。山形 ESD 研究会×東北コンソーシアム、東北学院中学高等学校×新潟高志高校の教育実践例や成果の共有など多くの交流が活発化した。また、青森県では、フォーラム実行委員会により、学校、企業、NPO 団体などが SDGs を推進する 9 つの団体が集まり、今後、青森県で ESD/SDGs を協働で推進する体制ができた。山形県では、山形 ESD 研究会による ESD/SDGs 教育実践例や教材開発が進んだ。山形県教員研修センターや、上山市学校教育研究会社会科部会など、研究会以外でも SDGs に関わる教育の促進が図られた。福島県では、只見町教育委員会と学校の取組みが波及し、会津ユネスコ協会、猪苗代中学校、大戸中学校 会津大学、会津学鳳高校などを中心に会津地域で、ESD/SDGs を推進する動機と機運が高まった。生徒の学習では、SDGs の達成を念頭においた児童生徒による主体的な探究型学習・課題研究の取組が進展した。内容面として、海洋プラゴミや気候変動、ジェンダーについての探究に深化がみられ、方法面では、生徒自身が評価し探究の取組を進める手法に進展がみられた。

令和 4 年度は、上記の実践をもとに、生徒、教員、学校、地域の自己評価（セルフリフレクション）に基づいた取組を促進すること、そして、生徒×教員×学校×地域が相互に評価を行うことによつて、自律的に SDGs を推進し、個人や社会の変容を促進することを事業の目的に据えた活動を展開した。令和 4 年度は、SDGs 学びあいセミナーを通して、オンラインツール（オンライン配信・YouTube 配信）を活用して、教員、学校、地域間で教育実践例や教材、評価手法等の成果のやりとりが行われた。教員、学校、地域間で交流がすすみ、関係者が増加した。気仙沼市面瀬小学校×新潟県妙高市斐太北小学校、気仙沼市

教育委員会×秋田県大仙南中学校教育、只見町明和小学校×妙高市斐太北小学校などが具体的事例としてあげられる。実践トピックとしては、ウクライナ侵攻をうけて、平和学習や人権へのとりくみや東北地方独自の海洋プラごみの学校実践についての探究が進んだ。また、ICTの活用としてメタバースの教育実践への導入の方法について議論を試みた。評価については、評価ルーブリックの活用、評価を明示する方法の進展、児童生徒が自己評価やピア評価を通して探究の取組を進める手法に進展がみられた。

#### 活動指標・成果指標から見た成果

- ① エンパワーメントにつながる自己評価の複数の事例を収集  
教育委員会、学校、児童生徒のそれぞれが継続発展して、ESDの学習を進められるような自己評価の事例を複数収集することができた。
- ② SDGs 学びあいセミナーを通して、教員、学校、地域間で交流が進む。関係者が増加した。
- ③ SNS や動画などのオンラインコミュニケーションツールを活用して、教員、学校、地域間で教育実践例や教材、評価手法等の成果のやりとりが行われた。
- ④ 地域の主催による活動、先進事例地域の現地検討会を通して地域間で教育実践例や教材等の成果のやりとりが行われた。

#### 【コンソーシアムの成果にかかわる成果発表】

日本ESD学会第5回大会（2022年2月5日）

日本比較教育学会（2022年6月24日）

日本学術会議フォーラム（2023年10月30日）（2023年1月20日）、

ユネスコスクール全国大会分科会（2023年1月22日）など



写真：児童生徒の相互評価

## 1.SDGs 学校実践の導入を深化させるために・ディスカッション

宮城教育大学 市瀬智紀

教職大学院現職教員 板垣英恵（仙台市立柞江小学校）

市瀬：…そもそも、この ESD/ユネスコスクール東北コンソーシアムとは何なのか、何ができるのかと言うところからお話させていただきたいと思います。当の ESD/SDGs についての取り組みというのは、本当にいろいろな団体や、いろんな方々が取り組まれているということで大変でこぼこ感があるというのが現実かなというふうに思います。ある学校で ESD、あるいは SDGs に興味をもたれた先生がいらっしゃったとして、それは学校全体でやっているかというそうではない。一方で管理職の、校長先生とか、教頭先生が興味をもたれて、ESD/SDGs を始めようとして、教員の方が数多くいらっしゃるようなケースも多いです。一方で、教育委員会単位で、学校を取り巻きながらユネスコスクール等に加盟して、教育委員会単位でやられているところもあります。ただし、教養教育委員会が波状に広がって行って、いろんなところでやるようになるという、このような動きは強くなるのかなというふうに思っています。ですので、なんとかこのこぼこな感じを相互に交流することで、もっと活性化していけないのかという課題意識のもとで、昨年こちらの方のこの課題意識に基づく予算を頂戴いたしまして、やっているところです。今回は 2 年目なんですけれども、個別の教員はカリキュラムの授業における ESD/SDGs に興味を持つ場合と、学校全体にやる探究活動の課題につながるコンソーシアム。それから地域で教育委員会単位。あるいは地域の市町村で、主体でやられている場合がある。それはうまくミックスしながらつないでいく必要があるというふうに、このコンソーシアムでは考えているところです。ここに書いてある通りなんですけれども、そういうことでさまざまな地域で取り組みをやっていていただきまして、こちらに本日いらっしゃっていただいた ESD 活動支援センター。こちら、うちの大学は教育大学でなんですけれども、活動支援センターさんの十分に民間団体をいろいろ取りまとめてくださいました。活動支援センターさんの力を借りながらやっている。様々な地域で ESD/SDGs の学びの輪というのがちょっとずつ広がっているところかなというふうに思っております。この後なんですけれども、やはりいつも指摘されることなんですけれども、実践発表、実態発表に続いて、かなりそれが聞くだけに終わってしまっているというようなことがございますので、こちらの評価ということを前面に出しています。評価って言うと、お互いに厳しく批判しあうというイメージがあるんですが、何のための評価なのかというと、これはまあやはり子供さんが変化の担い手となっていく。それから地域の変化の担い手。あるいは創り手であったり、世界に向かっていく。担い手が主体となるということのための評価だと思います。ですので、ここはできているぞ、ここはできていないとか、よくお互いの取り組みを深めるために、お互い言い合うというふうに、それが大事なのかなというふうに感じておりまして。お手元に、今年は簡単な質問シートをお配りしております。質問紙と言いますか。いつもパッと時間もなくて終わってしまいますので、こちらをぜひ、それぞれの活動についてコメントを頂戴できて、それを話し合っていきたいなというふうに思っています。まあ評価、そのままというふうにおっしゃられるかもしれませんが、そういうことでやらせていただきたいなと思います。オンライン上にいらっしゃる先生方には、リンクをお送りしておりますので、そちらのリンクの方に、ですね。お送りさせていただきました。ところが、権限がないということですね。申し訳ございません。ちょっとお話しして、自分の担当ではない時に改定いたしますので、後ほどフォームの方にご記入いただければ。それから、なったようです。ということで会場の方はこちらにメモをしていただければと思います。それで、もう数回さっきの話に戻りますけれども、PowerPoint の方を見てよろしいでしょうか。今 ESD/SDGs

を取り巻く状況について、確認してみたいと思うんですけども、昨今 ESD/SDGs って一緒に言っているけどじゃないかと。思うんですけども、そうですね、SDGs って言う国際目標があって、それに向かっていくための教育的な方法としての ESD と。いうふうにきちっと述べた方がいいのかもしれませんが。この SDGs の方は、本当に教科書にたくさん現れている。こちらは中学校、ご承知のようにニューホライズン。いきなり、が、でてくるということで、こういう努力。、ですね。ESD によってかなり児童生徒の ESD/SDGs についての認識は広まっているのか、SDGs とは何なのか。わかんないというような状況が、子供たちの間に、ないのかなというふうに思っています。ところがですね、ここにいろいろ出ていました平和に向かうとかですね。ですとか、協力することとか。スポーツの振興とか書いてありますけれども、こういったものが、SDGs っていう概念があるってということが、子供たちがわかったとして、子供たちがそれを意識してきて。この部分がいわゆるポジション Whole area かなと。これもいろんな SDGs の概念を入ってももちろん非常に大きな成果だと思っただけです。その先ですね。それを考えていく。この ESD 東北コンソーシアムっていうのは、全国の中でかなり頑張っている方なので、私たちがそれを作っていく、そういう責任もあるのかなというふうに思っています。そうですね。認識の広がりについては、確実に広がっていると思います。ただし、SDGs を主題とするんだと、そういう学校は非常に少ないということですね。そして、この SDGs を知るということが、SDGs の達成に近づいているのか。全部達成に近付けないと、意義はないだろうということですね。つまり、これがだというそういう状況から、どうやって子供たちの SDGs の達成に向けた運動を進めていけばいいのか。こっちの方は、国際社会のをしているところで、盛んにトランスフォーメーション、ということと、提唱するようになりました。変わっていかないといけない。それから▲（well being）。何のためにだと思えますけれども、それは子供たちの幸せとして、それを知る教員の幸せ。そして地域の幸せ。▲（いわゆる well being）。そういったものにつながらないと、意義はないんじゃないかという意識が最近特に強くなってきている。次のそういう変容とか、▲（well being）が入ってくるんであろうというふうに言われております。東北地方って非常に成功しているというか、頑張っているし、一番面白いなっていうのは、やっぱりこの地域のリソースを拾い上げて、それを学校教育の中で伝えていっているということだと思えます。今日は大崎市さんいらっやっていますけれども、非常に世界農業遺産ですね。それを学校現場に。そういった事例であったり、また今日は中学校の先生もいらっやっていますけれども、新しい SDGs の素材、次から次へと見つけてくださって。今はコキアですか。やられていますね。そういうところが SDGs の一番の面白さなのかなというふうに思います。それは地域のつながりにしているってということも SDGs っていうことで、地域全体で企業さんも団体さんもいろいろ活動をしていますので、その SDGs っていうことをキーワードに、いろんな団体と協力し、そういういろんないい状況が生まれてきているのかなというふうに思います。そういう意味で言うと、以前は地域学習とか、ふるさと学習というものが、似ているようで完全に異なるものなのかなと感じております。それから、次に課題になっているのは、教科書で SDGs が出ているから、じゃあ教員がそれを意識して。それは学校全体でやる時にはどうしたらいいのかということですね。それに対する回答として、SDGs の世界、ESD の世界とは、ESD カレンダー、SDGs カレンダーだ。かもしれません。それは、これは大森第六小学校さんなんですけれども、これはひとつの回答ではあるんですけども、課題としてはこれを作って安心してしまおうというか。これを位置づけしているよねって理解する。これはどういう意義を持つのかってということ。必ず。ですので、いろんな方法があって、これを貼っておいて、職員室で貼っておいて、学校全体で意識する。これがひとつの方法だと思えますけれども。この間、只見中のメグロ先生もおっしゃっていたように、自分自身やりながら、それをどんどん書き込んでいくというような方法。これもひとつのやり方なのかなという

ふうだと思います。あるいはある学校さんでは、各教科で SDGs をやったとしたら、それを毎回レポートとい  
いますか、このために SDGs があるよっていうことを、各教科で出してもらって、それを学校の中で共有し  
ていくというような方法を取っている学校さんもあると。なぜそういうことをいうかという、消えて行っちゃうん  
ですね。教科書にとっても、ああそうですかで終わってしまうという。これは、でやっていくにはどうしたらいい  
かという、問いがひとつあるのかなとチャレンジする必要があるのかなと思っています。それからもうひとつは、  
各教科をやった時に、その単元・単元で、SDGs を本当に意識しているかどうか。やっぱりやれる単元と  
やれない単元があると思うんですよ。この単元に関して言うと、やっぱり各教科の知識技能のほかに、そ  
れがどういうふうな主体的な学び。主体的な学習に取り組む態度につながっているのかという部分を意識  
しながら、各単元を教えられているのかという部分ですね。これを何か、もっと平たく言うと、学んだことを生  
活や社会に生かそうとしているのかどうか。のかどうかということですね。時に言いましたけれども、こちらの大  
森第六中学校さんの例ですけれども、これですね。東京都の評価の。最終的には理科をしたかどうか、こ  
れは国語・算数・理科・社会、ですけれども、そうですね。進んで関わったり、見通しを持ったり、振り返っ  
たり、探求したりしようとする。これは大森第六中学校何ですけれども、何か物理の単元をやったら、その  
単元のあとにそれを生かしてどう活動するかって言うのを生徒さんに発表させているということです。これは  
ちょっと難しい。そんなに時間を。休み時間使ってやったということですね。こういう部分、すべての単  
元でいちいちこれをやっていられないです。でも時々こういうことを取り入れていくっていうのは、一ついいヒ  
ントになるのかなというふうに考えているところです。そうじゃないと、各教科の各単元と SDGs の目標って  
言うのは、なかなか結びついてこない。それからですね、あとは SDGs に向けて、生徒がどう変わったの  
か、どうとらえていくのか。これについては、いろんなループリックっていうのが展開されていて、去年は  
ACCU さんと一緒に、この SDGs の評価を図るループリックっていうのを開発したところです。…

市瀬：動いていますか。それはよかった。ありがとうございます。次に行きます。PowerPoint で、事前事  
後ということで、活動の前と後でいろんなループリックを開発しました。今年もその議論を続けているんです  
が、はがあつたんですけれども、このループリック自体にも、基本が。もちろんループリックは悪くないんですけ  
れども、ループリックって、型にはまって、線形でどんどん発展していくっていう考えっていうところがどうでしょ  
うかね。ESD や SDGs っていうのは、本当に課題の解決方法がないものですので、ですから、1 から 5 ま  
で段階的に登っていくというのは、そういう課題解決に、本当に寄与するんであろうかという疑問が出る。  
つまり、とんでもない、とてつもないカリキュラム、突拍子もない変化も予測できるであろうと。そういうために  
は、いろいろ▲（キープ）してもらって、の中から、カリキュラムのヒントでいうような評価も、いろいろ課題  
が。そういう議論もしていたところです。現状では、こういうループリックを使って、プロジェクトの前と後で変  
化を見ていくというようなことをやって。そうですね、ループリックやポートフォリオで考えてみていいのか。ルー  
プリックやポートフォリオでまず見ていくというようななのかなと。そこまで、ここでひとつネックになっているの  
は、学年がそういう単元ごととか学期ごとに、ESD や SDGs の達成とかじゃあその子が 1 年とか 2 年  
生。中学校ですね。3 年になった時に、本当に SDGs の意識が高まっているのか。あるいは ESD、  
SDGs の取り組みの意識が深まっているのか。これはなかなか。学年が入れ替えになっちゃうとか、がっ  
ちゃんこになっちゃう先生が変わるとか、いろんなことがあって。それで、長期的な視野で、煮え切られてい  
ないなというような傾向ではあるのかなと。

(雑音)

市瀬：本当は、そういうSDGsの特性に、取り組むような児童生徒が育てられているか。学級の生徒が、そういうことに対して立ち向かっていけるような、。強い言い方もかもしれませんけれども、そういう意識を持って、生きていけるかどうかというのは、キャリア形成と関係があるのかなと思います。高等学校ですと、やっぱり課題研究をやって、その課題研究の成果が生きて、そしてそれが進路指導とか、職業センターでつながっていくと。そういう意識を持ちながら、資料選択をしているなということで見えていけるのかなというふうに思います。ところが、小中学校でなかなかESD、SDGsを学び▲（だとかどうなったんだ）というのを、これはなかなか見取ることができないのかなと思って。ここを何とかすれば、次第とSDGsのをきちんと見ていけないんじゃないかなというのがありまして。いいお知恵があればというふうに考えているところで。一応高等学校ですね。課題研究をやっていますので。そういうところで高校生の進路についての考え方とか、気質の中から、そういう影響を受けているとか、そういったなというのがわかるかなと。ただ小中学校だったら、終端の形成とかですね。例えばエコな活動への取り組み、限られるようなということでは、評価できるのかなというふうに思うんですけども、なかなかその子が成長して行って、その成長にほど寄与し、それはまたSDGsの目指すを寄与している。この長期的な視野が、って見ていくことは、生徒も変わってしまいますし、難しいのかなというふうに。これは去年の、今日来てくれている八戸工大の素晴らしい発表でしたね。生徒さんがとてのですね。それを本当にどれくらいの時間ですのかということ調べたり、あるいはプラントンの中にどれくらい体内に。はい、ます。どれくらい体内に、溜まっているのかというようなことを調べて、ですね。高校生の場合には、比較的それが子供の進路にどういくのかというところできくことが可能なのかなと。いろいろ言ってきたけど、何が言いたいのかということなんですけれども、今後非常に、これまでの取り組みの中で、地域素材を活用しながら、SDGsの子供たちことはかなり成功してきているのかなというふうに思います。各教科や単元で、どうやってESD、SDGsを意識しながら活動したらいいのか。また、各学校で先生の意識も一様ではありませんし、を、ふうに考えながら、ESD/SDGsを浸透、意識化させていったらいいのか。それからあとは、長期的なSDGsの達成に向けて、長期的に生徒の変容をどう捉えていけばいいのか。こちら辺が、私なりに考えているESD/SDGsを深めていくポイントなのかなというふうに感じているところです。今の私のお話している時間はディスカッションということになっておりますので、ここでご意見を頂戴できればと思います。それでは次に、宮城教育大学では今の学校教育現場の私も一応実践者で、大学生に教えているわけです。教職大学院の方で、今年はいらっしゃって。先生の力をお借りして、教職大学院の方でもSDGs、観点を取り入れた授業を考えていこうということで、いろいろと実践をしているところです。本日は、だいたいうちの教職大学院生は、現職の方も含めて8名でそういうことを考えると。特にそういったことを特化して、学校教育を特化したわけではない学校さんが100%です。そういう中でESD、SDGsをやられて、どんなことをお感じになったのかどうか。ちょっとお伺いしてみたいと思います。これは初めてですね。ESD、SDGsに取り組む先生の事例です。ちょっとお伺いしてみたいと思います。これは例えば、新任の先生とかが、先生方、これを一生懸命取り組まれている学校に来られた時に、お感じになる原因部分とかなり共通しているのではないかなと思うんですけども。それでは、イタガキ先生、こちらにいらっしゃっていただいてもよろしいでしょうか。

司会：はい、それじゃあご紹介させていただきます。仙台市立柊江小学校のイタガキサナエ先生です。よろしくお願いたします。

イタガキ：はい、改めまして皆さんこんにちは。今年4月から宮城教育大学の教職大学院で、現職派遣教員として学んでおります。市瀬先生の授業を受けて、本校で実践している総合的な学習をSDGsの視点で振り返った時ということで、まとめてみたジャムボードになります。これについて、今からご説明させていただきます。まず上にありますけれども、私が在籍している仙台市立柊江小学校というのが、仙台市の北部にあります。JR東仙台駅から西に約1.5kmのところ position しています。周囲は住宅地が広がっていて、比較的市街地なんですけれども、学校の東側にはそこにあります、里山である柊江の森。右側ですね。ありまして、西側には与兵衛沼っていう沼があります。大変自然に恵まれた環境になっていて、この柊江の森は四季折々の自然の風景を感じることができますし、与兵衛沼には冬になりますとハクチョウが飛来してきて。大変地域の憩いの場になっているような環境に立地しています。またこの一帯は、柊江小が建つ以前に、窯跡や、竪穴住居が発見された場所で、与兵衛沼につきましては、江戸時代、仙台藩士の鈴木与兵衛さんという方が、私財を投じて作ったかんがい用水路が沼になったところということで、歴史的な価値も大変高い場所になっています。地域、保護者に関しましては、大変学校に対しての理解がありまして、開校当時から協力的な地域であったと聞いております。一方で下にありますけれども、最近では高齢化とか核家族化、共働き家庭の増加だったり、あとは2年前からのコロナの影響ということで、この2年間は思うように地域との連携を図ることができなかったというのが現状であります。この今までに申し上げました、特色ある柊江の地域素材を有効に活用したいというのが、学校全体の願いでありまして。この魅力を子供たち自身が感じて、地域への愛着を感じてほしいというふうに、学校全体では願っております。そして感性を、自然と触れ合いながら感性を働かせ、どのようにして社会や地域、自分の人生をより良いものにしていくかっていうのを考えながら、友達同士で共同しながら、創造していく力っていうものを育みたいと思います。そのためには、やはり地域との連携、共同っていうのが大事で。それを実現するには、総合的な学習の時間を核にした授業展開っていうのが望ましいのではないかと考えております。今からご紹介するのは、5年生の総合的な学習の時間の、柊江の森の再生プロジェクトについてです。ここでは地域の自然とそれを守り継ぐ人々との関わりを通して、身近な自然への理解と愛着を持って、望ましい環境作りを願って、地域の一員として自分にできることは何かというのを考えて、友達と共同しながら地域の良さを伝えようとするということを狙いとしています。また、このスライドにありますけれども、他教科との関連ということも、大変意識しているところです。そう考えた時に、SDGsの目標で言うと、11番に当たるのかなと。密接に関わっているのかなっていうふうに考えております。今申し上げたような総合的な学習の時間での狙いを達成するためには、やはり地域資源との共同っていうのは欠かせないと思います。ここに示してあるような、大変充実した地域資源があります。市民センターだったり、柊江の森の魅力を発信する市民団体、あとは行政との関わり。私たちからは、積極的な学校からの発信っていうのも、重要視しているところです。このような形で、SDGsの視点で振り返った私の学校の実践を紹介したところです。

司会：ありがとうございました。イタガキ先生、ありがとうございます。そうしましたら、イタガキ先生へお伺いしたいんですけども、今までSDGsっていう観点をそんなに考えてこなかったと。そして教職大学院に入って、SDGsを学校教育に取り入れるようになった。このSDGsの視点で考えるということについて、どのようにお感じになられたでしょうか。お願いします。

イタガキ：実践を振り返った時には、5年生の総合的な学習を中心に振り返りましたので、SDGsの目標で言うと11番かなということで、真ん中に11番ということで提示したわけですけども、学校全体のそ

の実践を振り返りますと、他にも例えば 10 番。人や国の不平等をなくそうとか、15 番。陸の豊かさを守ろうとか、あとは 3 番。全ての人に健康と福祉を、等とも関連しているかなっていうふうに感じています。SDGs はさまざまな問題が複雑に関係していますので、子供たちにとってはそれぞれの発達段階に応じて、自分なりの課題意識を持って調べたり、考えたり。あとは友達と共同しながら解決方法を見出すっていうことができるのではないかなっていうふうに思っています。そういった意味では、総合的な学習の時間が、SDGs の視点で行う教育というものを行うために、大変重要な役割を担っているのではないかなっていうふうに感じました。はい。今正直、これまで SDGs というものを意識して授業を行ってきたことがありませんでしたけれども、やはりこれから予測不能な時代を生きていく子供たちにとっては、凄く SDGs というものが学習の大切な視点になるのではないかなっていうふうに、純粹に思いました。▲（財政事項）では、先ほど申しあげましたように、魅力ある地域資源がありますので、それを十分に活用しながら、学校全体として、学年の縦のつながり。あとは教科間。横のつながりというものを意識しながら、年間カリキュラムの中でどこにこう SDGs の視点を取り入れられるのかっていうことを考えて、意識していくことが大切だなというふうに感じております。今回のこのセミナーに参加するにあたって、凄く先駆的な取り組みをされている方々が多いっていうふうにお聞きしておりますので、学校全体としてどのような取り組みをしていけばいいのかっていう辺りを、すごく勉強したいなって思っています。はい。以上です。

司会：はい、イタガキ先生ありがとうございました。それではこの時間は、ディスカッションってということで、今ちょうど 30 分過ぎたところなので、あと 10 分ぐらいございますので。10 分もないですね、あとは 6 分くらいしかないんですが、もし私の提示している私の悩みと言いますか、でイタガキ先生が今これから取り組まれること。何かお気づきな点とか、コメントがあったら、ぜひご自由にご発言いただければと思います。オンラインでも会場でも構いませんので。何かございましたら、どうぞお気軽に言っていただければと思います。いかがでしょうか。はい、お願いします。ナカマル様。

ナカマル：只見町教育委員会のナカマルです。本町只見町でも、私は今、「ふるさと只見を愛し、誇りに思う心を育てる ESD」ということで、実践を進めています。やはり只見町の広大な自然を生かした学習をとということで、始まった頃はやはり先生方が進めやすいようにということで、ストーリーマップですかね。ESD カレンダーというものを作成して、どんなふうに進めたらいいか、なんていう見通しを持って進めるようにしてきたところがあります。やはりなかなか知られていないところもあるので、初めて取り組まれた先生も多いのかな、なんていうところで、先生などが、役に立っているのかなというところ。また、やはり学校さんだけではなくて自治体、教育委員会とか、そういったところで研修を設けるなどして、やはりこう進めていくということも必要なのかなと思いますが、学校さんだとなかなか難しいので、やはり学校の教頭先生がご理解いただいて、そういった研修なんかをしていけるといいのかなと思いながら聞きました。ありがとうございます。

司会：ナカマル先生、優しくアドバイスしてくれて、ありがとうございます。そのほか何か、これは何か。よろしく願いいたします。はい、大丈夫でしょうか。それではまた、コメントはもしあれば、そのシートの方に頂戴するということで、イタガキ先生どうもありがとうございました。

イタガキ：ありがとうございました。

## 2. 東北地方各地域団体からの本年度前期活動のリフレクションと今後の予定について

### 東北地方 ESD 活動支援センター 小泉照

司会：はい、では次の発表に移らせていただきます。先ほど大変 PowerPoint が動いていなかったようで、失礼いたしました。今日はまず最初に、東北地方で ESD を支えている団体として、活動支援センターがごぞいます。こちらの方の、今年度の取り組みについて、お話を頂戴しようと思います。今度はしっかりと画面が共有されることを願っております。

小泉：皆さんこんにちは。東北地方 ESD 活動支援センターの小泉と申します。日頃より、東北地方関係者の皆様と、ESD、SDGs 活動支援センター、ESD センターの皆さんが、大変お世話になっております。今年度、東北地方 ESD 活動支援センターの活動ということで、私の方から報告させていただきたいというふうに思います。何回も ESD センター、どういものかというのをお聞きになった方がいらっしゃると思うんですが、今日初めての方もいらっしゃるかと思いますので、まず東北 ESD センターとは何かというところからお話させていただければなというふうに思います。ESD 活動支援センターというのが、全国、各地方 8 ヶ所にあるんですけれども、これも ESD 活動支援センター、全国に作られた、設置されたのが環境省と文科省が連携して、この ESD 活動支援センターという組織を立ち上げております。現在、運営に関しては、公益財団法人日本環境協会が運営を行なっております、各共同でこの ESD 支援センターというのが運営されていることとなります。全国センターに関しては、所在が東京にありまして、開設が 2016 年に開設されております。この組織が作られた目的としては、全国的な ESD の推進ということが一番の目的なんですけれども、ESD 推進ネットワークというものを形成していく。この全国センターが全国的なハブ機能を果たすっていうところで、活動をされているところです。続いて翌年、2017 年になるんですけれども、各地方 8 ヶ所に ESD 活動支援センターが設置されております。もともと各 8 ブロックに環境専門の中間支援方式として、環境省が設置した、東北環境パートナーシップオフィスというものがあるんですけれども、ここがその ESD センターも請け負って、活動していくということになっております。東北に関しては、東北 6 県を東北地方 ESD 活動支援センターが活動していくという形で、2017 年の 7 月に開設されております。東北地方 ESD 活動支援センターの運営に関しては、環境庁の東北地方環境事務所と民間団体、公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワークが協働という形で、運営をさせております。先ほど、全国の方も官民協働という形でお話させていただいたんですが、各地方も、官民協働ということで ESD 活動支援センターを運営しているという形になります。私自身がこの右下の公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワークの職員になりまして。ここから出向という形で、EPO TOHOKU と、ESD センターのスタッフとして、今活動させていただいているところです。東北 ESD センターができて、今年度で 7 年目という形になるんですけれども、開設当時から、EPO TOHOKU の方もそうなんですけれども、我々が大事にしている平詰めの対話という言葉が我々は使うんですけれども、対話。実際に現場に行って、対話によって現場の課題であったり、ニーズを把握するっていうところを、まず一番に大事にしているところがあります。ここ、2 年、3 年。ちょっとコロナが拡大しているところで、なかなかここもできていないところはあったんですけれども、オンラインもうまく使いながら、各地域の ESD、SDGs に関する情報を集めながら、今回活動を行っているところです。またひとつ活動の大きな柱としては、学び合いと交流の機会の提供ということで、毎年フォーラムを年 1 回開催しているんですけれども、そういう場所を作るところも、ひとつ大きな柱として活動しております。7 年目になりまして、いろんなところから東北



写真に掲載しているんですけども、今日ご参加の山形 ESD/SDGs 研究会の皆様と一緒に、山形の状況を考えるというような形で、プロジェクトを進めさせていただきました。各地域のテーマについては、東北も載っているんですけども、8 地域のテーマ。全国センターのウェブサイトの方に掲載されている形になっており、ちょうど皆様にこちらをご覧いただければなというふうに思うんですけども。ほとんどの地域が気候変動という言葉を使っていて、気候変動教育、気候変動教育の実践、気候変動教育という言葉を使っているんですけども、全国の ESD センターと各地方センター、今年議論が進められているところが、この気候変動教育というところが大きくテーマに議論されているところがあります。この状況で気候変動であったりとか、脱酸素、ゼロカーボンってところが国の施策としても進められているところで。そこにどう教育が入っていきけるのかってところで、気候変動教育。この気候変動教育って言葉もまだ確立されたものではないんですけども、これをどういうふうにしていくのかというところを全国で議論されているところになっているので、今回も学び合い教育のテーマでも、あとはセンターで気候変動教育って言葉を使って、取り組みが進められている地域が多い形になっております。東北に関しては、今お話ししたとおり、気候変動教育の東北モデル、プログラムを創出するというので、今年度、この学び合いプロジェクトの方を進めさせていただいております。タイトルは東北モデルプログラム「ワールド・気候スタディーズ ESD/SDGs」というタイトルではあるんですけども、今回は秋田県の方で、このプログラムを展開しております。今日ご参加いただいているのかな。大仙市立大曲南中学校のシマダ先生いらっしゃいますかね。ありがとうございます。シマダ先生はもしよかったら、後ほどお話をいただければなという点ではありますけれども。まだ中学校の方でやはり実際スタートしているところがいま。内容的には単発の授業ではなくて、実演学習であったりとか、コロナ禍も含めて、プログラムを構築していくタイプの部分と。ただプログラムを構築するだけではなくて、実践していくためにどういった連携があったりとか、外部からの支援があるのかというところで、このプロジェクトで検討していきたいなというふうに思っているところです。このプロジェクト自体には拠点にも関わっていただいております。秋田市の地球温暖化防止活動支援センターのあきた地球環境会議さんと、あとは仙台になりますが先ほどお話しした日本キリバス協会のふたつの拠点に関わっていただきながら、このプロジェクトを展開している形になります。先ほどお話しした、11 月末までにプロジェクトの、それぞれの活動をしていくという形なんですけれども、第 1 回目と第 2 回目はすでに終了しております。第 1 回目が 4 月、第 2 回目が先ほども申しましたように 8 月 1 日に開催した形になっております。第 3 回目と第 4 回目は今後予定している形で、ちょうどお話ししたいなというふうに思います。第 1 回目の方は、4 月 4 日。大仙市の大曲南中学校の方で開会したものになるんですけども、これが事前学習という形の建付けになるんですけども。キリバス協会のケンタロ・オノさんからキリバスのお話をいただいた後に、ワークショップもつなげてやろうというような第 1 回目の勉強会の内容になっております。東北 ESD センターのウェブサイトの方に、第 1 回目の開催の取りまとめが載っているので、ちょうどウェブサイトで見いただければなというふうに思うんですけども、オノさんが、皆さんはケンタロ・オノさんご存じかなというふうに思うんですけども、キリバスの国の生活の仕方からお話をいただいて、それぞれ日本との違いを話していただきながら、気候変動がどういうふうに関わっているのか。それに対して、SDGs がどういうふうに関わってくるのかというようなお話をいただいたところになります。その後、講話の後にワークショップという形になりまして、これはあきた地球環境会議のフクオカさんから、ペルソナワークというような形で。もしもあなたが〇〇になったらというようなワークショップをしていただきました。このワークショップの内容としては、ふたつ生徒に変身をしていただくというものになるんですけども。1 個目が、あなたがもし

大曲南中学校の校長先生になったら、キリバスと大曲南中学校でどんなことができるのかを考えましょうというもの。ふたつ目が、大仙市の市長になったら、あなたはというキリバスとの関係性を持ちたいですかというふうなワークショップ、ふたつをやっていた形になります。実際にこの報告書の方に、生徒からそれぞれ出た内容というものが書かれているので、後ほど見ていただければなというふうに思います。それを踏まえまして、第2回目は実践者向け学習会というふうに書いているんですけども、このプロジェクトに関わってもらっている有識者の皆様に集まっていただいて、1回目の振り返りも含めて、第3回目の交流会をどういう形にしていくのかというような議論を行なった形になります。こちらは会場の皆様には、8月1日に行なった勉強会の取りまとめの方も配らせていただいております。ただ、ウェブサイトには掲載しておりませんで、8月の中旬にはウェブサイトの方に、こちらの取りまとめも掲載する予定にはなっております。会場の皆様こちらでお配りしているものになります。すみません、オンラインで参加している方にはちょっと見ていただけないところがあるんですけども、実際に今回は1回目の施策で大きくポイントとなったワークショップまで、ただ話を聞いて終わりではない、ワークショップまでつなげたというところの効果として、やっぱり生徒、今まで例えば節電、ただ節電すればいいんでしょって思っていた部分が、なぜ節電するのかっていうところを考える変容が起きたというところは、この大曲南中学校の先生からお話をいただいている、やっぱりそこがこの聞きっぱなしではないこの授業、講話というところ。講話からワークショップというところが、大きな効果があったのかなというところでお話をいただいております。実際の生徒の声も、真ん中の方に載せております。第3回目と第4回目というふうが続いていく形にはなるんですけども、第3回目が実践活動、交流授業ということで、ここがまず本番という形になるんですけども、大曲南中学校の3年生。約30名ですね。あとはキリバス側の、今の予定ではセントルイスハイスクールというところの学校ということなんですが、ここの中学校2年生になりますかね。そこの2年生と交流、オンラインで交流会をするというふうな形で、第3回目を予定しているところです。ただ、こども内容についてはちょっと検討中ではあるんですけども、大曲南中学校側が英語で話すのはどうかっていうところも含めて、当日の内容を今検討しているところになっております。第3回目の開催についてはオンラインで、皆さんにもご覧いただけるような形で開催したいなというふうに思っておりますので、開催の内容が決まりましたら、ご連絡させていただければなというふうに思っております。第4回目。先ほど市瀬先生からも評価という、自己評価というところのお話もあったんですけども、やっぱり大人側もやりっ放しではなくて、このプロジェクト自体がどういう成果があったのか、今後に向けてどういう課題が見つかったのかっていうところを整理する機会として、第4回目、12月になるんですけども意見交換会、振り返りの会を設けたいなというふうに思っております。ちょっとこちらの会が、オープンにするかどうかっていうところはちょっとまだ議論しているところなので、もしオープンでやるってなったら、皆さんにご案内させていただきたいなというふうに思っております。ESDセンターの今年度の今現状として、大きな活動が今の学び合いプロジェクトを展開している形になります。今後の予定につきまして、もうひとつESDセンターの大きな事業として、先ほどもお話させていただいた東北ESD/SDGsフォーラムの開催を今年度も予定をしています。昨年度は青森の方で開催させていただいたんですけども、今年度は仙台の方に戻ってきて、開催したいなというふうに思っているところです。ちょっとこれもまた、コロナが増えてきている状況なので、リアル開催を予定はしているんですけども、基本はハイブリッド開催をしたいなというふうに思っております。まだ企画段階ではあるんですけども、来年の1月から2月ごろの土日、1日で開催したいなというふうに思っているところです。今年度の内容については、こちらはまだ全然企画段階、案段階ではあるんですけども、これまで取り上げたことがなかったテーマを

取りあげてみたいなというふうに思ったところで、3つテーマを上げたいなというところを今、企画しています。3つというのが音楽の分野と、芸術。伝統工芸なんかそういうものも含めた芸術の分野。あとはスポーツの分野を取り上げて、そことESD/SDGsがどうつながるのか。最終的には、それがどう学校教育につながるのかということまで落とし込んだテーマ、設定にして、今年このフォーラムを開催したいなというふうに思っております。まだまだ我々も取り上げたことがないテーマなので、何しろ本番も決まっていないところではあるので、ご相談させていただきながら、企画をすすめて参りたいというふうに思っております。もうひとつ、これはESD東北センターの事業ではないんですけれども、先ほどお話しした全国フォーラムの開催が、これに関しては日程が決まっております、2022年12月10日に開催される形になります。今のところ東京で、リアル開催で進めるというようなお話をいただいております、内容についてはまだ、地方センターまで話が来ていないんですけれども、先ほどもお話ししたESD学び合いプロジェクトの、地域の成果報告を全国フォーラムで発表する、報告するというような内容になっております。例年であれば、分科会形式でそれぞれ分かれてテーマごとに発表がある、報告もあるというような形にはなっているんですけれども、今年はまだ、どういう形になるかっていうのは決まっていないところではあります。日程の方は決まっておりますので、こちらもぜひ、興味がありましたらご参加をいただければなというふうに思っております。以上で東北ESDセンターの活動の報告、紹介になります。ありがとうございました。

司会：何か聞いてみたいこととか、ございましたらお願いいたします。はい、様々な方面から、東北地方のESD/SDGsの活動、エンパワーメントしてくださって本当にありがとうございます。特に気候変動ですとか、それからゼロカーボン、そしてまたセミナーの方では、音楽や芸術を中心にして、新しい趣向から、ESDにフォーカスを。別な側面から展開していこうとされているということでした。はい、どうもありがとうございます。それでは小泉様、どうもありがとうございます。今のご報告が、東北地方のESDを支えてくれたという活動支援センターさんの方の報告でした。あとでもしご質問があったら、ぜひ直接お願いいたします。それでは次ですね。今度は教育委員会さんからということで、気仙沼市教育委員会アサノ先生の方から、教育委員会だけではなくて、メンバーのESD/RCEの推進委員会ということで、全体の、今年度の方向をお話しいただけたらと思います。アサノ先生、ご準備の方はよろしいでしょうか。

## 2.東北地方各地域団体からの本年度前期活動のリフレクションと今後の予定について

### 気仙沼 ESD/RCE 推進委員会

気仙沼市・宮城教育大学連携センター 浅野亮

アサノ：はい、気仙沼市のアサノです。聞こえてますでしょうか。大丈夫でしょうか

司会：はい、大丈夫です。

アサノ：はい。それでは画面を共有させていただきます。はい、いつも東北地方の皆さんには大変お世話になっております。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。今日は気仙沼教育委員会、それから気仙沼の ESD/RCE 推進委員会というところの組織で取り組んでいる、その気仙沼市の ESD/SDGs について、この 7 月までの取り組みについて、ちょっと振り返りも含めて、ご紹介させていただきたいということ、あと今後下半期に向けて、どういった計画を予定しているのかということをお話しさせていただきたいなと思っております。今、こう表紙の方に出ているこの写真なんですけど、昨年度の気仙沼市が毎年度開催している ESD の円卓会議の様子です。昨年 5 月に第 2 期の ESD 国内実施計画が出されまして、それを受けて 5 つの行動分野の代表の方々にパネラーとして参加していただいて、気仙沼市の今後の ESD の方向性について議論をしたというところの写真になっております。長年取り組んできたこの開催していた ESD の円卓会議ですが、初めて市長さんにもパネラーとしてご登壇いただきまして、色々主としての、そのガバナンスとしての色々ビジョンをお話しいただいたというところになっています。これがいい気仙沼のひとつのきっかけって言うか、契機にもなったというところと言えるかなと思っております。これはちょっと小さくて見えないので、ちょっと拡大させていただきますが、今年度の第 1 回の ESD ユネスコスクール研修会です。このユネスコスクール研修会も、気仙沼は年 2 回、6 月と 1 月に毎年度開催しておりまして、市内のユネスコスクールに加盟している学校のみならず、市内の幼稚園、小学校、中学校、高校の ESD 担当の先生が一堂に会して、宮教大の先生をはじめ、講師の先生から色々専門的な知見を教わりながら、自分たちの取り組みを振り返ると。そして今後に向けていろいろ議論し合うというふうな研修会になっております。ここのタイトル、上のところに書きましたように、今回の大きなテーマ。この 1 回目研修会のテーマが、コロナが始まってもう 3 年になりますけれども、ウィズ・コロナの時代における ESD の役割、それから方向性というのをもう一回、みんなで確認しあいましょうというところでした。色々体験活動も制限される中で、じゃあ ESD としてこのコロナの中でどういったところを目指していったらいいんだろうというふうなところが大きなテーマでした。具体的なお話としては、このワークショップ。先生方の話し合いの中では、じゃあカリキュラムを探究化にしていくためにはどうしたらいいんだろう。それから、個別最適な学びってのは言われているんだけど、じゃあどういったところが個別最適な学びにつながるんだろう。じゃあ体験的な学習だったり、協働的な学習ってのがもう一回、その価値ってものを振り返ろうというふうなところから話し合いました。いつも今日もご指導いただいておりますが、市瀬先生から基調講話の形で色々評価のことも含め、それから ICT を活用した個別最適な学び、そういったところも含めたご講話を頂戴いたしました。その後、具体的な取り組みの事例として、東京都の多摩市の連光寺小学校の関口校長先生の方から、実際にその連光寺小学校で ESD の中で、どう ICT を効果的に活用されているかというところをデジタルポートフォリオという子供たちの自身での評価振り返り。そして発表につながるようなところに取り組んでいるというふうな事例もご紹介いただきました。こういうふうにロイロノートを活用して、子供たちがどんどんこう学びを探究的に深めて、深掘りしていくというふうなことのご紹介もいただきました。またワークショ

アップのところの全体コーディネーターをしていただいた宮教大の吉田先生からも、この個別最適な学びと、あとは協働的な学びという、往還の部分がすごく大事だというふうなところのお話もいただいております。そのあとのワークショップで、色々な先生方から本当に率直な意見のやり取りが交わされたんですが、一つ一つはご紹介できないんですが、大きくは先ほどお話ししたこの3本柱の項立ての中で議論しました。色々全体計画において学年系統は意識しているんですが、体験活動が増えたことで何について、一体何のために誰に伝えるのかと。そういった精査も新たな課題として出てきているよと。特にこのICTになってオンラインでやり取りすることが増えてくる中で、よりそういうふうな課題意識が強まってきたというふうなことは話されていました。また小学校、中学校の9年間を見通した高主幹。縦のつながりでのロードマップ。これについても、小中一緒になって今研修を継続していますというふうなことも話されました。そういったところで色々こう出された中で、本当に活発なやり取りが出てきました。後は生徒指導面でもこういったICTの活用の有効性が大きいというふうなことも、先生方の方から出されておりました。あと最後には宮教大の田端先生の方から。学力スコアというところの客観的なデータサイエンスを踏まえながら、やっぱりESDによる探究的な学びというのが有意な形で、子供たちの非認知能力を高めていることは、これは間違いないと。なので、数値的な認知学力だけではなくて、やっぱりこの非認知。意欲とかコミュニケーション力とか、あるいはつながるとか、そういったところがやっぱりこのESDでは大きく育める力ではないかというふうなことを話されました。それからこちらはもうひとつご紹介したいのが。気仙沼は、海と生きる町ですので、海洋教育というのもESDの一つの柱に取り組んでおります。これは5月に行われた1回目の海洋教育の推進連絡会。これも海洋教育の方に取り組んでいる学校が一堂に会して取り組んでいまして。東京大学の先生とか、笹川平和財団の研究員の方とかからいろいろご指導いただきながら取り組んできているものです。今回初めて、気仙沼の海洋教育連絡会なんですが、同じように海洋教育に力を入れて取り組んでいる岩手県の洋野町の教育委員会の先生、それから今日も会場の方にお越しになっているようですけれども、只見町の教育委員会ナカマル先生。そしてあと気仙沼ということで、この3地域の今年度の取り組みについても、お互いに紹介し合いながら、合同研修会のような形で取り組みました。講話は、東京大学の海洋教育センターの田中智志センター長さんから、いろいろ哲学的なところも含めてお話をいただいたところですが、こちらは2回目の推進連絡会になりますが、6月に行いました。こちらは東京海洋大学の川合先生から海洋酸性化ということで、気候変動で、地球温暖化で、海の熱波とかいろいろあるんですが、そういったところとあわせて、その酸性化が急激に進んでいるというふうなお話をいただきました。そういった中で特にカキ養殖とか、そういったところを気仙沼でも主産業になっているんですが、そういったところにもこの酸性化っていうのは大きく影響しているというふうなところで、本当に遠い離れた世界のことではないかと。余計目に見えないものなので、実感しにくいことなんですが、やっぱり着実に足元に及んできているというところを学んだ、2回目の研修会でした。これは先生方に対する研修になります。5月に行ったんですが、今年度初めて、管理職の先生も含めてなんですが、初めて気仙沼に赴任されて、気仙沼の学校で勤務された先生方を対象にした研修。それから新しく、本当に新規採用で先生方になった初任者の先生方を対象にということで、2日間に分けてフィールドワーク研修を行ったものです。大きくは海のことを中心にして行ったんですが、魚市場。水揚げの様子も見ながら見学をしたり、あるいは遠洋マグロはえ縄のことについて、世界のどういったところで行っているのかというようなところ。それから実際にマグロ船に乗船をして、本当に餌とか何かの荷積みの様子もちょうどいいタイミングで見学をできて、そういったところ。あとは東日本大震災の伝承館での防災の方の研修、それから美術館での研修、そして最後

にはこの1日の振り返りも含めて、先生方自身が生徒になった気持ちで、その探究的な学びのワークショップということで取り組みました。当日の様子がこういうふうに地方紙の方にも掲載されておりまして、本当にESD、あるいは海洋教育を子供たちに教える先生方自身がやっぱり学んでいかないと、持続可能な学校教育ESDの指導というのがなかなか難しいと。先生方の異動にもよって若い先生方。そういった先生方も増えてくるので、やっぱりこういう機会も大事にしていきたいなと思っていたところです。後は地元企業の方でも、教育委員会で作った海洋の副読本なんかを積極的に出前授業なんかでも活用していただいて、企業とも一体になってこう進めていけるなと思っているところです。それから、これは海ごみ関係なんですけど、5月30日に「5月30日・ごみ0」ということで、5月30日だったんですが、WWF ジャパンとあと気仙沼市水産課、それから教育委員会。それから東京にありますけど、港ラボという東大の先生方が兼任されているところなんですけど、その4団体が共同で行ったものです。右側の方が、その時のキックオフイベントでのパネルの部分、そしてそういったことも含めて、これは面瀬小学校なんですけど、地元でその漁網を使ってジャケットとか、そういった学用品とか、リュックサックとか。そういったものにリサイクルしているamuさんというところの方がおいでになって、子供たちに廃漁網の利活用というところで教わっているところの様子です。これは幼稚園の活動なんですけど、気仙沼市に5つの公立幼稚園があるんですけど、その5つの公立幼稚園が今年度5つ、全て海洋教育のパイオニアスクールプログラムに加盟しました。そういったこともあって、5つの幼稚園が年長さん同士での交流ということで、その交流場所が海岸だったんですね。そこに集まって、一緒に園を越えて海に親しむ活動をしたというふうなところになっています。全国にも例がないというふうなことで評価いただいておりますが、実際に子供たちが砂を掘って、水が湧き出るところを楽しみ、それを園に戻って絵に表すというふうなところなんです。この5つの園の交流の前には、オンラインを使って子供たち、年長さん同士で交流したりしていました。あと事後には、子供たちの方から東大の先生の方に、事前に送っていた質問に対して答えていただく交流会というふうなことも行ったところです。幼稚園でのそのESD海洋教育っていうのが、すごくこの情緒を育む面で、本当に非認知の一番のスタートになるところで、大切だなと思っているところです。ちょっと急ぎます。これは先ほど小泉さんの方からもご紹介いただきました鹿折小学校とキリバスのWar Memorial小学校との交流についてです。昨年度の11月に、3年生から6年生までが学年単位で交流をしました。それぞれ学年のテーマに基づいて交流した訳なんですけど、すごく充実した交流をさせていただきました。仙台ユネスコ協会さん、それからESD活動支援センターさん、それから日本キリバス協会さんと。いろんな方々のサポートをいただいたの實現になった訳です。そういった交流会を11月にやった後に、さあ色々作品交流などもしようと思っていた矢先に、実は交流したキリバスがコロナのためにロックダウンしてしまったと。もう一切何も送れなくなってしまったということを知りまして、そのキリバスの友達のために何かしたいということで、募金活動を行ったんですね。保護者に呼びかけたり、先生方に呼びかけたり、地域に呼びかけたりして、たしか総額で8万円弱ぐらい集まったと思うんですけど、それでマスクを買ってもらおうお金に当てたり、あとはキリバスに物資を送る船賃に充ててもらったりということでやりました。そういったところを、仙台ユネスコ協会さんに称えていただいて、先日7月9日に感謝状をいただいた時のものです。これは直接ケンタロさんに学校においでいただいて、その募金をお渡ししたところ。こちらが仙台ユネスコ協会さんから児童会の方にいただいた感謝状になります。本当に、子供たちもますます励みになった本当に良い感謝状で本当にありがたいと思っております。これは先ほど、一番最初に市瀬先生からお話があったと思うんですけど、このASPnetでアジア太平洋におけるSDGs達成のための協働型アクションリサーチということで、本市から階上中学校が参加させて

いただいております。岡山県の附属中学校、それから東京の第六中学校、そして階上中学校と、3中学校なんですが、その国内の3中学校が、先日岡山の方で報告会を開いた時の、階上中からちょっとお借りしたプレゼンの一部です。階上中学校が防災に取り組んでいるのもご存じだと思うんですが、そういったところと、探究によって着目しているコンピテンシーと。それを市瀬先生からもご紹介があったこのルーブリック。これを通して、どんなふうにし取るのかと。階上中学校の実態としては、こういうふうな事前事後の変容が見られたということになっています。ぐんと伸びていたところ、おおむね伸びているんですが、いろいろ成果が見られているなというところなんです。これは本当に先日、本当に先週は山形の方で豪雨災害があったんですが、その前には宮城の方でも記録的大雨ということで。本当に大崎の方で、岩出山の方で大きな被害が出ました。それも新聞に掲載されているんですが、同じ防災に取り組んでいる階上小学校の方で、これを教材に捉えて、早速三連休明けに全校集会を開いて。そこでこの防災についてのお話、学び合いをしたものです。気仙沼は津波被害が大きかったところなんですね。これまではどっちかっていうと、この津波災害。自然災害の方がメインだったんですが、発生頻度からすると今はこっちが大きいということで、今後は気象災害の方にも大事にしていこうというところに取り組んでいるものです。いろいろ総合とか、そういう子供たちの活動の中にも、気象災害の面をちょっと入れていこうというふうなところが変わってきているようです。これは今年度の大体の計画になっておりますので。これはこんな感じで進めていくことになっています。あとは、RCEの方では三陸ジオというのも入っておりますが、今年度ジオパークの観察会ということで、7月には2回、観察会を開いて。保護者、子供たちも一緒になって参加して取り組みました。それから今年度、気仙沼市のRCE推進委員会に、水産課の方もメンバーに入らせていただきました。生鮮カツオを水揚げ25年連続日本一の気仙沼なんですが、そこでカツオまつりが開かれた時の様子になります。いろいろカツオの全国的な消費量がどんどん減ってきていると。それをどうするかというふうなことが議論されたものです。土佐の方からもおいでいただいて、いろいろ賑わいました。

動画：皆さん、こんにちは。

アサノ：ああ、すいません。これは、今度予定しているプチシェフコンテスト。子供たちがオリジナルレシピを地域の食材を使って考えて、コンテストをするというものになります。こちらはですね、予告なんですが、今度は海洋教育の子どもサミットを11月25日に開催する予定です。今回はふたつのチャレンジがあります。ひとつは、これまでも発表とか話し合いをしたんですが、小学校は小学校だけのグループ、中学校は中学校だけのグループだったですね。それを今回初めてそれぞれのグループを小学生、中学生、高校生が入り交じった。本当にハイブリッドなグループにして、どういう議論がされるのかというところをちょっとトライしてみたいなと思っています。それから、もうひとつは、in 気仙沼なんですが、東北だけではなくて、全国に参加しませんかというふうな募集を今かけているところです。今月いっぱい締め切りになります。ちょっと楽しみにしているものです。只見町からも参加していただけます。よろしく願います。あと、これは探究活動ということで、気仙沼に探究学習コーディネーターというのを4名ご協力いただいているんですが、その方々が中心になって行っている、中学生を対象にした、これは授業以外の放課後とか土日を使ったプロジェクト探究部での活動。こちらは、先生方を対象にした探究ラボというふうなところの取り組みをしています。今度あと、産官学のコンソーシアムっていうのも今、進めてようやく立ち上がったところですので、これから進めていくところになります。最後になりますが、今後の取り組みとして、こういうことを考えております。とにかく学校教育を超えた気仙沼ESDであったり、あるいは幼小中高の一体的な人材育成と。そういったところを、市のガバナンス・ビジョンに基づいて、一緒になって進めていきたい。そういったところの一つの場

として、この円卓会議というのも機能させていただきたいなと思っているところです。ちょっと長くなりましたが、以上で終わります。どうぞ今後もよろしくお願いいたします。

司会：アサノ先生、ありがとうございました。100本ぐらい紹介いただいたような気がしたんですけども。本当に情報量の多いPowerPointに、大変れました。どうぞ質問の方、よろしくお願いいたします。誰かございますでしょうか。お願いします。

：八戸工大の方からまいりました、と申します。、大変勉強になりました。質問ということではなく、すごく共感した部分は、やはり幼稚園から小学、中学と、やはりESDとしても、SDGsとしても。たった今お互いどう対処していくかという、対処療法的なところは十分大事ではあるんですが、未来を支える大人をどうやって育てて。やはりそこは、一番の重要なところではあるかなと個人的に考えていまして、すごく幼稚園の生徒が海に行っているいろいろ学ぶ。やはり継続するには、大人も子供も、やっぱり楽しくて、おもしろくて、嬉しい。こういった体験とか記憶っていうのは、ものすごく大事なんじゃないかなと思っています。っていう話、貴重な機会どうもありがとうございます。

司会：他の先生いかがでしょうか。本当に楽しくて、思い出に残る活動。それが一番かなと。

アサノ：ありがとうございます。

司会：その他、何かご質問とか。はい、それでは浅野先生、どうもありがとうございました。

アサノ：ありがとうございました。

司会：本年度の活動も、大変楽しみにしております。そうしましたら、次はこちらも教育委員会さんの取り組みですが、只見町教育委員会の、今日は会場にいらっしやった。

## 2.東北地方各地域団体からの本年度前期活動のリフレクションと今後の予定について

只見町教育委員会 仲丸和宏

明和小学校長 湯田和敬ナカマル：ありがとうございます。只見町教育委員会のナカマルです。よろしくお願ひいたします。只見からの発表ということで、していきます。只見町では「ふるさと只見を愛し、誇りに思う心を育てる ESD」ということで、を進めているところです。この写真は昨年度の、明和小学校の子供たちが海につながる川をきれいにしたいということで、ます。只見町では、パンフレットを改定いたしました。原稿配布したところなんですが、学校教育初の ESD を社会教育全体に子供たちだけではなくて、町民全体でこう、ESD に取り組んでいきたいなというところ、作っているものです。皆様の、参加されている方のお手元には配布されているかな、何て思うんですが、只見町教育ポータルという所からダウンロード出来ますので、もしよかったら、ご覧になっていただければと思います。それでは 3 ページ目では、福岡県の大牟田市で作成しています大牟田版 SDGs っていうのを参考にさせていただいたんですが、只見町の特徴としては、生涯学習の内容も加えて作ったというところでありまして。これも、やはり町民全体で意識して、進めていきたいなというところになっております。只見町では、皆さんのお手元だと 4 ページにありますように、第 7 次只見町振興計画というところで、教育分野の取り組み、只見町教育振興基本計画というのが展開されています。これを SDGs の観点と結びつけるというところからまず始めたところ。6 ページに関連の見方なんていうのもあるんですが、まず一番上の枠が SDGs の観点になっておりまして、只見町で重点的に取り上げるものについて、それぞれ。只見町では 3 番、そして 11 番から 17 番を重点的に取り組むということで進めているんですが、その下に只見町、特に目指していく SDGs のターゲットをふたつから 3 つ、設定しまして、それについてです。その下の枠は、先ほど教育振興基本計画をもとに、こんな町民、これは子供ではなく町民でということ、町民の、そして町づくりを目指していきたいという目標。そしてそのためにつけていきたい力ということで、載せてございます。真ん中の枠には、ターゲットと関連する教育振興基本計画の基本方針や、施策が載せてあります。施策については、5 ページの方に詳しく載せておりますが、一番下の枠には、それに関連する各項の取り組みというのが載っています。生涯学習の取り組みについても、オレンジ色の枠で載せておりまして。学校教育と生涯学習の連携した取り組みということで、緑色の部分も載せてあるところです。それで、町民の方からは配ったところ、学校の取り組みが紹介されていて良かったなんていう意見だったり、ESD の取り組みが良かった、なんていうことで好評いただいているところです。こういったものを活用しながら町民全体に ESD、SDGs の意識が広がるといいなと思っています。本町教育委員会としてさらに重点としたいのは、この 17 番のパートナーシップというところ。14 ページに、昨年度の取り組みについては載せてあるところなんですが、昨年度から町の企業さん、それから団体さんで、学校と一緒に ESD を進める上でのパートナーとなってくれるような所を声かけて、パートナーになってくれませんかということで進めています。企業さんには、今後 SDGs が中心の世の中になるよというところ、それから学校と協働しながら、学校の活動を一緒に行なったり、それぞれがそれぞれの取り組みを発信したり、企業価値も上がるというところ、SDGs の環境になるよというところ、声をかけているところです。地域の大人がかっこいいというところを子供たちに見せて、将来子供たち、光となるように、そして将来ぜひ只見町に貢献してもらえん子供が増えることを願っております。今後、パートナー企業と団体と学校とで、締結式なども行なって、教育委員会としても学校と企業、団体をコーディネートしながら、進めていきたいなと思っています。先日なんですが、生涯学習事業とし

て、企業研修などをされている方に依頼して、計4回のSDGs講座を実施しております。第1回が開催されました。只見町に入っている企業さんであったり、銀行さん、それから農家の方。の学校教員も含めて、行政の方といったところで参加。10名ちょっとぐらいですかね。そんなに多くはないんですが、参加していただいています。基本理念等を学ぶだけではなくて、カードゲーム等を通して、違う業種の違う視点、考え方を知る機会であったり、つながりの大切さを知ったり、それから誰一人取り残さない世界、そういったところの実感を持ってもらっているところです。最後、今後は只見町でどんな取り組みができるかなというところまで、持っていきたいなと考えています。また生涯学習としては、地域全体で只見町の推進ということはあるんですが、地域の人たちが子供たちだけではなくて、大人も只見町のことを知って誇りに思うことができるように、只見学の講座や、検定に力を入れています。検定の方は、上中初級があるんですが、只見の歴史や文化、それから自然などの問題が出されているもので。今までは小学校さん、全校参加されていたのですが、昨年度から、中学校さんでも全校で取り組んでいただけということです。これを大人の方ということで、婦人会とかサロンと。そういったところに声を掛けて実施していただくようにしているところです。学校教育の方なんですが、学校教育は15ページぐらいから載っています。今年度、学校教育の方のグランドデザインを改定しました。そのポイントとしては、昨年度まで下での、下のところが海洋教育のみだったんですが、海洋教育取り組みを進めてきたところだったのですが、その成果としては海とのつながりを意識して、広い視野で物事を考えることができるようになってきた子供たちが増えてきた。そういった成果があったんですが、さらにその成果を生かしながら、只見町は、もともとユネスコエコパークに認定されておりまして、なぜそのユネスコエコパークに認定されているのか。只見町の自然や文化。その重要性を再認識して、よりふるさとを誇りと、自分へのといったものを育めるような取り組みをしていきたいなと。そしてそれを様々な機関と連携しながら、取り組んでいきたいというところから、ユネスコエコパークを通して学ぶ。それから様々な機関と連携をするという柱を3本柱に位置付けたところです。18ページからは、各校の昨年度までの実践が載せてあります。小学校の、ところなんですけれども、各校の取り組みについてご説明させていただきます。只見小学校さんですが、「ふるさと只見を愛し、多様な人々と共に持続可能な未来を作る新しい児童の育成」というテーマに、ESDの中心である只見学の実践に力を入れてもらっています。只見の人、もの、こと、ふれあいの学習を通して、自分に自信を持ち、地域への誇りを持ち、そして最終的に自己の目標が、夢に向かって着実に伸びていく子供の育成ということで進めているところです。学習以外にも、行事としてダム湖散策や、川遊び、それから登山体験を行なっています。これは田子倉湖散策ということなんですけど、残雪であったり、あとはダムのから、地球全体の水循環を学ぶ機会であったり、あとは身近なビオトープであったり川遊び。自然体験を通して、豊かな生き物の、海との違いを学ぶなど。そんな授業をしています。また実際に海で、町との違いを比べたり、あとはふるさと登山ということで、身近な自然を全身で感じるような、そんな授業もしています。今年度ですが、今年度については新たな副主題として、生活、総合に生かす際に、各教科のこういった考え方を働かせながら、根拠を持って表現できる子供の育成ということで、教科横断的な学びというところに力を入れて研究を進めるということでした。それは今まで他の教科とのつながりが弱いというところのアンケート結果からだそうです。今年度はまず、各教科の学びの蓄積による実践の進化をさせて、それによって次年度、身に付けた見方や、考え方をと関連させていきたいというお話でした。各教科の見方、考え方を整理して、▲（働かせる）授業の充実、子供の声を生かした学習の展開や、関連向上の工夫。根拠をもとに証明するというところに取り組みされるということでした。朝日小学校です。朝日小学校は、つながりの中の育み、学び合い。未来

に向かって行動できる子供の育成をテーマに、只見愛を育てる。朝日小学校では郷土を愛する教育観点だけではなく、只見愛の中では、自分や家族にも自信や愛情を持つということも含まれています。授業の主体性を高めるための、ファシリテーション型授業、それから関連構想の工夫を今年度進めていきたいというところでした。昨年度もファシリテーションについては取り組まれていたんですが、のとして、主体性が高まっているという結果。それからつながりを意識した主体的な学びが生まれたというような結果が出たそうです。ただ、それには教師のコーディネート力の向上が必要であるという課題も生まれたということですので、今年度そういったところを中心に、研究されていくというお話です。ストーリーマップを作っておりますので、それによって見通しを持った一年にしていきたいというところから。低学年の方で、海とのつながりを意識しにくい。中高と海洋教育。海とのつながりを意識させるような取り組みであったんですが、低学年が、そこが弱いということなので、低学年についても、海へのあこがれを持てるように、授業に取り入れていけるとな、なんていうことを。明和小学校さんです。明和小学校さんは、学び続けながら自立へと歩みを進めていく子供の育成。教科横断的な見方で、深い学びへと導くESD 海洋教育ということで。昨年度まで、多面的な見方を視野に、単元構成やコーディネートの工夫をされていたことだったんですが、それが指導者中心のものだったということで、やはり教科を超えたところで、実生活と関連することを子供たち自身が認識するというのが、なかなか難しかったということでした。今年度は、教室内に常時ストーリーマップを掲示にしたり、そういった活動内容を各教科のつながりを子供たちが書き込んだりしながら、そういったところで意識させたいというお話です。また、地域素材の可能性を広げる外部施設の活用ということで。の全体協議会の中で、地域の施設である▲（村センター）の方、それから役場の方をお招きして話を聞いてアドバイスを受けるなど、地域でということ、利用されております。ちなみにこれはストーリーマップというところなんですが、Climbing Routesと明和小学校では呼んでおりまして、1年間の総合の流れをこんな形で。これはあくまで例ではあるんですが、1年間これを改善しながら進めていくもので作って行っています。只見中学校です。只見中学校は、持続可能な只見町を作ろう、自然からの発信ということで。令和2年度、プロジェクト学習ということで、さまざま取り組んでいらっしゃいました。それが新聞紙エコ袋であったり、SDGs バッジ作りであったりです。令和3年度は、その活動の精選ということで、精選を図って、今年度からカリキュラムを整えようということで、進めていらっしゃいます。1年間をかけてカリキュラムを整えていって、次年度からということなんですけれども、ストーリーマップということで、14ページ目です。職員室に掲示して、総合と教科で、横断的に取り組める物について、先生たちがその都度書き込んでいくというをされています。また地域ネットワークの活動ということで、地域合同防災訓練、新聞紙でエコ袋を作ろう、▲（ネット）袋の作成などを、地域の方に主に発信してもらったり、地域の方と一緒に作ったり。こんな活動もしています。今年度新たにですが、これも皆さんの所にお配りしたマグネットがあるかと思うんですが、PET Free Mondayという、月曜日はペットボトル飲料を飲まないデーという活動を進めているようです。ペットボトルに入っている冷蔵庫に、このマグネットを月曜日に貼って、ペットボトルを飲まないようにしようという。ペットボトル飲料を減らしていこうというような取り組みだそうです。ここに、上にキャラクターを作って、この。今後、このLINEスタンプなんかもこれで作って。楽しみにしているんですが、取り組みがみんなに広がっていくということで。また、気候非常事態宣言ということで、本当に全国の中学生でもいち早く非常事態宣言を出されたり、ゼロカーボンデーということで、。一緒に取り組んだりしているということで、様々な活動をされています。また今年度は、▲（村センター）の館長、先ほど申し上げた▲（村センター）の館長や、町長をお招きして、講演会を開いてもらって、町の今後の未来について、考えていく

なんていう ESD に取り組んでおります。あとは今年度、2 年生が▲（産業ベース）で学習しているということで、教育の化ということをして、田んぼで米を作って。その米でを作れる。を作って、それをさらにサービス業に生かしていくなんていう授業を考えたり、また、先ほど先生からもありました、生徒のキャリア教育という視点で。やはり ESD/SDGs の学びと、キャリア教育っていうのは、なかなか結びついていないんじゃないかという昨年度までの反省を生かして、▲（グリーンアップ）というものに取り組んで。自分自身の夢と、ESD を結びつけながら考えていこうというキャリア教育の充実を図ってきたいということでした。これについては、1 年生と 3 年生で取り組むということなんですが、1 年生で描いた夢と、そして 2 年生で、企業体験等で、3 年生でもう一度やって、夢の変容というんですかね。そういったことと。こんな授業もしたいということでした。それで、これら町の取り組みとして、昨年度もお話させていただいたんですが、やはりこの子供たちの自己肯定感。そういったところに ESD の成果が現れているんじゃないかなということがあげられます。これは全国学力・学習状況調査の物なんですが、全国の、「これは地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか。」自己肯定感ではなかったですね、すみません。というところでは、全国では 17.8、福島県では 19.1 に対して、当てはまるところ只見町小学校のものです。また先ほどいった自己肯定感ということで、すみません。ここは自己肯定感ではなかったですね。自己肯定感についても、80%ぐらいの子供たち、80%、90%の子供たちが、自己肯定感が高いと。自分のことが好きというような、自己有用感ですね。答えております。特に中学校の方では、結構自己有用感が下がっていくなんていう、子供が多いんですが、只見町の中学生は、本当に自己有用感を高く持って、学習、実生活に、取り組んでいるということです。というのは、ESD を通して、やはり地域に関わって、地域や地球の課題に向き合って、その解決を図ると。行動するところで、地域の方たちや多くの人に認められて、それがまた次の学習に生かされるという、生のスパイラルというのができあがっているところかなというところで捉えております。只見町の教育っていうのは少子高齢化、過疎化という大きな課題から生まれてきた ESD。それを地域全体に広めて、只見町、ユネスコエコパークに暮らす町民全体が、ふるさとの良さというのを再認識して、愛情と誇りを持ちながら、生涯にわたって心豊かに生きていく。そんなところを目指しております。最後になります。多様なステークホルダー、それからネットワーク。そして町を超えたつながりで、ESD の取り組みがさらに広がって、深まっていくことで、さらに只見の ESD 広がって、深まっていくのかなというところなんです。学校はもちろん、地域全体で取り組んでいきたいなというところなんです。最後にですが、これはただみ・モノくらしのミュージアムというのが 7 月にオープンしました。只見町では、自然環境、大変豊かな自然環境ビジターもあるんですが、その中で豊かな生活を送ってきた人々が作った、そして使ってきた民具というのが沢山出ておまして。特徴的なのが只見町の人たちが集めて、その人たちが記録をして。カードを作って。それが特徴的で、只見方式という収集記録の方法が生まれているんですね。それらのものが認められて、国指定の重要有形民俗文化財 2,333 点指定されました。それがこのミュージアムの中に収容されております。なかなか見ることができない貴重なものが見られるということではありますが、こういったところも、本当に ESD につながる、SDGs につながるものなのかなと思っております。パンフレットにも。また町では、今年度から薪エネルギー推進室というのが、役所内にできまして。ゼロカーボン、只見町で本当にたくさん木材を使って、ゼロカーボンを目指した取り組みなんていうのも進んでいます。これも、子供たちの ESD の中から、町民が気付かされて生まれてきたものなのかなと思っております。町全体で取り組む、。私の方から以上です。只見中のメグロ先生、。ですが。

司会：先生、ありがとうございました。。。。お願いします。

阿部：ありがとうございます。山形 ESD の阿部と申します。今日はありがとうございます。只見町さんの取り組みではすごいなと思って。私が住んでいる山形市では、できればな、なんて思っている所なんですけれども。以前お話を聞いた時に、ホームステイのお話。それが今どうなっているのか気になったので、教えていただければと思いました。

ナカマル：ありがとうございます。只見高校の中に、山村留学の取り組みの中で、ホームステイ等があるかなというところで、昔発表したことがあったかと思うんですが、今も山村留学ということで、只見町町内から毎年 10 何名ぐらいですかね。町外の中学校を卒業して、寮に入って、一緒に生活するというようなことをしています。ホームステイというのは今、やっていないところなんですけど、この高校生、今年度ももちろん、いろんなところに出向いて体験をしたり、あとは町の方と関わったりするようになっていうところを、山村留学のいます。米作りを手伝ったり。はい。そういった町以外の方が、どんどん町に関わってきて、最終的に高校から町役場に就職したりなんていう子もいるので。ぜひそんなところでどんどん関わっていけるといいかなというか。。

司会：はい、その他いかがでしょうか。、、いただきました。斐太北小の飯塚先生ずっと熱心に聞いていらっしゃるんですけども、何か雑音が。。斐太北小の飯塚先生いかがですか。

飯塚：斐太北小学校の飯塚といます。どうも、参加させていただきました。ありがとうございます。感想なんですけども、非常に私たちの学校は、只見町さんの環境に非常に似た、どちらかという過疎地域でありますので。色々なものを見させていただいたり、今お話させていただいたものを参考にしながら、私たちユネスコスクールの加盟に向けて取り組んでいるまだ段階でありますので、また色々教えていただきたいなと思っております。よろしく願いいたします。

司会：はいありがとうございました。良かったらぜひ、仙台の方にもいらしていただければと思います。はい。それでは次の発表は、山形の ESD 研究会さんになります。はい、準備の方はいかがでしょうか。

## 2.東北地方各地域団体からの本年度前期活動のリフレクションと今後の予定について

やまがた SDGs・ESD 研究会

新宮濟、小関直幸、阿部大輔、阿部友幸

阿部：私の方から発表させていただきますが、聞こえますでしょうか。聞こえますか。

司会：はい、聞こえております。

阿部：はい山形大学付属特別支援学校の阿部と申します。よろしく申し上げます。早めに画面を共有させていただきます。見えますでしょうか。私、やまがた SDGs・ESD 研究会というところで活動しております。今年度前期活動のリフレクションと、今後の予定について紹介させていただきます。初めに日頃から東北地方の ESD 活動支援センターの方々には、実践発表の場を提供していただいたり、またご指導いただきどうもありがとうございます。先に発表された3つの団体と同列に扱って頂いて大変恐縮なところがありますが、紹介させていただきたいと思います。本会の特色としましては、教員のみの実践集団というところかなと考えております。本日ですが、これまでの活動、集団での活動。あとは個人での活動はいくつかありますが、3事例に絞らせていただきました。こちらと今後の展望ということでお話させてください。初めにこれまでの活動に関してですが。今回ですが、奈良に住んでいると言うか、奈良に勤めている新宮先生という方が、ESDを自分の地元、山形に広めたいという思いがありまして。そこから2020年の8月に発足して、今年度は3年目になります。メンバーは、現在のところ14名です。これまでの活動について概略を説明します。1年目ですが、奈良教育大学、近畿 ESD コンソーシアム主催の ESD ティーチャープログラムというものに参加をしまして、SDGs、ESD の理論をここで初めて学んだ教員がほとんどでした。そちらの方で指導案を作成したり実践の方を行って、1年かけて7名が ESD ティーチャーという資格の方を取得しております。その次に2年目ですが、ESD ティーチャーを取得した7名が、そのままその上のランクの ESD マスターという資格取得に向けて取り組みました。また、こちらの ESD マスターになる人がそれぞれ新しい仲間を個別に募り、その新しく来た2期生にあたる人が7名。ESD ティーチャーの方を取得しております。写真の方は、奈良教育大学のナカザワ先生に山形に来ていただいて、ご講話いただいたり。あとはナカザワ先生、オオニシ先生含めて実践の方を、指導案を見ながら検討している写真が載っています。集団での活動ですが、前期活動というところだと、全員で検討したんですけども、合計3回だけやっていたところがありました。1回目は4月22日にオンラインで夜行っています。こちらは、今年度どの学年持ったかとか、どんな授業でどんな ESD の実践をしたいかっていう実践の相談が主でした。7名参加しています。2回目ですが、なかなか対面で会えない中で3名のみ、実践案の相談の方をしております。3回目はつい先日ですが、8月1日にまた夜オンラインで交流しまして、今日発表させてもらう阿部大輔先生の経過報告であったり、あと私のこの発表についての相談であったりを5人で行ないました。それと別に、今回一期生の1名が ESD スペシャリストを目指して活動してしまっていて、あとは2期生の2名が ESD マスターを目指して、ESD ティーチャープログラムの方に参加しているということです。そして、個人での活動の紹介に移ります。まずひとつ目ですが、本日参加していませんが、岡崎亮先生という山形市立第三小学校に勤めているので、今年度は大学院の方で。

阿部：岡崎先生ですが、昨年度の実践となりますが、小学校6年生の児童に対して、「立谷川花さかじいさんの思い」という道徳の授業を実践しています。そちらですが、立谷川の不法投棄をなくす目的

で、河川敷の整備をする方の思いというものを小学6年生の方が聞いて、自分の行動の変革の方につなげていくというふうな授業でしたが、そちらの方、昨年度の取り組みでもありましたが、5月にESDティーチャープログラムのセミナーの方で、優良実践として全国の先生の方に紹介しています。また、右下に写真がありますが、5月にYTSという地元のテレビ局の方で特集を組まれ、放送されました。次に、本日も後から実践計画発表する阿部大輔先生の活動に関してです。小学校6年生の「総合的な学習の時間を中心とした平和の学び」に関してです。詳細の方は後からお話しいただきますので省きますが、広島市の平和教育に関心を持って、広島市の小学校とオンラインで交流したことが、6月にNHKで特集されております。画像の方がこちらです。そして3つ目。本日オンラインで参加しています。小関直幸先生の活動に関してです。こちらは小学校6年生の県の出前授業で、土砂災害について学ぶ実践です。小関先生、今年は教務主任として勤めていますので、学級担任ではないんですけれども、実践されました。寒河江市立醍醐小学校というところなんですけれども、敷地内の一部が土砂災害警戒区域に入っているということで、学校の方で6年生に防災の勉強させたい、誰かいないかというところで、小関先生が手を挙げたそうです。県の出前授業の方に申し込んで採用されまして、土砂災害の仕組みとその危険性の方を理解することにつながったそうです。7月にはこちらもYTSの方で特集の方が組まれて、放送されています。ここで3人の例を挙げたんですけれども、私も特集などはされてはいませんが、特別支援学校の方で、飢餓に関する実践の方を生徒としていたりとか。あとは他の教員の方も個々の活動の方は取り組んでいるところです。今後の展望に関してですが、それぞれ成果と課題の方をお伝えしたいと思います。ひとつ目ですが、個々の教員の自主性を大切にすることに関してです。一人一人が各々の学校の実態に合わせたESD実践の方ができており、メディアとか研修会の方で発信ができました。ただ、教員集団だけでは活動に限界があるということを感じているところです。個々の教員の自主性を大切にするっていうふうなところが、本会のいいところかなと思いますので、そちらの方を生かしながらも、他の教育機関とか、あとは団体とのつながりが欲しいなというところを感じています。ふたつ目です。集団で学びを深めることに関してです。これまで2年連続で実践交流会の方を実施しています。こちらは年度末の3月に、指導案を書いて実践をしたものについて、一人ひとり発表するという流れで、ESDティーチャープログラムの流れの中で行いました。ただ、今年度に関しては、まだ予定の方が決まっていない状況です。メンバーでも予定が合わないなどの理由から、定期的に集まれていないというのが現状です。あとは他にもESDに関心のある方とつながったりとか、もしくは関心がないけれども、関心を持たせたいかというところで、交流の場を広げる場が欲しいなと考えています。3つ目が地域資源の発掘、共有化をするということに関してです。先ほど東北ESD活動支援センターの方が見せてくださった地域資源の発掘に関してだと思うんですけれども、山形にあまりこう矢印がなかったような印象を大変受けまして。それぞれの教員が魅力ある地域資源とか、関係機関の方を見つけてはいるんですけれども、それを集団で共有したり、広げたりっていうところまでは、まだできていませんので。そういうところまでできると、さらに教員個人だったり、学校の方にESDを根付かせていくことができるのではないかなというふうに考えていますが、こちらの三角をつけたところが、特に私たち教員だけではなかなか考えが及ばないところ等もありますので、もしそういったところに関して、これからご指導いただいたりできれば幸いです。はい、すみません。短いですが、以上で発表を閉じたいと思います。ありがとうございます。

司会：三角のところについて、ありがたいですけれども。もうひとり、素晴らしい活動で、山形でもESDしたいなと。海藤さんどうですか。。教員集団で頑張っているんですが。。

海藤：られてしまいました。小中高大、いろんなところで現場の方に携わっていましたが、やはり学校の先生は忙しいので、私が今、こういうふうに学校で、総合の時間ですけど。事前準備とか、振り返りを作っただけのような。そういう人が学校にいれば、先生としてもやりやすいのかなと思って、次のゴールを見ながら。また次の年、またその翌年というふうに授業を組んでいって、実践。そのうち発表しているかもしれませんが、3年でぐるぐる回していくと。縦割り学習をしていく。その中で、共通の地域の宝を探していったり、それを誇りに思ったり。ただ守るということではなくて育てるといふような、そういう地域人材を発掘していくということにつなげていく。私の住んでいるところも、過疎の町でございますが、そういうところでやるやり方と、先ほどお話がありました柊江さんですか。仙台であるといっぱい施設も、箱もありますし。そういうところを利用する気になれば利用できると思うんですが、こういう小さい町だと、なかなかそういう、箱がないので。あとは人をいかに引っ張りこむか。そういうことが大事で。学校もコミュニティスクールになったので、こういう体制も見えてきていますので、そういうコミュニティスクール、そういう協議会、メンバーの人たちをまた引っ張りこむというような、そういうエネルギーがある人たちを各学校さんも見つけていくと、いい形になっていくのかなとは思っています。只見さんは、地域の高齢者の方たちをうまくであったり、こういうことにいるので、やっぱり地域の人活躍できることと、学校の授業の観点の、先生は押し付けて、あとはお願いしてしまっている。そういう形で、いろいろとつながっていくのかなと思いますので、まずは先生同士の主体でやはり、一人ひとりの子供が社会をどう捉えるかとか、各地域をどう捉えるかということが一番念頭に、教育。市瀬先生がおっしゃったように、学びは社会にどう関連していくか。その辺が一番大事なのかなと思います。只見さんも、キリバスとかとやっておりますが、国際理解ということで、今年もシンガポールと去年交流したんですけども、同じ日本人学校だったので、同じカリキュラムをやっているのに、何でこんなに、何でしょうね。自発的とか、主体的とか。そういう発信力とか。そういうのも、やっぱり同じ日本人なのに、違うなんていうところでびっくりしているところもありますので、そういう意味で、やはり子供同士がこういうふうにつながって、発表していくみたいな。そういうところも、もっとやっけないと小規模だったり、過疎地のところだと、地域の参画で、なんとなく重いものを背負ってしまうので、同じ世代の関連、そういう前提の学びをやっていて、現在どういうふうなことができるのかといったようなことも、そういう交流で学べるといいのかなと思います。市瀬先生が言ってほしいことと違うことを言ったかもしれないですけども、そんなところでよろしく願います。私も七ヶ宿なので、山形近いです。。。ありがとうございます。

司会：急にコメントをすみませんでした。最後言ってくださった自分たちと違うお子さんと交流するっていうことですね。子供の学びを飛躍させるっていうことは、このコンソーシアムの中でも何回か出てきたお話で。大変ありがたいことを言っているかなと思います。はい、阿部トモユキ先生ありがとうございました。

阿部：ありがとうございました。

司会：ぜひそして活動支援センターも応援して下さると思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

阿部：よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

### 3. 個々の教員による本年度の実践計画発表

山形市立千歳小学校 阿部大輔

司会：それでは最後に、今度は個別の教員が発表して、それに対してコメントをいただくということになっております。はいそれでは今回はても平和学習ということで。大変興味深いテーマですね。阿部先生、よろしく願いいたします。

阿部：山形 ESD の、山形市立千歳小学校の 6 年生を担当しております阿部大輔と申します。よろしく願いいたします。私は小学校 6 年生の総合的な学習の時間で、先ほどもお話ありましたけれども、ウクライナ、ロシア情勢というか、そういったところがあったので、今年度の総合では、16 番の「平和と公正をすべての人に」を。平和とは何かということをお子たちと考えてみたいなというふうに思い、今 1 学期を終えまして、1 学期までの実践と、これからどうしていくかというところで、皆さんに教えていただければなと思いますので、よろしく願いいたします。まず今回 16 番ということなんですけれども、4 番、17 番も関係しているのかなと、自分としては思っているところです。私事なんですけど、先ほどお話があったように、山形 ESD として 2 年前から学ばせていただきまして、まず 1 年目に今持っている 6 年生が 4 年生の時なんですけれども、地域の伝統文化である田植え踊りについてを広めるということで学んだことを総合でやっていきました。その中ではこの無形文化遺産の、アジア太平洋の方たちと関わらせていただいて、発表させていただいたんですけれども、地域の田植え踊りというものがあるって、それとどう関わっていくかということをお子たちと考えるようになっていきました。その時には田植え踊りの伝承者にはなれないけれども、サポーターにはなれるよねという学びをしたところです。これは地域の宝であるという、なかなか先ほどの只見町さんとか、そういったところのように、地域の宝とか、地域について、なかなか子供たちも教員も、目を向けられない部分もあったので、そこに目を向けさせて、いけたかなというふうに思っています。SDGs との関連としましては、11 番の「住み続けられるまちづくりを」のところでした。昨年度、5 年生の時には、食品ロスについて。食べ物についての見方、給食がきっかけだったんですけれども、隣のクラスの先生が一所懸命残った残飯じゃないな。まだ配っていない給食を、みんな食べる食べるって配っているのを見て。何か僕が目指すものではないなというふうに思って。僕はどっちかという、子供たちが自分たちで、残さないように取り組もうとか。そういう姿がいいなと思ったので、この総合の時間を通して学べないかなと思って実践したところです。写真は、こういうふうに、子供たちが残った残飯を、丸缶っていう汁物を入れる缶に入れて。毎日どのぐらい残ったかを調査して、これ保健室の体重計なんですけれども、それを記録化して行って、自分たちがどのくらい残したかっていうことを視覚的に捉えていくとどうなるのかなというところから始まったところです。いまだにこれは 6 年生になっても、今同じクラスを持っているんですけれども続いていて。食品ロスの勉強が終わったわけではないんですけれども、子供たちの中では続いているようで。残すなとかそういうことではなくて、食べられない人もいますので、極力、作ってくれた人の思いであったり、そういったところを意識できるようになったのかなというふうに思っています。昨年度は、たまたまこういった会で出会いました沖縄県の中学校の、北谷中学校も食品ロスについて学んでいるということでしたので、それだったらお互いに学んでいることを交流できないかということで、意見交換会をしてみました。そうすると、その時の冬、12 月にやったんですけれども、沖縄県はその時 22 度ぐらいあったんですかね。でも、僕たちは雪降っていますみたいな感じで。そういったオンラインによって、住んでいる地域について学んだりとかもできるんだな、なんていう新たな発見ができました。その時に、中学生との交流だったので、私たちはすごく学びしかなかったんですけれど

も、話し方であったり、スライドの使い方であったりとか、そういったところを学んだり。あとはなまっている。私たちは山形弁で、あちは沖縄の言葉でなんていうところもあって。そういったところも学びになりました。お互いにこれからどう食品ロスに取り組んでいかなんていうところもあって、宣言をしあったところです。これがカリキュラムで作ったものです。12番に当たるところかなと。「つくる責任、つかう責任」について、学んだところです。今年取り組もうとしたのが16番なんなんですけれども、SDGsの項目で、私はどうしようかな、なんて、子供にどうやって落とし込んでいこうかなと思った時に、内容が難しいなと思って。平和と言っても一人ひとり、捉え方も違ったりするところもあるので、そこは難しいなと思いつつも、子供と学びを進めたところです。最初は社会科の政治の学習があったんですけども、そこで平和主義について触れまして、平和な社会を作るためには、選挙っていうのも大事なのではないかなと私は考えていましたので。まず国民主権というところで模擬選挙やったり、租税教室というところをに借りてきてやってみたりして、選挙に対する意識っていうところも、ずっとつけてみました。教科書に平和への誓い。ちょうどタイムリーに、今日の8時から、僕も見て入れたんですけども、あったんですけども、平和への誓いっていうのが、広島市の6年生がみんな書いて、それから選ばれた2名ですかね。代表で今日もしゃべっていたんですけども、そういったのがあるなんていう話を社会でやりました。子供たちとは、総合の時間に今年何の勉強をしたいかな。去年、伝統文化であったり、食品ロスについて勉強してきたので、今年は何がいいかななんていうことを板書しながら話を進めていきました。何回か話をしていったんですけども、子供たちから出てきたところだと、平和についてもっと知りたいなと。沖縄の人に話を聞けないかなということ。もう一個はウクライナ、ロシアのニュースとかもタイムリーでありましたので、それを調べ学習とかでやってきた。子供たちは、ユニセフという言葉が出ていて。ユニセフってどんなものなのかな、実際にユニセフの人たちと話をしてみたいな、なんていう声があったので、このふたつを軸に学習を進めていこうと計画を立てました。ふたつの柱で、右側の赤い方は広島市の小学校との交流。これは私が調べて、原爆ドームが付近にある小学校に電話をして。ちょっとこういうことをしているんだけど、ちょっと学ばせていただけませんかっていうことを言ったら、この中島小学校さんの隣の小学校は、他の県からも平和学習について、修学旅行とかで来るようなアウトプットする場がある学校だったそうなんですけれども、中島小学校さんはそういうことをしたことがなかったということで、ぜひ教えてくださいということで話をさせていただいて、進めることができました。オンラインを通じて交流させてもらって。あとでスライドもご覧いただきたいんですけども、どういう被害があったのか、あとは広島パークとか、そういった復興の部分であったり、そういったところを教えていただきました。その後、どう持っていくかっていうところで、やっぱり山形の平和についても学ばなきゃいけないんじゃないかなということと計画を立てました。もう1個の方は、ユニセフとの交流ということで、ユニセフ協会さんに電話したところ、山形市出身の大学生の方が、ちょうどそういうお話ができるということで、山形市の先輩として、ユニセフってこういうものなんだよとか、あとは子供たちでも日々学習できなくて、水を運んで1日が終わるような子供もいるんだよ、なんていう話をさせていただいて、そこから自分たちには何ができるのかということを考えていければいいな、と思って進めました。広島の小学校とは6月に交流させていただいて、広島の人たちっていうのは、1年生から6年生まで平和学習を当たり前のようにしているんですけども、私たち山形では、もうちょっと頑張らなきゃいけないのかなと、私としては感じたところもあって、もっと学ばなきゃいけないかなということに、学習を終えてなったんですが、実際にこんな感じで、オンライン交流をしまして、いくつかの班に分かれて、あちらの中島小学校さんの6年生が、私たちにプレゼンしてくれました。この中で先ほども言ったんですけども、復興の場面で広島カープの優勝とか、そういったものがあるんだよ、なんて聞き

ました。今日、広島市の小学生は、登校日ということもその時に知りまして。これが、今回代表になった方もその中にいます。あるグループは原爆投下についてまとめたグループは、広島市で落とされたらこのぐらいの被害があったけど、千歳小学校に原子力爆弾を落とされたら、このぐらいの範囲だよ、なんていうふうに、具体的に地図を使って教えてもらいました。その中で山崎さんという方が、今日代表者として発表して。これは今日撮って来たんですけれども、記念式典の中で、このふたり。中島小学校の山崎さんがしゃべっていて。その中で、僕も平和についてちょっとぼやけているところはあるんですけれども、彼女が言う話ってというのはすごく響いて。平和について、たくさんの人に伝えることを自分の周りの人も大切にして、互いに助け合うこと、その思いを沢山の人に伝えること、自分も周りも大切にして、互いに助け合うことってところが、自分たちが訴えていきたいところだっていうことを、今日も言っていました。実際にオンラインの中でとっても印象的だったのは、私のクラスの子供が、広島の小學生に、皆さんにとって平和とは何ですかって聞いた時に、この今日お話しした山崎さんが、温かいご飯を食べられたり、暖かい布団で寝たりするのが、当たり前だし平和だと思うって言った時に、私たちはシーンという感じで、何も言えなくなったというか、考えさせられて。そのあとに、山形にとっての平和って何ですかって言われた時に、僕もそうなんですけれども答えられなかったということで。山形でも原爆について、地域の人たちに伝えてほしいっていうところと、あとは山形にとっての平和ってというのは何なんだろうっていうことを考えるきっかけになりました。その時の板書なんですけれども、としては、山形の人にとっての平和とは何だろうっていうことになりました。もうひとつのあちらの方で、ウクライナの方なんですけれども、これは山形だと結構メインストリートってのが乏しくなっております。イオンとかに子供たちはよく行くんですけれども、そこでウクライナの募金活動なんていうのもあります。子供たちの言葉から、こんなことをしているよ、なんていう。あとは調べ学習でユニセフについて調べたり、あとは募金。これからしていくかと考えているんですけれども、緑の羽根募金で、児童会活動でしている。そういったところがつながっていくなと考えました。どうして戦争をするのだろうか、あとは難民っていう言葉が出てきたので、そういったところを聞こうということで、オンライン学習に進みました。それで先ほど言ったナカザワさんに、いろんな動画とかを見させていただいたりして、結構話を聞いているとSDGsの話にもなるな、なんていうふうに考えていたんですけれども、分かりやすく説明していただきました。各教科との関連としましては、図工であったり、図工で、その平和についてイメージを描いてみたり、あとは国語。これは広島の小學生からも言われたんですけれども、5年生で「たずねびと」という教材を学んで、6年生の教科書の最後に「平和のとりでを築く」というのがあるので、ぜひ読んでみてくださいということで。読み物教材なんですけど、私は専門が体育科の表現なんですけれども、一昨年は「モチモチの木」っていうもので、去年は「ごんぎつね」を心情表現。物語を捉える心情表現をやっているんですけれども、今年も表現をするということで、こういったものがあって。それを読み聞かせして、自分でイメージを持って、身体表現をすることによって、また別の捉え方ができるんじゃないかなということを考えております。これがワードクラウド。テキストマイニングで、先ほどの物語文を読んだ後に、どうい。子供たちの書いた文章で、どう思っているのかなってところがわかるんですけれども、こういったことを思っているんだなということで、ちょっと学級に返しながらか、これから表現につなげていくという流れで。これは廊下にこういった掲示をしながらか、日々意識できるようにしております。これからの流れなんですけれども、一学期の最後に教頭先生から「皆さん平和について勉強しているみたいだけれども」っていうことで。毎年、私たちの学校では、春に桜の木の下で写真を撮って、通知表の表紙にしているんですけれども、その後ろに実は、戦没者の慰霊碑がありまして。僕も全然知らなかったんですが、それを紹介してもらって。そこを一学期の最後に調べまして。そうしたら、後ろに

大東亜戦争とか、太平洋戦争で亡くなった人の名前がこうやってびっしり書いてあって。こんなものがあるんだということで、地域の素材ということを取り上げたかったんですけども、学校の敷地内にこういったものあって。二学期はこの慰霊碑をしのぶ会場として、10月に毎年慰霊祭をしている地域の方々がいるということだったので、その人とコンタクトしまして。二学期はその人のお話をしたり、慰霊祭に子供と私とで、何人かで参加をしたりとかして。今度は広島から山形の方にも目を向けて行きたいなというふうに考えています。その他にも、霞城公園というところが山形市にはあるんですけども。これは、僕の妹が山形舞子っていうものをしておりまして、これ見に行った時のことなんですけれども、ここにもこういうふうに戦争についてのものは残されているんだなというところ。私自身の意識、戦争に対する意識というか、そういったところも広がって、見落としているところってあるんだなというところを学んだところ。この学習としてまとめますと、まずは地域の戦没者に対する慰霊祭を行っている方と関わって、千歳地区の戦争をしていた時代について、学んでいきたいなというところ。あとは、今日の放送があったので、それを録画しているので、それを子供たちに返して、また山形の戦争。まあ山形は、疎開とかっていうところがあったという話は聞いているので、そういったところも学んで、またオンラインで中島小学校の皆さんには申し訳ないですけど、もう一回関わっていただいて、今度は私たちの方からプレゼンをするという形にしたいと考えております。あとは体育が市の公開でありまして。来年全国の大会、公開なんですけれども、この中で表現のイメージを身体表現して、具現化、表出して、学びを深めたいと考えております。この間、山形 ESD で話した時も、最後どういふふうに持っていかってというのはどう考えているんですかっていうお話があったんですが、そこは私の中でもすごく悩んでいたり。一人ひとり子供たち、ルールを持ってはいいと思うんですけども、今のところ私たちの日々の生活は当たり前ではなくて、思いやりの心とか、感謝の気持ちを持って、平和を願ったり、色々しゃべったりすることが大切なんだというところまでいければいいなと自分の中では考えております。そういった、日々悩んでいるんですけども、今日の広島市長さんの話の中で、「他人の不幸の上に、自分の幸福を築いてはならない、他人の幸福の中にこそ、自分の幸福があるものだ」というトルストイの言葉であったり、あとは広島で開催する、平和主張会議の中であった、「幸せに暮らすためには、戦争や武力紛争がなく、生命を危険にさらす社会的な差別がないことが大切である」ということがあって。色々差別の問題とかもいろいろ関わってくるのかなというところで、自分も平和について学びながら、子供たちと学習を進めていきたいなというふうに考えているところ。最後にですけども、七夕祭りがやられていると思いますが、花笠祭りも昨日から始まりまして、山形は。僕の妹が参加していたので行ってみたんですけども、コロナ渦でいろいろ人は集まれない中だったんですが、やっぱり人がこうやって集まって踊ったりとかっていうところは、でしたので、ところを学んだところ。山形 SDGs も、というふうに思います。よろしくお願ひします。

司会：どうでしょう。何かご意見、コメントをいただけるとありがたいと思います。じゃあナカマル先生、お願いします。

ナカマル：ありがとうございます。はい、貴重な実践の報告をありがとうございました。本当に、広島の学校に声をかけたりとか、ユニセフに声をかけたりとか、本当に先生の行動力が、子供たちにいい学習しているなというところ、教科横断的に進められているなというところ、素晴らしいなと思って聞かせていただきました。最後どうするってことで話があって。ちょっとそれに関わるかな、なんて思うんですが、やっぱり ESD を進めていく中で、私自身、最後行動まで移せるといいな、なんていうところを思っているんですね。例えばですが、只見の。最初の頃、昨年度に実践したところだと、食品ロス、まさしくお話されたところで調べ

て。全校生にやはり呼びかけて、掲示なんかして。これぐらい残ったということで、記録を取りながら呼びかけていって。それを福島議定書というところで、福島県のところに発信して、賞をいただいて。それで子供たちに自信持って。さらに活動につながったなんていうところもありました。発信というか、そういったところまで力を入れて行動をさらに進めていけるといいのかな、なんていうところを思ったところですよ。なかなか平和だと難しいかもしれないんですが、いいかなと思います。ありがとうございました。

阿部：ありがとうございます。

司会：その他コメントございますか。海藤さん、お願いします。

海藤：コメントではないんですけども、これは活動支援センターの、いわきユネスコ協会さんは、ユネスコ平和作文コンクールっていうのをずっとやっています。やはり入賞する児童生徒の、受賞する方たちは、やはり親戚に広島の人がいるだとか、広島に実際行ってとかっていう、やはり自分ごとになっているという作品が入賞するわけですね。ですから、先生の熱意が子供たちにどういふふう伝わって、自分ごととして調べ学習をしたり、今度の広島に連れて行ってぐらいの、こういう子供たちが出てくると、やはりそういう教育につながってきて、将来も期待できるのかな、なんて思っています。

阿部：ありがとうございます。

海藤：なので、いわきさんの。

司会：ありがとうございます。では恐縮ですが、私の方からも。先生がやられた実践の中で、特に表現を使われて。感性でわからせようと、こういうふうにわかってもらおうとされている表現が非常に、すばらしいなと。そして今、地域で地元の文脈でもしている。のナカマル先生と同じなんですけれども、やはり子供がどう変わっていくのかというところ、一番 ESD のしているところかなと思っているんですけども、特に最初の話がされていましたよね。ESD っていうのは、自分自身が、子供たちが主体となって、世の中を変えていくという部分があるのかなとです。今回平和についても、なかなか日本人の子供は弱いんですけども、自分自身が他人と話し合っ、共存して、社会をより良い方向に変えていこうとするんだと。そういう姿勢が、この平和教育の中から生まれてくるのであれば、学習は成功するんじゃないかなと。話し合っ、一緒になって、、、、取り組んでいこうという。そういう姿が見えてくると非常にかなと思えました。。その他いかがでしょうか。それでは、2 時間半で予定しておりましたので、10 分ほど過ぎてしまっているんですが、最後に本コンソーシアム副会長であります、サイトウシュウイチ先生に全体を通して、、。

サイトウ：はい。コンソーシアムのサイトウシュウイチです。今日は本当にご苦労様でした。こちらに来られた方、あるいはオンラインで参加された方、長時間にわたり本当に御礼を申し上げたいと思います。若干時間をいただきまして、

阿部：すみません、市瀬先生、会場の音声が乱れています。

サイトウ：それから 4 つ目は、先ほども最後に話がありました学びの才能をどうするか。この ESD の最高の学びは、学んだことを行動に移す。市瀬先生から、社会変革をする力っていうお話がありましたが、全くその通りで。学びと行動というのをどうするか。それから最後 5 つ目。これは ESD や SDGs についての教職員、あるいは地域の方々への意識化をどうするか。5 点ほどまとめてみましたけれども、考えてみますと、これはコンソーシアムの中で、年次計画としてやっぱり深めていく、取り組んでいく。そういうことも必要かなというふうに思っております。それから 3 点目は、ぜひ皆様方をお願いしたい。相談の電話をじゃんじゃんよ

こしていただきたいんです。ひとつ目は東北地方 ESD 活動支援センター。もうひとつは、宮城教育大学、市瀬先生の所に。ぜひ、どうしたらいいんですかと。相談の電話をお寄せいただきたい。必ず解決策が見つかると思います。それをひとつ、3 つ目をお願いします。最後になりますが、SDGs を実現する人材を育成することが、ESD そのものです。皆さん方も今日のような、一步一步の確実な実践が。悩みは多くて、広くて、深くて、なんですけれども、ぜひ今後期待して、御礼の言葉としたいと思います。本当に皆様方、ありがとうございました。感謝申し上げます。

司会：はい先ほどちょっと違った音声が入り切れてしまっていて、こちらの不手際で申し訳ございませんでした。それでは一応、公的な交流はすでに 13 分過ぎてしまいましたので、こちらで終わりにさせていただきますと思います。本大会にご参加いただきました皆さんありがとうございました。しばらくオンラインも開けておきますし、会場もフリーでございますので、あとはどうぞ自由に交流していただいて、今後の関係性を作っていただければというふうに思います。それでは一応、これにて終わりにさせていただきます。本日 2 時間半、お付き合いくださいまして、本当にどうもありがとうございました。

(拍手)

## 1. ディスカッション：メタバースを授業実践・探究活動に活用する方法を考える

株式会社 メタバース・world & NPO 法人海族 DMC 代表 太見洋介

司会：それでは始めたいと思います。本当にいい天気で、いろんなイベントがしている中、勉強会のために本日日中、お集まりくださいまして頭が下がる思いです。私は宮城教育大学の市瀬と申します。よろしくお願いたします。本日はですね。北は青森県、福島県。そして新潟県からご参加いただいておりますが、SDGs、ESD を追求する勉強会ということで、コンソーシアムというものを形成してさせていただいております。本日はなんですけれども、今年 2 回目になるんですけれども、前はかなり小学校、中学校に焦点をあてて。そして東北地方の従前から活動されているグループ、あるいは教員の方々にご協力いただいたところなんですけれども、今回ですね。ひとつちょっと焦点化したいことがいくつかございまして、まずは新しい技法を学びたいということがございまして、やはり今のメタバースをどう学校支援に活用したらいいのかということで、情報提供をいただきたいなというふうに考えて。それからあと昨年、一昨年の実践の中で、やはり気候変動教育。特に海洋プラゴミの研究が、取り組みが教員、そして生徒の間でも進んでいますので、それについてもちょっとこのコンソーシアムで深化させたらどうかというふうに考えているところです。そしてまた本日は、支援者、そしてこの実践者の皆様からの発表を用意しておりまして、いつもより 30 分。長い時間にはなりますけれども、ちょっと 4 時まで、このいい天気の中勉強会の方にお付き合いいただければありがたいと思います。そしてお手元にコンソーシアムのこの振り返りシートがありまして。ちょっと時間もないので、みんなしゃべりっぱなしで出ていってしまうと。いつもどうなのかなと思っていて、ぜひこのコメントを書いていただいて、各団体の先生方にいただけると、ますますの展開につながるんじゃないかなと思いますので、お手元のこのセミナーですね。で、このアンケート用紙の方に一言でも、聞いた部分だけでも書けるところだけでも構いませんので、何か書いておいていただけるとありがたいと思います。それでは、ぜひ皆様のご意見とかを賜りながら進行させていきたいと思いますが、本日最初はちょっと、メタバースについて私の方は何の知識もなくて、本当に恥ずかしい限りでなんですけれども、方でもすでに、いつか実践が進んできているようです。株式会社メタバース・ワールド、NPO 法人海族 DMC の太見洋介様にご発表いただくよう、ご準備いただいているところです。今、PowerPoint を入れさせていただきます。

太見：（…他国語…）こんにちは。日本語でいいですか。はいありがとうございます。このあと、私の方で 30 分ほどお時間をいただきますので、せつかくの機会なので ESD を学んで、お帰りいただければと思っています。限られているので、ざざっといきますね。株式会社メタバース・ワールドとあと今、私が、両方とも私が今代表を務めているんですが、NPO 法人海族 DMC というんです。D の D はデベロップメント、M はメタバースカンパニーということで。何しているのって話なんですけれども、メインの仕事は今 B&G 財団。皆さんの町、地域に海洋センター。カヌーとか、SUP とかを体験できる施設がもしかするとあるかもしれませんが、そこを今、宮城県亘理町というところで町から受託して管理しています。今日もカヌー体験、SUP 体験。うちの社員が、現場で子供たちに海の体験をレクチャーしています。メインはそこなんです。ただ一方で、ちょっと私自身のざっと紹介までなんですけれども、元々最近私パラリンピック招致委員会を担当しました。今、いろんな意味でオリンピックって話題になっていると思うんですけれども、私は結構ホワイトの中でやらせてもらっていたので、この人もかなり影響力がある方だと思うんですが。メタバースを始めたきっかけというのが、まさしくこの招致委員会に入っている時なんです。足が不自由な方がマリンスポーツを体験したいと、あるいは直射日光を浴びると肌がただれてしまう子供さんですとか、自然体験をしたいという方に、じゃあどうやったら自然体験できるかなって。あるいは、その海の中に海洋プラスチックゴミが

どのような形で、じゃあ深海 300 メートルっていうところに、その深海の生物と一緒にどんなふうな形で今、海の底はなっているのかとか。そういったものを、やっぱりなかなか現実的にできない。VR で体験ができないことを仮想空間でできないかっていうところが、この招致委員会っていうところで一つの大きなきっかけをいただきました。ここから先は僕の色々な紹介話になっちゃうので、OK です。あとは結構テレビで、ちょっと大阪でテレビ番組の司会者をさせていただいたりということで。今日、昨日はあちこちでテレビ出させてもらえたりとかして、さまざまな活動をしています。宮城県で行くと、仙台育英高校の教員、非常勤教員をやっています。優勝して、須江監督ともよくしていただいて。育英高校が優勝した時に、バックヤード、ベンチ裏に私も控えていて。あの感動を味わったりということで。とにかく色んなことやっています。元々三井不動産という会社で。何でこの話をしているかという、三井不動産という会社は、三井アウトレットパーク、ららぽーとっていうショッピングセンターを海外で作る仕事をしていたんですね。僕は三井不動産上海っていう会社で働いていて。更には、それから 10 年独立するんですけども。その時私は、ウクライナに行ったんです。ウクライナって軍事産業。まさかこんな戦争になるとは思わなくて。2013 年から、ウクライナのキエフでまさしく仮想空間で、土地の売買。不動産屋だったので、だったりとか、あるいは今だから言えるんですけどもベラルーシという国とちょっと、戦争まで行かないですけども、いろいろいざこざがある中で、ベラルーシに対して、その兵士の訓練を仮想空間上で訓練ができないかとか、そういう研究開発をさせていただききっかけがあったりして。そんな活動もしていて、元々メタバースに入る俎上があったというような形になります。ここからちょっとリアルな話になっちゃうので、ここはもういいですね。しっかり今日は皆さんの学びに繋がるような話をしていきたいと思うんですけども。脳みそがつながっちゃっている子供ですよ。生まれてきて。これブラジルだったのかな。イギリスかどこかのヨーロッパの先生が、ブラジルの先生、なんか逆かもしれない。ごめんなさい。その技術ですね。医療技術を VR 上で、そのメタバースの空間の中で、手ほどきを受けて。実際に手術して成功したという事例です。ここまで来ています、今。ただ、もう時間が限られてもいるんですけども、私はよく、いろんな今会社さんからメタバース、どうしたらいいのか。この前、生命保険会社。メタバースの仮想空間の中で、イベントをやって。例えば個人情報漏洩した。NFT。いろいろと通貨関係にリスクが生じた時の保険を、今保険会社が考えているんですよ。その保険をどういうふうな仕組みにすべきかというところまで出来たんですが、僕はあれを形で言うんですけども、お伝えするんですけども、絶対にメタバースは手を出さない方がいいと言っています、今。リスクだけが、僕のメタバースを進めているって思われがちなんですけども、どちらかというとリスク管理をしっかりしてくださいってことを徹底してお伝えしています。もう本当に仮想空間ですし、平たく言うと SNS 上で子供がはじめにあったりってように、想像し得ないような、さまざまなこともありますけども、プライバシーの問題もそうですよね。なのでこの後、具体的にじゃあ私たちが海洋世界に遊びに来る子供たちに、そのメタバースを体験させる時も、こういったところをしっかりとフォローしながら、我慢しながら実施しなきゃいけないんですね。これってじゃあ今この会社がどこまでできているかっていうと、みんな手探りなんですよ。この前、某大手の通信会社さんで、メタバースの部署が出来上がったんですね。全員素人です。50 代以上の部長、何なのメタバースから始まります。誰も知らない。特に僕は、日本人は絶対やっちゃいけないって言っています。わかりますか。やっぱりヨーロッパ、欧米がものすごいスピードで、メタバースで進んでいるんです。なぜならば、みんな英語で話せるからなんですよ。プラットフォーム全部英語です。ソース、あとはそのプログラミング、全部英語です。日本人は、申し訳ないけれども、彼らには敵わない。英語を話せないから。だからどうするかっていうと、彼らがしっかりしたものを作る。web3.0、NFT、ブロックチェーン。いろんな話の会話の

単語が飛び交いますけれども、多分分からないと思うんです、皆さん。web1.0、web2.0、web3.0の違いがわからない。NFT もわからない、ブロックチェーンもわからない。その部署の部長も知らなかったです。なので、今でもすごいスピードで海の中を体験するプログラムとか、VR というゴーグルを掛けて、それを海外にも作られていて。逆に我々は、うちの会社は海外で作られたものが、ちゃんと今の日本の子供たちにプライバシーだったり、こういったサイバー攻撃だったり詐欺だったり、そういったところから安全性を担保できて、訴求できるかっていうところをチェックしたりしている。今そういう段階です。なので、メタバースって本当に聞くと、すごく何て言うのかな、新しい話ですし、興味、関心があるんですけども。こと日本人の大多数の人は、企業で立ち上げた部署の人たちも何をしたいかまだ分からない状況なんですよ。これははっきり言えます。色んな相談を受けています、今。じゃあそこで、今日の本題ともつなげていけたらなというふうに思うんですけれども。そうですね。まだここは予定ではあるんですけれども、全国のいろんな会場でもメタバースのこういった勉強会。移動してやってきたのが今、VR 体験というところ。ここですね。私たち今、中学生の修学旅行、高校生の修学旅行を受けるんですけれども、海に来てもらってマリンスポーツ体験します。カヌーを体験したり、カッターボートっていうボートを7、8人で一緒に息を合わせて漕がないと、真っすぐ進まないんですよ。これ人生と一緒にだよっていう話をしているチームプレーって大事だよって話をしている。そこにプラス VR 体験を今、付けています。VR って大体1台で5万円くらいは今するんですね。今度、今ソニーさんの方で、また新しいバージョンも出たんですけれども、それもやはり、7、8万するんですよ。5個揃えるだけでも、かなり高価ですよ。しかも、この中でVR 体験されたことのある方っていらっしゃいます。ありがとうございます。どうでした。うまくできましたか。

会場：気持ち悪い。

太見：気持ち悪いですよ。気持ち悪いんですよ。あとはほとんどうまくコントロールできないと思います。VR 上で物をつかむ。卓球でボールを打ち返す。ものをつかんで、板で、指で打つとか、いろんな動作があるんですけども、まずこれ言葉選ばないと、私たちが今までいろんなイベントをしてきているのは、60代以上の方は、なかなかできません。これはなぜか。あまり言及しませんけれども、何でかって言うと、じゃあ子供達はどうかって言うと、子供達はゲーム慣れしてるので、ある程度使いこなすものの、船酔い状態になったり。そもそも物も高価で、そこまで取り揃えられないっていうところもあるので、体験できることを体験できない。体験して耐えられないっていう方がいらっしゃる。今我々はVR に関しては興味のある生徒さんに体験してもらって何をするかという、やはりなかなか海の中に潜れないので、海の中に潜って、そのSDGsにつながるような勉強法ですよ。海洋プラスチックもそうですし、環境問題もそうですし。そういったものにまず興味、関心を抱かせるというところで、リアルなマリンスポーツと、バーチャルな、デジタルな。そういった体験。このセットが今のものすごいいろんな全国の学校から問い合わせをいただいている状況です。なかなかここまでやっているところがない。今我々はじゃあ、わざわざ亘理まで来てもらわなきゃいけないかというそうではなくて、我々が出張しに行って、できれば海を用意していただいて。あるいは川でも、川はちょっと流れがあれば危険だったりするんですけども。そういった環境の中で大事なものは、リアルとバーチャルをセットにするということですね。そうすると子供達ものすごい興味を持ちます。さっきも船酔いとか、気分を悪くする子供もいるっていう話をしましたけれども、大多数の子供達はもう特に小学校6年生の前触れ合っただんですが、もう目を輝かせて。面白い、面白い、またやりたい。その勢いがじゃあ、SDGsって何だろうっていうところの切り口だったり入り口になるので、我々としては、そういった方向に今結びつけたいというふうに思っています。特に、何て言うんでしょう。ひきこもりだったお子さんですとか、ク

スの中ですごく静かだった生徒さんが、そういったバーチャルの中でものすごく自我というか自分を出せるというかというのを我々は見えてきて。そういった、何かコミュニケーションのきっかけだったりになれたらいいなという。でも、そこも今手探りですね。まだまだ手探りです。いずれこうした形で、いろんな身近な地域課題の解決を探るってこと。そのためにリアルとバーチャルっていうところをうまく掛け合わせて、当然我々、私は会社の経営者なので、新しいビジネスモデルを創出していき、今活動をしているような状況であります。ということで、ちょっとかなり早回しといいますか、進めてきたんですけれども、今そうですね。色んな企業さんとコラボレーションをして、私も東日本大震災で自宅が津波で流された、私の近しい人も亡くなっているので、元々そうですね。海族を立ち上げた時には、自分で水中ドローン、これは400万位するんですけども買って、船も自分で買って。宮城県の沿岸部を中心に、震災行方不明者の捜索活動を、最初はスタートしていました。今は月命日、11日には必ず出港しようということで活動しています。ちょっとお話しそれですけども、震災から10年以上経つ中で、水中ドローン。高性能な水中ドローン沈めて真っ暗闇なんですけれども、結構ソナーがしっかりしていて、今電波をパーツと出すんですよ。何に使う人がいると思いますか、今。この前南三陸町でも水中ドローンを沈めて、震災から全く手が付いていないと言われる水深10メートルぐらいですね。結構陸から近い、流されて引き波でパーツと流されていて、まだ何かいろいろ下にあるんじゃないかっていう中で、一番見つかるものは何だと思いますか。ちょっとお隣の方と。何が見つかると思いますか。実は、一番ソナーで反応しやすいのは、あるいは水深10メートルぐらいの、まだ太陽の光が日中明るい、よく我々も目視でも確認できるのは金庫なんですよ。金庫。金庫も流すぐらい力があつたということもあるんですけども、金庫って角張っているんで、ソナーでも反応しやすく。当然我々引き上げることができないので、警察にここにこういった物が沈んでいますとの報告をして。だったら漁協の方に協力してもらってサルベージするんですけども、金庫がよく見つかるっていうのと、あとは墓石。お墓の石。一番我々が驚くのは、子供の体操着。台風で海水、かき回されるじゃないですか。そうすると、そのヘドロの中にあつた、衣類の中でも特に体操着の地獄なんですよ。子供の。それが10年以上経つても何かに引っかかって揺らいでいたりするんですよ。ただ、ゼッケンとかは、やはりもう文字とか読み取れないし、どこの学校かっていう特定は難しいですけども、そういったものがいまだに見つかる。それを子供たちに、震災を知らない子供たちに、こういうこともあつたんだよ。いまだにこんなものが見つかるんだよっていうことが、震災に対して、あるいは津波が起きた時に自分はどうすべきか。その時何があつたのかっていうことに、興味、関心を持ってもらえるんですよ。皆さんもよくご存じだと思うんですけども、学びつて、勉強しなさいって言う人間はほとんどいないじゃないですか。ほとんど何も Why, why Japanese people.ですよ。why. なぜ、何でこんなこと。Howとか What よりも Whyですよ。なぜだと。なぜにこう、子供たちの心にすっと突き刺してあげると、みんなものすごい勢いで興味を持ってもらえるんですよ。それもそういう意味ではやはりメタバースとか、今ゲーム世代、スマホ世代の子供たちって、そういったところを切り口に、リアルな体験、リアルな勉強につなげていくことを、私たちは今現場で実践しています。こういった活動が海上保安庁からも認めていただいて、マリレジャー安全活動団体認証というものをいただくんですけども、これは亘理町のヤマダ町長と海上保安部の方ですけども。被災した沿岸部をマリレジャーでにぎわいを創出・復活させたということです。そういうふうな評価をしていただいたと。あとは、海といえばやはり釣りというところがあるので、今年も間もなく来週から亘理町でこうやって亘理町長杯という形で、釣りのイベントを行います。そこにもバーチャルでワールドを作って、メタバースでもってこういうふうな形で準備を進めていたんですけども、ちょっと相方のヤマキくんっていう人が今忙しくて、なかなか

そこまで行けないんじゃないかと思っているんですが、やはり釣りもリアルとバーチャルというのをうまく融合させた形ですね。あとは障害者の方に対して、本当にいろんな体験会を今行っています。なかなか障害の、その方の度合いにもよるんですけども、やはり危険なんですよ、すごく。これは自閉症の子がもう面白すぎて海から出たくないって言って、船から降ろすんですけども、また水に飛び込むみたいな形で。それをずっと繰り返してね。その時にたまたまこちらの VR のキットがあったんで、もうこっちの方が面白いよなんて言って、VR で疑似体験をしてもらってですか。今そんな形でも運用はしてきました。あとは SDGs 教育旅行ということで、今宮城県。宮城県庁の方とタッグを組んで、ちょっとこれ見づらいんですけども、水上バイク体験。私が水上バイクを運転したり、うしろに子供。これちょっと実は、今の外国観光客向けなんですけど。あと子供たちがカヌー体験をして。そこに気候変動に関する海や川についてですか、あとは海ゴミですね。海洋汚染防止について学ぼうとか、いろんなプログラムを行っています。もう予約が来年のゴールデンウィークまで全て埋まっているくらい、ものすごい今ニーズがあるんですけども。コロナで、ちょっと学校でクラスターが出ちゃってなんて、キャンセルもたまに入るので、ぜひお問い合わせいただければと思います。ちょっとなりましたが。はいということで、いろんな活動をしています。私今、多賀城市というところから起業創業支援の事業も受託しているんですけども、やっぱり今大体自分で会社を興したいっていう方の 8 割が、ウェブ系ネット系、メタバース。そういった関連が非常に多いです。そういう時代なんでしょうね。ということで、私の方からは一旦ここまでにしたいと思います。基本的にはリアルと繰り返しますがバーチャルというところをしっかりと融合させるっていうことが、これからの子供たちの興味、関心、学びの一つ入り口になっていくのではないかなと思いました。ただ繰り返しますが、まだまだ日本の大企業、大手さんでさえ、手探りの状態ですね。よく GAFAM なんて言って。Google、Apple、Amazon、Facebook あとは Microsoft さんも。世界でも一極集中して、色んなプラットフォームを開発し、皆さんも普段使っているスマートフォンのアプリもそういったところがギョッと牛耳ってきたところに対して、メタバースというのはそこを分散化して。各個人でもそういった開発ができたりとか。そういった今、世の中の流れと、GAFAM に負けるなみたいな動きもあったりして、ぜひ、皆さん今日をきっかけにメタバースとかバーチャルとか、もしかすると子供たちの方が詳しいかもしれません。ぜひ、自分で今日をきっかけに積極的に学んでいただければと思います。私の方からは以上です。ありがとうございました。

(拍手)

司会：今日はメタバースの話を頂戴したんですけども、これから 10 年、20 年、30 年経つたびに、確実にリアルとバーチャルのミックスというのが教育現場で進んでいくっていうことは間違いないというふうに考えているところです。本日ですけども、どうしてこの機会を持ったのかと言いますと東北大学のタニグチ先生が、こちらの科学研究費の方から、シブとか、知見とか地域創造に、このメタバースをどう活用したらいいかっていうところをお考えでしたので、タニグチ先生、少し時間がなくてお帰らだということですので、少しご意見とか、賜ればと考えているんですけども。

タニグチ：すいません、今日はこっそり来て、こっそり帰ろうと思っていたんですけども。いや、本当に大概こういう話をすると、いやうちの学校はって言うんですけども、やっぱり色んな GIGA スクール構想なんかもありまして、だんだん整っていますので、ぜひとも挑戦してみようかなと私も思っています。私はその、先ほどの 50 代ですので。分からないなりに頑張っています。ただ、今お話があったように、ハンディキャップを持ったお子さんに体験を広げるとか、あとは引きこもったり、心に傷を持ったお子さんがいわゆる顔出しじゃなくて、アバターっていう。自分とは違う人格でより広げられたりですね。例えば、男性が女性に、女性は男

性になって、いわゆるその違った視点から見るとか。学校の心の教育の中にも、いけるんじゃないかなと思っていますので、ぜひとも太見さんをつかまえて、いろいろ質問してください。以上でございます。

司会：ありがとうございます。そうしましたら、太見さん、後ろに戻られてしまいましたが、せっかくいらっやっして、専門家でいらっやいますので、もし学校現場の方で疑念とか不安とか疑問とかあったら、率直なご意見として出していただければと。もしも質問があれば、よろしく願います。いかがでしょうか。会場からでも、オンライン上からでも構いません。メタバースの活用ってことですね。何かありますか、先生、願います。じゃあマイクをお持ちします。

質問者 1：青森県から来ました、東北のです。よろしく願います。

太見：青森ですか。こちらこそありがとうございました。

質問者 1：活動の中で、実践になるのが体験と、メタバース。は、ちょっと違う、これを組み合わせるメリットってのは。

太見：そうですね。海はいやだっていう子供が来ます。そういうのは OK ですね。あと中には、やはり親が震災を体験されていて、海に近づけたくないという。それが何かこう伝染してしまって、子供さんが海に行きたくないって言って。メタバースを含み誘客できるってところが大きなひとつのですね。はい。

質問者 1：つまりその入口を下げるためにですか。

太見：そうですね。入り口ですし、後は今までと同じことをやっていたら、会社も成長しないですし、その地域も成長しないので、じゃあ今やっているのは何に投資すべきかっていう話だと思うんです。その中で今、世界の潮流というか、この仮想通貨、ブロックチェーンなり、NFT なり、色んな中で、一企業として投資すべきはそうだったってところですね。

質問者 1：なるほど、ありがとうございます。

太見：ありがとうございます。青森はどちらですか。

質問者 1：八戸です。

太見：八戸ですか。八戸、せんべい汁おいしいですよ。

ありがとうございます。

司会：はい、そのほかいかがでしょうか。何かご質問、それでは願います。

質問者 2：福島県只見町の、サイトウと申します。

太見：ありがとうございます。私も福島出身でございます。僕は福島市です。

質問者 2：大変興味深くて。バーチャルという言葉を知ると、私なんかは避けて来て。アバター何て言われると、何が何だかわからないぐらいの。今日お話を聞かせていただいて、とても大事なことなんだと逆に思いました。そんな中で、私どもは山間地域なんですね。それで、ESD とか SDGs の取り組みながら、やっぱり地域を担う人材を育てる。そのためには、やはり只見で新しい事業のできる、そういうものを起こしているぐらいの人材を育てないと駄目だというふうに私は思っていました。そういう中で、今海を素材にしてのメタバースとかですね。そういった将来、自分の山間の過疎化の中で、新しい仕事を起こしていくために、メタバース。いきなりではちょっと答えにくいかもしれないですけども、何か活用の模索する方向とか。そういうことがもしあれば、ちょっとお話しいただければ幸いです。

太見：そうですね。本当に今、少子高齢、過疎の問題があって。子供たちもバーチャル、要はゲームで。外であまり遊ばない。それで、大都市圏にある意味集中する局面にある。ここは変わらないと思うんですよ。その中で、私は実は海に限らず、里山トレイルランニング。要は里山で、マラソン大会をやったりして

いまして。そこは多分仕掛け次第だと思うんです。その仕掛ける人間。私もそうですけれども、多分その古い概念を上手に継承しながら、やはり今私は46という歳ですけれども、20代の子供たち。若者、青年が、主役になれるような活動って何かなくなると、すぐすみません。答えは出ないんですけれども、やはりメタバースだったり、バーチャルだったり。そういったものがよく耳には届きます。リアルとバーチャルの体験。里山トレイルランニング、マラソン大会、キャンプ体験。実際に今、私のまた違う会社の社長さんが取り組んでいるのは、古き良き田舎をドローンで空撮をして3D化して、その町を再現して。その町の中に、もう廃れたシャッター街があるんですけれども、そのシャッター街にメタバース上でお店を出したいという方が、世界中にたくさんいらっしゃるんですね。しかも、そのお店を賃貸として貸し出すこともできるんですよ。それが地域の税収になったりもするんですね。ただ、そのプラットホームもまだ日本は全然整っていません。ですので。まだまだ、今いただいたご質問に対しては、私も的確なことが言えません。ただ、今そこに新たな商売の芽、あとは交流人口の拡大。地方創生に向けて、20代30代の若きベンチャーの人間たちが、そこにフォーカスしているって、その情報を僕も吸い上げながら、何かいい情報があればお伝えしていきたいところになります。すみません。

司会：はい、ありがとうございます。そのほかいかがでしょうか。では私から質問なんですけれども、今の間で本当に、必要かということで話をしていますが、今のコンテンツ作りに関わったらいいかという。教えていただければと思います。

太見：そうですね。今専門学校さんは、専門学校でそういった技術を学んでいる生徒さんたちと連携して、そのワールドといういわゆる空間ですね。先程空中ドローンで3D化して、その地域をメタバース上に表すっていう話は、専門学校の生徒さんと一緒に。そういった形でコンテンツの開発は、これまでは大手の企業さんをお願いするのが通常だったんですけれども、一個人に対してその仕事を発注するような形で進んでいますので、一応説明会の方で何かそういったコンテンツを開発する機関、あるいは個人、生徒さんがいらっしゃるのであれば、ぜひコラボレーションする機会をいただければというふうに思います。

司会：社内、手間のかかる作業。

太見：そうなんです。ただ、昔はアプリを一つ作るのに、企業じゃなければ作れなかったという時代が今、個人でも簡単にアプリを作ってしまうので。そこは徐々にそのデジタルだとか、スピードを待つばかりというところでしょうか。ご質問いただいたことに関しては、スローガンでも綺麗ごとでも、何とでも言えるんです。でもそれを言ってしまうと嘘になってしまうので、先程の答えは本当に現状として、まだまだ我々も答えが出せない発展途上ということで、ご理解いただければと思います。

司会：ありがとうございます。質問を、メタバースが。

太見：それもですね。本当にできるかどうかというのは全くまだ手探りです。さっき言ったその、セキュリティの問題もありますし、特にやはり60代、70代の方は新しいことに対して恐怖心があるので。ここの空間、この地域を3D化しますなんて言っても、何するんだお前、みたいな感じで。そこからだったりします。

司会：ありがとうございます。みんなしてからみたいなものですから。から、ました。ありがとうございます。そのほかご質問ございますでしょうか。もしなければ、これにてちょっとまた太見さんと連絡をしていただいて、進化するメタバースに追い付いていければと思いますので。

太見：そうですね、呼んでいただければ行きますので。私、福島に帰ったついでにすぐに行きますので。ぜひ、ありがとうございます。

司会：ぜひよろしくお願ひ申し上げます。

太見：ありがとうございました。

## 2. 講演：学校実践において海洋プラスチックごみへの取組を深める

「海洋プラごみゼロプロジェクト実行委員会 気仙沼市立条南中学校 谷山知宏

司会：そうしましたら、少し切り替えの時間を頂戴します。次は、よろしいでしょうか。先ほども申しましたように、気候変動教育、海洋プラごみ。今一番関心が強まっているところで、東北地方ですね。こちらの方の研究きております。今日は、谷山先生の話聞いて、少しレベルを高めたいと思っておりますので、谷山先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

谷山：皆さんこんにちは。気仙沼から参りました谷山です。ちょっとハードルが上がったので、どうするかと思ったんですけども、お付き合いください。気仙沼市海洋プラスチックごみゼロ・プロジェクト実行委員会という組織を立ち上げて、そこで行なっている活動。それから私は退職して2年目になるんですが、今学校づくりコーディネーター役ということで、気仙沼市の条南中学校、それから九条小学校に行きまして、そこでの学校実践も加えて。前任校の面瀬小学校でもやっていたこと、気付いたことなどをお話ししていきたいなと思っております。まず気仙沼市の取り組みのことをお話しします。海洋プラスチックごみの問題についても、積極的に対応している市です。2019年5月、対策推進会議を設置して、同年9月にアクション宣言を発表しています。海洋プラスチックごみに関する研修会も、同じ年の8月に私も参加していましたが、市の海洋教育連絡会。それから気仙沼市の教育委員会が主催をして開催しました。ただ、継続的にこう学びたいなという思いがありまして、翌2020年度には実行委員会というものを立ち上げて、継続的に研修会を行っています。任意団体ですが、このようないきさつがあるので、気仙沼市というものがついています。市の生活環境課と市の教育委員会の後援を受けながら、3年目の活動に取り組んでいます。この実行委員会は、海洋教育の推進をまず中心に、指導者研修会などを開催しています。また、座学だけではなく、海浜実習、浜調査なども行っています。昨年度は研修会や実習の機会をまとめまして、海に学ぶという冊子を作ることができました。会場にも持参しておりますので、後ほど手に取って見ていただきたいと思います。この海浜実習について、ここからお話ししたいと思います。海洋プラスチックごみに長年取り組んでいる一般社団法人のJEANさんという団体さんから学ぶことを考えまして、事務局長の小島さんに来ていただいて、勉強しているところです。国際基準のICC国際クリーンアップという手法を紹介していただき、実践を重ねています。回収時間が20分から30分。集める時間は短いんですが、集めたものを分類して、指定品目ごとに個数を数えて。統計処理しながら、どこから来てどんな形で漂着したのかっていうことを考えていくような活動になります。実際の場面ですが、波は到達した場所に、さまざまな漂着物を残していきます。台風や風で運ばれたものは、浜の奥の方の草むらにも点在していることになります。そして、集めた漂着ごみを分類しながら、どこから来たものかということを考えていきます。私たちが使っている日常のおなじみの生活雑貨も見ると、何に使うものなのかわからない謎の物体というのも、よく出てきます。中国語やハングル文字の容器を見つけることもあります。先月はコロナ渦ならでっただったと思うんですが、抗原検査キットが見つかってびっくりしました。何なんだろうと思ったんですが、こういうものも出てきます。この表は、2020年の10月と、2021年の8月に大島の田中浜で行なった時のICC結果の一部をまとめたものです。品目をご覧になっていただくと、ロープ・ひもというのはすごく多いなと。そしてまめ管っていうものがありますが、これは漁具の一つで、カキを育てる時にカキの稚貝をホタテ貝に定着させるんですが、そのホタテ貝の間にスパーサーを入れると。そのスパーサーが、そのまめ管っていうプラスチックになっています。こういった養殖が盛んな地域ですので、生活用品よりも多いなという印象があります。この田中浜で定点観測をしていこうとした昨年度、2021年度も新型コロナウイルス

の間隙を縫って実習しました。ところが、NHKの朝ドラのロケ地になったということで、観光客が大勢押し寄せてきたということがあります。これはちょっと漂着ゴミよりもポイ捨ての方が多くなるんじゃないかなという心配をしたんですが、あにはからんや、様々な人が浜清掃にまめに訪れて、浜のごみもなくなり、観光客の方もマナーがよくてごみがない、きれいな浜になっていたと。そういうことで、定点観測するにはちょっとこの複雑な気持ちをしながら、場所を借りたということになります。ということで、10月の研修会の方は、鳴り砂で有名な十八鳴浜の方に行くことにしました。仲間の先生方の方も、震災以降行ったことがないというので、じゃあぜひ行ってみよう。歩きが長い浜なので、ちょっと大変なんですけど頑張ってやってきました。田中浜同様、漁具が多い。こういうところなんですけど、よく見ますと発泡スチロールがすごく多く。引き寄せられる場所なのか、そういったものが田中浜とちょっと違っていたなと。これは、何回も取って行かないとよく分からないんですが、そういう印象がありました。それから赤瓦。瓦の破片が5、6枚見つかりました。ここは神社から相当離れているので、これはどうしたものかと。恐らく東日本大震災で流失した家屋から落ちたものが、ここに流れたんだらうなと。このように、ICCの手法の場合では、漂着ごみの出自を考えて、他の浜との違いとか、経年の変化を知ることができる手法だなと思っています。次に、一般の海岸クリーンアップと、ICCの違いということで、やってみていろいろ感じたことをお話しますが、一般のクリーンアップは、大勢の人が集まってゴミの回収に当たると。これ以上海洋プラスチックごみを出さないためには凄いいい方法だし、スッキリ感がある、達成感がある。非常にいい活動だと思います。最近、実践する団体さんが気仙沼の方でも増えてきて、凄いいいなと思っています。一方ICCの方は、回収時間は短時間なんですけど、浜のゴミを全部片付けられる訳ではありません。また、チェックしながらということで、多少面倒くさいと思う方もいるかもしれませんし、スッキリ感もそこまでいかないという、そういう感想もあるんです。ただ、品目をカウントすることで、その浜の特徴や変化が分かり、流出すると、あるいは漂着するといったところへの意識が高まるってことは、期待できるかなと思っています。ということで、私たちは行ったにどうしようかっていう相談して悩んだこともあったんですけども、このICCは継続しながらデータを取っていくと。そして一般の海岸クリーンアップと併用していくっていうのが一番いいんじゃないかなと考えています。また、学校の子供たちに使うという場合には、ちょっとデータの表も項目が多いかもしれませんので、簡略化するなど多少の工夫が必要かなと思います。続いて海洋プラスチックごみの問題の方に入っていきたいと思います。今、ご覧になっているように、海洋プラスチックごみと言えば、カメ・アシカ・海鳥が写っていますが、野生動物の被害が本当に報告されています。右下の画面では、魚よりもプラスチックの方が多いと。深刻な海が色々なところでこう見られるということです。改めて、その問題というのを見つめてみました。まず何とんでも大きいのが、大量のプラスチックごみが流入しているということじゃないかなと思います。ただ、さらにですね。これだけ問題視されているのに、その量が減らず、さらに飛躍的に伸びているところというのが恐ろしいなと思っています。また、先ほども画像で紹介したような海洋生物の深刻な影響がある。そして、いつまでも分解しないで、際限なく小さく砕けて拡散していくという問題があります。食物連鎖の中に取り込まれて、どんな影響が出てくるかもわからないという怖さがあります。すでに人間も摂取しているということが確認されていますし、大きいところだと1週間にプラスチックカード1枚取り込んでいるんじゃないかという報告もあるということです。プラスチックごみそのものもあるんですが、削減にあたっての問題があるのかなと思っています。3R運動っていうのは皆さんもご存知だと思いますけれども、リデュースという言葉はあまり知名度がなくて。やってはいるんですけども、その辺の意識がなかなか上がってこない。便利な生活っていうのは、行動変容しにくいものだとということで、心を納得しなきゃいけないのかなと思っています。そのリデュース

の一つなんです、マイバッグ運動っていうのが定着してきたかなと思うんですが、店舗によっては自然由来のプラスチックを入れているので配っているということもあったり、足並みがそろっていないという印象があります。私が一番恐れているのは、膨大な量、急激急速な増加ということで、ちょっと圧倒されてしまって。一生懸命頑張っているけど、くじけてしまう人が出てくるんじゃないかなと。そんな思いもしたりしています。私たちの団体の活動も小さな一歩でしかないのに、何かこう壮大な夢と成果があるといいなと思っていたところなんです。そんなところで、オランダの Boyan Slat さんっていう人がオーシャンクリーンナップっていう活動しているという。高校生ですかね。プレゼンをして、世界中の人たちの心を動かして、クラウドファンディングで 200 万ドルを集めて事業をということなんです。色々試行錯誤しながらだったので、回収装置の改良を重ねて、現在では 2040 年までに結構近いですが、ごみの 9 割を回収しようというすごい目標を立てて、太平洋あるいはたくさん流れてくるような河川にこういった船を浮かべて回収に当たっているということなんです。その動画から拝借した画像ですけども、ものすごい量のごみが回収されていて。どうしようもないなと思っていたところで見ただけで、凄く心が洗われて、光も差したような気がします。それから、海洋プラスチックの削減上の問題ということで、幾つか問題、課題があると思います。各地方自治体、気仙沼もそうですけれども、アクションプランを元に動いていく。あるいは国の方も資源循環促進法を持って、さまざまな活動に取り組んでいる訳ですけども、規制の厳しい国々に比べると、まだまだ枠組みを恐れていたり、徹底継続させなければならない部分が多いと言われていています。また、利害関係がつきものなので、持続可能な世の中に向けて合意形成っていうのがやはり必要になってくるんだろうなと。困難な世界を生き抜く力とここにありますが、学校でもよく子供たちに使う言葉なんです、実はこれは私たち大人こそ必要じゃないかなと思っています。東日本大震災の時もそうでしたけれども、手を付けられほどの困難。それから混乱があっても、その目は臆病、手は鬼という言葉をご存じでしょうか。目は臆病。つまり見た時は足が立ちすくんでしまうだけども、一つ一つ手でやっていくと、意外と片付くと。震災の時によく聞いた言葉で、ちょっとずつ前に、不安で立ち止まらずに前進していかなければいけないのかなというふうに思っています。ここからは、これまで海洋教育に携わってきた中で、子供たちの学習で深まってきた事例。あるいは広がり、あるいはつながりが見えたなという事例を取り上げて、海洋プラスチックごみに関する指導の工夫について考えてみたいと思います。まずこの写真は 2019 年、台風 19 号。東北地方もかなり被害が出たんですけども、私はその時面瀬小学校に勤めていて、気になったので学校に行ってみました。するとご覧になって分かるように、茶色い部分が川から流れてきた流木やヨシ・アシのもので、港が埋まっている状態です。よく見ると、そこにプラスチックのボトルであったり、ビニール袋が混じったりというような状況がありました。そしてその脇を見ると、NPO の団体さんが船で取り除いているんですが、聞いてみると水面に浮いているんじゃないよと。3、4 メーター下までびっちり入っているんだということで、取り除くまでには相当な時間が掛かっただろうと思います。同じ年、ワカメの種はさみ。養殖体験をするんですが、漁業の方はこういう中でも続いていくわけで。この時体験に行った子供たちが、海岸に打ち上げられた漂着ごみがどうしても気になると。先ほどのヨシやアシ。それから流木などと共に、ペットボトルなどプラスチックごみがあると。これを集めてきている写真です。何でこんなにと、何とかしたいなと思うのは、本当に自然のことでした。その後海洋ごみについても調べ、広く学んでいくこととなります。海洋生物への被害、あるいは分解しないで小さく砕けていくことなどの問題も知ることとなります。そういった学習をした後、今度はプラスチックごみが川や排水溝を通して海に流れ込むんだっていうことを知った子供たちは、自分たちの地区、あるいは自分たちの川はどうなっているのかなと。意識がそちらに向かっていきます。そうすると、ポイ捨てをしている人がそんな

にそんなにいる訳じゃないのに、何でこんなにあるんだと。風で飛んだりするんじゃないかとか、雨で流れるんじゃないかとか。そういう可能性があることにも気付いていきます。また見て見ぬふり。ここにありますが、海洋プラスチックごみになってしまう危険性を理解していない人が多いのではないかなと。そういうふうにする子供たちも出てきます。その当時でまだ河口域が防潮堤工事で、子供たちが簡単には近づけなかったんですが、子供たちの意識は海に流れていっちゃっているんじゃないかと。川の河口の方に意識がどんどん集まっていくって言っていました。これは海洋教育の発表の時の写真ですけども、海岸に漂着していたプラごみが、川を通過して流れ着いたとすると、さて、どういうふうに流れて行ったのかっていうのは、子供たちの関心が集まりました。漂着ごみのことを尾崎の漁港で働く漁師さんに聞いてみたり、この海洋教育の発表会に向けて模型を作ってみたりしながら、ごみの経路を考えていったということになります。こういう模型にすると、逆にもっともっとこう知りたくなるような、いい模型だったなと思います。実はその模型が、教師側の方にもスイッチを入れて。もっともっと知りたくなってきた。森は海の恋人。これは有名ですけども、赤い線がその大川から流れていって、丸で書いてところが、水山養殖場がある舞根湾の湾なんですが、そこまで流れて、栄養が届いているよっていうお話だと思うんですが、青で書いたところが面瀬川です。こちらからも当然行っているんだろうなと。どういうふうに流れていっているのか。その経路についても興味が湧いてきたそうです。そういうふうにいると、協力する研究者が現れて、塩分濃度調査に行くことができました。河口までのところは歩きながら機械を入れて測り、漁港から先は大島のカキ漁師さんの船をチャーターして川の水が流れ込んでいるであろう範囲を調べてきました。そのカキ漁師さんのカキ養殖場は、こういう感じなんですが、そこに川の水が表層を流れながら、流れ込んでくると。森の栄養を運んで。こういうことが、調査することによってより具体的な形で理解できたと思います。そして、また汽水域という言葉はよく聞くとと思うんですが、川の水と海が会って混じり合っている。私もすっかりこう混じり合っているイメージで言っていたんですが、塩分濃度調査をしてみると、先ほどお話したように、川の水は海の水の上を滑るように広がって行って。簡単に混じっているものではないということ。それからもう一つは、海の水は塩水くさびという形で、川の水の下に潜り込んでいる。この部分に海の生き物が来て、ちょっと行ったり来たりしている所になっている。こういうことも分かってきました。この海洋プラスチックごみからちょっと離れるんですが、その海と川というところを考えていく時に、こういったものが教師側に回ると、学習を広げていく時に役に立つのかなと。話の方を戻しますが、子供たちの海洋プラスチックごみへの関心ということですけども、大量のプラスチックごみが流入していること。それから海洋生物への深刻な影響。そして分解せず、拡散すると。怖い。どうしたらいいんだろうと。もちろん、そういう不安が出てくると思います。2020年の5年生は、このような関心をもとに、海洋プラごみを減らすプロジェクトということで、不安じゃなくて、自分たちが何かできないかというふうに、方向性を持って取り組んでいきました。海洋プラごみが、意外な場所から川を通過して流れ込んでいるっていうことを研究者の方から聞くことができ、プラゴミを減らすアイデア、エコバックが広がっていないという現状は何かできないか。それからゴミがあふれて拡散してしまうことを防ぐ方法はないかと。こういったことをプロジェクトとして、子供たちが考えていきました。例えば、エコバックについても、それを持たない大人の人たちに向けてのアイデアを考えたり。あるいはアンケートで大人の人たちに尋ねて、うまくいってない理由を尋ねたりということをしました。また市の担当職員や、グッズ販売をしている起業家の方々を招いてプロジェクトのプレゼン子供たちが行い、大人の人が真剣に聞いてくれるっていうことに非常に感動しながら、活動したのを覚えています。自販機の使い方を提案したグループでは、ステッカーを作っていたんですが、それが市役所職員の方の目に留まり、持ち帰っていただいて。市役所の自販機に、じゃあ貼

ってあげっからということで、貼ってくれました。この間行ったら、まだ立派に貼ってあったので、子供たちの呼びかけが続いているなと思って、うれしく思いました。また実践での気付きと、あとこれからこう考えていることについて、お話ししたいと思います。昨年度、中学生の探究学習での事例になりますが、中学生もこう調べていって、プラごみ。気仙沼湾ではどうなっているのかな。気仙沼湾の広がりの様子を調べたいということで、先ほども出てきた NPO 法人の方を紹介して、生徒がアポを取って聞き取りをしていたと。相当流れ込んでいないという形で行った訳です。そうすると、実は NPO さんの方からは、流木やアシ・ヨシが多いんだと。プラごみは意外と少ないよという話を聞くんですね。ここで終わってしまったら、気仙沼ではプラごみが少ないという結論にいついてしまっ、これはちょっと違っ。ミスリードになってしまうので、その意味づけ、あとは地域の実情などについて、やはりサポートすることが必要だということでコメントしたりしました。そして、NPO の方から聞いてみると、他の方に問題があると。流れてくるアシやヨシ、流木についても、他の方に問題があるんだということから、複合的な問題として捉え直しをして、人の暮らしとの関係の方に学習が進んでいくという事例になっています。フィールドワークの経験の積み重ねってものが、すごく大事になってくるなと思います。気付きを生かして、しっかりした学びを進めていくってサポートが必要なのかなと思っています。それからこの写真です。このごみは初めて研修会を行った 2019 年 8 月のものです。今見るとものすごい量だったなと思います。漁具が圧倒的に多いなという印象です。短時間でこれだけのゴミが出たということです。すごいことだなと思っています。この研修会の時には、養殖業を営んでいる小学校の PTA の役員さんたちも、午前中の座学に参加してくれました。ありがとうございますと挨拶して、途中でちょっと用事ができたからということで、退席したんですね。何かあったのかなと思って午後浜に行ってみたら、その理由が分かったんですね。朝あったはずの大きなフックとか、ロープとか、あるいは瓦とかが片付けられていたんですね。私たちも漁師さんのせいにしたくなかったっていろいろ配慮はしたつもりだったんですが、中学生も参加した研修会だったので、ああ恥ずかしいんだよねってということだったんですね。そういった気遣いっていうものも、もっともっと考えながら進めていかなければいけないと思ったエピソードです。綺麗にしたいのは皆同じですので、また会を重ねる中で来ていただいて、話し合いをしたいなと思っていることです。ここまでの海洋プラスチックごみの指導実践について振り返りながらお話ししてきたんですが、悲惨な状況から入らなければいけない場合も時にあるのかもしれないけれども、やはりさっきのくじけてしまうようなことになりやしまいかという思いがありますので、やはりあの豊かな海であるとか、美しいであるとか。そういう体験を大事にしたいなと思っています。子供たちにそういう活動させることで、利害関係のある調整であったり、あるいは合意形成を促して、巻き込んでいくといったところにも、役立ってくるんじゃないかなと思います。夢を持ってチャレンジしているような事例。こういったものを子供たちと共に学んでいくことも、すごく大事だと思っています。兼務で行っている九条小学校の子供たちと、7 月に岩井崎行きました。アマモがもう回復して、ものすごく生き物が豊かになっていました。待ちに待った体験活動です。写真にあるようにアメフラシとその卵ですね。オレンジ色のものがあつたり。あるいはカレイを捕まえたり、ワタリガニを網で捕まえたり。さまざまな活動ができました。原体験っていうのはすごく大事だんと思ってきました。そんな中で、やはり漂着ごみが目について、集めてきた子供たちもいます。少数ですけども、感想に書き込んだ子供もいました。どこかの段階で、共通の体験として想起させて、学習素材として扱ってきたいなという思いを持っています。これからのところになりますけれども。体験をした後、今度は理論知識的なところなんです。研究者の方をお招きして、寒海性の生き物と、暖海性の生き物が入り交じる三陸の海の豊かさについてお話をしてもらいました。いつもだとそこで終わるんですが、ちょっと海流に踏み込んでお話ししてくださ

いってということで、お話ししていただきました。潮目ができるので良い漁場になる、で大体終わるんですけども、何で潮目ができるとプランクトンが湧いて、魚が豊富なんだっていうあたりも分かりやすくお話ししていただきました。一回の話ではなかなかあっていうところではあるんですが、社会科でも水産を学んでいるので、サンマがなかなか取れないという気づきの所と、合わせて深めて、総合的な学習のところでも、海水温分布図というものを使って、学習をしてみました。サンマというのは、12度から20度の水域を好むと。入れて、当てはめてみると、もう北海道にも届かない。8月末の図だったんですけども。じゃあ相当涼しくなって寒くなって、海が冷たくなると寄ってこない。それからサケもさっぱり上がらないって言うんですけども、更にこの図に入らないぐらいの北にいるんじゃないかなと、こういったことも海流、あるいは海水温の勉強でつながってきます。これは windy っていうソフトですけども、これを使っていくと海流の様子も分かります。このまま直接まだ子供たちには預けていないんですが、教師側の勉強にということで、今使っていますけども、海流の学習をもう少し整えていくことで、さまざまな学習ができるかなと思っています。特に寒流によって海洋ごみが集積されていること、東日本大震災のがれきもそこにあるんじゃないかということですね。ここにある黄色い浮きは、南三陸町の慶明丸っていうレストランの看板として使っていたものなんですけど、5000キロ離れたアラスカで見つかり、2年後レストランのオーナーの元に戻って。レストランを再開したというエピソードがあります。それから、右側の気仙沼市の魚市場のポリタンクですけども、これは逆に10年かかって沖縄の方に流れ着いて、波照間島に流れ着いて、見つかったということです。このような拡散と集積を繰り返している、この海洋ごみというものにも目を向けていくためには、海流の学習が大事なのかなと思っています。ということで、実行委員会で行ってきたこと、それから学校実戦で気付いたこととお話ししました。これからまた、実践も続けていきますので、またお話しできるような形になればいいかなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

司会：ありがとうございました。本日は60枚もPowerPointを用意してくださいまして、海のごみを、今まで考えていた中で、単に海岸を清掃するというだけではなくて、海洋プラごみをテーマにすると、こんなに広がりや深まりがあるんだということ、私は感じる事ができました。また、もしその思いですが、ご質問をいただければと思いますけれども、何かありますでしょうか。はい、じゃあお考えの間、私の方から。私はこの海洋プラごみの教材についてお話を聞いて思ったのは、プラスチックごみっていうところに焦点化されているんですけども、実は流木であったりアシやヨシ、人間の生活そのものがプラスチックごみに出されていると。それを子供たちもですけども、逆に言うとその、流木、アシやヨシ、自然物は自然物だけでも、やっぱり人間の生活とかで出たと、そういう認識でよろしいんでしょうか。

谷山：流域で暮らしている年配の方に聞くと、昔鎌で刈って、色んなところに使っていたと。今のようにぼうぼうに生えていたわけではないんです。それが枯れて、その新しい芽が出てくる時に残っているんですね。それが、大水が出た時にそのまま流れていくと。刈り取って脇に置いていたっていうものもあるかもしれませんが。管理の問題がかなりあるんじゃないかなというお話でした。ですから、暮らしの中で使っていくようにしましょうというのは、なかなか難しいので、この辺は相当時間が掛かる課題になっているんじゃないかなと思っています。

司会：はい、それではいかがでしょうか。メグロ先生お願いします。

メグロ：ありがとうございました。ひとつだけ、教えていただきたいんですが、海に学ばっていうものをさせていうか、現在気仙沼市の、もしくはどのように使っているのかと。お願いします。

谷山：私たちは助成金をいただいた形で作ることができましたので、市内の小中学校、幼稚園に配布をして、また研修会に参加した先生方、あるいは行政の関係者の方にお渡し。またプラスチック関係の活動でしたので、気仙沼市のプラスチック関係の協議会のメンバーの方、大学関係から教務職員の方、さまざまな団体の方にもお届けしていますね。ちょっとこういう形の冊子なんか、もうちょっとこの見開きしやすいものにできないかとか、あるいは教材化できないかとか、話が出てきているので、今後また使いやすいものにして行きたいなと思っています。

メグロ：ありがとうございます。

司会：その他いかがでしょうか。もうひとつぐらい。はい、お願いします。

：申します。ありがとうございます。この海洋プラスチックごみへの取り組みで、子供たちというのはどんなふうに変ったのか、ありましたらお聞かせいただきたいなと思います。

谷山：中でお話した、2019年と2020年の小学校の子供たちの場合は、自分たちでプロジェクトを起こして、あるいは発表会で発表してという形ですから、外にこうアウトプットできる環境があったので、自分たちの思いを色んな方に届けるという形でこう満足度を得て、また次の活動につなげることができたと思います。今務めている九条小学校で、これから見られますので、非常に考えているタイミングを測りながら、わざとらしくどんと持ってくるんじゃないかと、先ほどお話したように、アクションの流れのタイミングでこういうのもあったよね。このことについてどう思うっていう形で、子供たちの話し合いをベースにして、インプットできるような知識体験っていうものをくっつけようかなと考えています。担任の面瀬の先生と、今話し合いをしているところ、ぜひそういうことが、学生ができることになっているところですよ。

司会：はい、ありがとうございます。八戸工大さんは、まだでは、。お話頂戴できればと思います。

質問者3：（聞こえません）

谷山：小学校から中学校への学びってということで、自分今ちょうど小中連携の学区に行っているの、そこはひとつの課題だと思います。ただそのジャンルのなこう、領域的な扱いとして、プラごみによって考えると、やはりすごく難しくなってくるんじゃないかなと思うんです。先ほどのお話にありましたように、プラごみの学習を通して、どんな学びを知っていくのかっていうことだとつながっていくんじゃないでしょうか。探求的に調べていくんだとか、あるいは外部の人とつながっていくとか。学び方を積み重ねていくフィードバックをしながら進めていくような体験があると、それらは発表会に行くと発表したとか、そういう体験があると中学校へ行ってもどんどん活躍できるだろうし、高校は更に探求の時間っていうところでつながっていくんじゃないかなと思います。それらの小、中ってつながっているところの話で、やっぱり総合的な学習で学ぶとなると、他の学校、地域の所に行くとも一般化するものではないので、その辺は気仙沼市だったら気仙沼市で、どういう学習をしていくかっていうリテラシー的な話し合いが必要になってくるのかなというふうに思います。

質問者3：ありがとうございました。

司会：はい、ありがとうございました。それでは谷山先生、本日はたくさんいただきまして、本当にどうもありがとうございました。

### 3.東北地方各地域団体からの活動リフレクション

自然環境・地域文化をテーマとした探究学習と国際協働学習

「蜘蛛の巣を飛び回る蜘蛛になる」

尚絅学院大学総合人間科学研究機構客員研究員 海藤節生

司会：それでは少々切り替えの時間を頂戴します。

海藤：市瀬先生聞こえますか。

司会：海藤さん、聞こえます。PowerPoint はどちらでしょうか。

海藤：PowerPoint は共有でいいですかね。

司会：こちらで操作しますか。

海藤：これ共有画面ですか。

司会：まだ共有にはなっていません。今から PowerPoint を共有させていただきます。

海藤：これでなりましたか。

司会：見えています。

海藤：じゃあ、そちらがよろしければ、勝手に始めちゃいます。

司会：はいお願いします。

海藤：はい皆さんこんにちは。こういった集まりでお話しするのは、とても久しぶりです。市瀬先生、今日のご招待いただきありがとうございます。この道 20 数年で感じていることを、単にタイトルとして付けただけですが、忘れがちなので肝に銘じています。そしてここに書いていないんですけども、とても大事なものは誰がやったのかではなく、何をするのかということです。ここにお集まりの皆さんは、さまざまなネットワークに関わっているはずで、そのネットワークをしたたかに活用する、持続可能な社会形成のために学び合っ、もう 20 年以上になりますが、この明確な目標に向かってみんなが頑張ってきました。皆さん、現場をお持ちです。今日の学びを明日の現場でスピード感を持って具現化する。そんなお役に立てればいいなと思います。これまで多くの学び合いの場に参加し、世代・分野を超えた人との交流の大切さ、感覚、感謝、持続可能性と複眼的視点、この 5 つに重点を置いて活動してきました。自分のこれまでを振り返る意味で、自己紹介から始めさせていただきます。その後、時間の許す範囲でリフレクションさせていただきます。私の名前は海藤節生と申します。市瀬先生、45 分まででよろしかったですか。

司会：どうぞお話しください。

海藤：はい。昭和 33 年 3 月 3 日、仙台市中心部に生まれ、大学まで進学。この後、ご覧のような道を歩んできました。職業、職種、自営、運転手、営業職、技術職、管理職。さまざまな立場で、ものやサービスがどのようにつながり、社会の中で関係性を持っているのか。こんなことを学んできたような感じがします。2001 年、その転機となったのが政治との関わりです。行動しなければ変わらない、変えられない。選挙期間中、この言葉を繰り返し、それが今に続いています。その時、市民活動と出会い、時間がかかりがちな政治に反して、課題に対し直接行動する市民たちのスピード感に取りつかれていきました。世の中のおかしいを変えたい。当時イベントごみは全て、燃えるゴミとして焼却処分されていました。イベントで発生するごみを分別し、適正にリサイクルの流れに乗せていこうという、そういう取り組みを始めました。行動すれば変えられるという信念が社会を変える自信となりました。仙台にワケルくんが登場し、現在はプロ野球楽天やベガルタ仙台など、スポーツスタジアムにリサイクルステーションが当たり前設置され

ています。こういった活動がマスコミ等に取り上げられ、やがて学校現場や講演会に招かれるようになりました。ちょうど ESD の 10 年がスタートする時期と重なり、仙台広域圏 ESD/RCE の運営委員として、今日参加していますスズキ先生をはじめ、国内の RCE とも関わるようになりました。宮城教育大学東北地域 ESD 活動支援センターの ESD コーディネーターとして学び合いを重ね、さまざまなシーンで ESD を実践してきたところです。今までの関わっている、今も関わっているいろんな人たちを並べてみましたが、一番最初は 1 ミュージシャンとして市民活動に触れ、感じたことをそのまま歌にしました。一番右の上ですね。2001 年作った曲です。2 番の歌詞のところに、本当の豊かさを守り伝えよう。どこかで貧しさに苦しんでいる命を自分のことのように感じていきたい。20 年以上たった今も、変わらぬ想いです。あれから 20 年、この歌の思いを世界が引き継いでくれました、と私は思っています。2015 年、SDGs が採択され、SDGs ウェディングケーキモデルが示すように、全てのベースとなるのは地球環境です。都市部に暮らしているとなかなか見えてきませんが、山の中で暮らしていると見えるものが違います。この図は、地球の限界と呼ばれるプラネタリー・バウンダリーというもので、9 つのプロセスを示しています。地球温暖化はもちろん重大なリスクですが、すでに不安定な領域を超えてしまっていると言われる、生物多様性、絶滅速度のスピード、またリンや窒素が本来の生物による循環システムを破壊していると言われております。さらに今後心配されるのが土地利用の変化です。グラフ的に見ると、気候変動よりは少ないんですけども、私たちのこれからの方向性によって、かなりリスクが高まると思っています。太陽光、風力発電の設置場所、森林、農地。いろんな利用の仕方があって、それが地下水、さらなる温暖化の進行、生物多様性への影響など、複合的な環境影響がとても不安な材料となっています。持続可能な開発目標は、どれも全て欠けてはいけないサステイナブルな未来への要件です。左の下に移りますが、宮城県で重要な水がめ、七ヶ宿町。少子高齢化によって人口減少、そして農地や山林が手つかずに放棄され、自然が荒れ放題。そんな不法投棄が後を絶ちません。地域活性も視野に 2007 年、森林の活用、地域の旬の食材利用、交流の場として石釜ピザ屋の経営を始めました。翌年、この地域から現代社会の課題を直接解決する持続可能な未来を目的に掲げた NPO 法人を設立し、ごみの 0 エミッションや体験活動を開始しました。2011 年から七ヶ宿で森林体験授業をやっており、今年はオンラインでタイと気仙沼市の公民館と七ヶ宿町、参加者をつなぎ、地域や文化の違いを交換しました。気仙沼の子供たちが海まで、タイではどのくらい時間がかかりますかという質問をしたところ、海まで 14 時間かかります、海を見たことがありません、行ったことがありませんという答えが返ってきた。そういう声に、気仙沼の子供たちは地域の自然環境は本当に素晴らしいんだと。海も山も近くにある。そういう環境に感謝する。そんな学びになったと思っています。自分たちができる方法で活動しており、もちろん東日本大震災では復興支援に汗を流しました。これからに向けて、左上の写真ですが、これは▲（シマノ）先生ですけれども、学び合いセミナーも集会所で行い、これからの学校地域というものについて、みんなで話し合いをしました。白石ユネスコ協会の会員として縁が生まれ、数年前から小中一貫校の総合的な学習の時間を担当しています。5 年生から 7 年生が毎年テーマを変えて、水、森、土について学びます。地域の自然からそれぞれのがつながりを知り、大切に作る心を育みます。当時この小学校、ミヤザワ教頭先生という女性の先生がいらっしゃいました。何日もかけて先生何時に学校来るって言ったら 7 時前には来ていますというようなことで。朝の朝、早朝からですね。何日もかけて作り上げた総合のカリキュラムです。それを今も実践しています。昨年、小原の 5、6、7 年生です。7 年生は、シンガポールの日本人学校と交流を行いました。お互

いの学校紹介、授業の紹介などをしたところです。これは動画が動けば皆さんに見ていただきたいと思いますが。

（動画再生）

司会：海藤さん、音が出ていないんですよ。見えてはいるんですけども。

海藤：見えてないですか。

司会：見えてはいるんですけども、音が聞こえてなくて。

海藤：このまま終わってしまうので、また元に戻りたいと思いますが、よろしいでしょうか。興味ある方は、私携帯番号を乗っけていますので、そちらに連絡していただければと思います。聞こえますか、市瀬先生。

司会：とてもクリアに聞こえています。どうぞ続けてください。

海藤：はい。また白石ユネスコ協会では、ユネスコ世界文化遺産。和食をテーマにユネスコスクールの学習支援をしています。また、昨年度から教員と地域がつながり、共同していくために、会員と教員の交流を始めました。本年度、日本インド教員招聘プログラムに白石から先ほど紹介した小原小中学校、そして白石中学校の教員が代表として参加します。11月6日の開会プログラムでは、日本の文化紹介として私の森からですけど、ACCUの50周年記念ソングの発表、そして白石の子供たちによる日本舞踊が披露されます。私はまた、専門学校と短大で教員として地域文化ボランティアという授業を担当しており、昨年度からタイの高校生たちと交流を行っています。このことで、私自身が国際理解の必要性を強く感じました。また、現地の先生方とつながりを持つことができました。チェンマイの高校の学校紹介の動画ですが、音声が出ないということなので、それでも許せる範囲かな。皆さんすごく日本語が堪能です。チェンマイってタイのこの辺にありまして、聞こえないんですね、音声は。

司会：音声は聞こえてないけれども、画像はクリアに見えています。

海藤：聞こえないですね、音声。

司会：音は出ていないですね。

海藤：はい。色々交換した動画とかもたくさん持っているんで、興味ある先生いたら、向こうの学校紹介とかもお送りすることができますので、連絡いただければと思います。そして第2次世界大戦で戦地となったこの高校にも、日本人の慰霊碑があったりということで、平和に対する意識が高いということも、逆にタイの高校生から教えてもらったりするという学びにもつながりましたので、国際理解っていうのはすごいなと改めて思っています。今年は、今年の8月ですけども、実際タイの交流校にお邪魔して授業を行いました。日本語の教室があったり、色々都合もあって、600人以上の高校だったので、大分いろんなことがあります。先生方に見ていただきたいのは右下なんですけれども、これが教員の部屋なんです。こんなに広いところで教員の方が授業の準備をしたりしています。なので、学校に行くと、皆さん書類に囲まれて仕事をしているのが可哀想に見えてきます。さらに、林業を学ぶ高校生に対して、一から実習指導、また山から家になるまでを実際に見学するインターンシップも毎年行っています。私自身も森林、林業についてここで教えながら、学ぶ時間となっています。また普通高校ですけど、総合的な学習の時間、90分17回担当して15年になります。色々な農林の経験を積んで、子供たちの興味のあること、結構機械に興味があったりですね。同じことを続けていくことが苦手なはずなのに、こういう機械とかになると一生懸命というのが不思議な感じもしました。まあ、15年やっていますが、無償でやっております。20ヘクタールの森林に囲まれた大学の森づくりを7年前に提案し、尚絅学院大学ですが、里山プロジェクトを立ち上

げました。現在もオブザーバーを続けており、学生たちに森林体験の機会を作っています。来週土日にイベントがありますので、宣伝を載せさせていただきました。一人ひとりの気づきと行動が持続可能な社会をつくるということで、理事を務める環境会議所東北。こちらは企業を中心とした環境 ISO の事務作業を行うのが主な仕事ですけれども、環境甲子園という高校生対象のアワードを 22 年実施しております。また、東北 6 県の高校に対し、SDGs 出前講座を無料で行っております。昨年度は結構応募がございまして、仙台第二高等学校から、あさか開成高校であったりですね。青森山田高校と。いろんなところにお邪魔したり、オンラインだったりで講演をしました。今年は金足農業高校ですか。こちらだけしか今のところ応募がないんですけれども、学年ごとにテーマを変えて話をしてほしいということで、1 年生、2 年生、3 年生。1 年生は SDGs 全般、2 年生は国際理解的 SDGs、3 年は住み続けられる町というテーマで SDGs をという講演でございました。タイに行くので質問とかオンラインやりますかということですが、時間が合わなかったので、タイの調べ学習をしているチームの質問を持って、タイに行って色々調査してきましたので、今後 11 月にオンラインでタイの報告会をやる予定にしております。今日、今、私定禅寺ストリートにありますが、私自身音楽をやっていた経験もあり、使用済み弦のリサイクルシステムを試験的に開始したところ、多くの賛同を得ております。4 月に開始して、9 月末で 30 キロぐらいの弦を回収しました。アコースティックギター、皆さん何となく想像してみてください。アコースティックギターの 1 弦から 6 弦までで、20 グラムもあります。たった 20 なのか 20 グラム。これが積もってですね、30 キロのステンレス、銅、ニッケル、スズ、リン。こういうものが集められました。これが SNS をひとり歩きして、今東京、岐阜、大阪、九州まで飛び火していて。ちょっと処理に困っている状態でございます。グリーン購入の普及を目的に、お買い物で未来を変えるライフスタイルで未来を変える。先ほどのお話にもありましたが、プラスチックを減らすにはどうしたらいいか。お買い物でも減らせますが、ライフスタイルでも減らせます。そういう普及啓発活動も行っております。また、事業所見学会、先進事例をみんなで見て歩く。そのような事業も行っています。これは先日、一番町で開催された SDGs マルシェへの出展ですが、会員企業が様々な取り組みをしている。さらにモノを作っているということが、やはりグリーン購入ネットワークの会員さんたちの、実践発表の場となっています。今日は先生方が多いと思いますので、エシカルちゃんと一緒に考えよう。宮城エシカルドットコム。こちらを検索して見ていただくといいと思いますが、身の回りの気づきを探求し、漫画チックに紹介しています。例えば、カップラーメンひとつに 15 ミリリットルの油がありますよと。そんなに使われているんですよとか、その油はどこから来るんでしょうとか、パーム油の問題に触れたり、認定パーム油の話があったり、そういうことも載せていますのでぜひ、いろんな種が、そこに授業に使える種があると思いますので、宮城エシカルドットコム。こちらを覚えていただいて、後ほど見ていただければいいのかなと思っています。一生懸命頑張っている方が、もう身近にも遠くにもたくさんいて、ここにはクモの巣が張られている。勝手に消えたりすることはないと思います。自分のそのクモの巣の中で、獲物をじっと待つのではなく、ネットワークを飛び出してみてください。飛び回り行動してこそ、ネットワークは生きてくる。これは私自身がこれまで感じてきたことです。大切なのは、思いを胸に動き続けることだと思っています。明日の現場は未来に続いています。これまでにとらわれず、創造力を発揮して、頑張りましょう。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

司会：ご講演ありがとうございました。海藤さんの言葉に、持続可能な未来に向けてのエンパワーメントをいただいたところです。一回ちゃんとお話を聞きたいと思ひまして、今回長く時間を取って、ご準備いただいたところです。それでですね。本当にいろんな切り口があって、市民社会、地域社会。我々の身の回り

の社会で色々と集めている力で変えられるという信念を持って取り組まれていて。その中にいろんな要素がたくさん入っていたんですが、海藤さん学校教員、我々から見ると学校教員なんですけれども、その支援者との立場からいろいろな情報をご提供いただいたところです。はい。もしせっかくの機会ですので、こんなところ聞いてみたいとか質問してみたいということがあれば、お願いしたいと思います。いかがでしょうか。では私からお願いします。海藤さん聞こえますか。

海藤：ちょっともやもやってという感じで、はい。

司会：私は国際理解とかが出発点なんですけれども、チャンギ校とかチェンマイの学校さんとか、みんなつながりたいなと思っても、なかなか日本人学校でもチャンギ校って大きな学校ですよ。そういう学校がうまくつながれて交流したって、ほとんどケースとしてはないんですよ。どうやったらその関係を築いていけて、そういう機会を持てたのかっていうところを教えていただければと思いました。よろしくお願いします。

海藤：チャンギ校に関しては、一番最初にゲストティーチャーで呼ばれた仙台市立立町小学校の教員でありましたツツミ先生という方が退職後に行っていて。それを聞きつけて、直接交渉して現実化させたという（流れ）です。校長先生の提案により、直接の学校紹介よりは、事前に動画を交換した方がいいです。時間的にもいいんじゃないかということでお話があり、事前に見てその状態の中での質問交換をしました。ちょうど冬だったので、小原は雪に囲まれているということ。でも、シンガポールではもちろん雪が降らないので、その雪を見るだけで大騒ぎでね。そんなところがとても、びっくりしたところです。タイの方は、市瀬先生もご存じで、皆さんもご存じとは思いますが、ユネスコスクールの事務局、国内の事務作業をやっておりますユネスコ・アジア文化センターACCUという団体がございまして、去年 50 周年を迎えましたが、こちらに、そちらにお願いしたんですかね。無理矢理お願いして、それで向こうも忙しいので、時々ほっておかれるので。ほっておかれる時に、やはり今 Google 翻訳とかいろいろありますので、そういう中で実際の先生につないでもらって、あとは自力でやっていったという中で、今年の現地訪問であったり、現地からの日本へのオンライン授業であったり、気仙沼の交流であったり。そういうものを作り上げていったという形です。ですからまあ、したたかにというタイトルで書きましたが、もう関係性をしたたかに利用すると。何のために、持続可能な未来のために、世界の平和のためにってということかと思っております。皆さんも同じだと思うので、したたかに市瀬先生を利用して、せっかくこういう集まりで面識を持てば、必ず達成できると思いますので。思いを胸に頑張りましょう。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。今、さらっと言われたけど、多分この関係をキープして、こういう展開にしたのは、随分ご苦労されているんだと思いました。今のお話の中から汲み取りました。いかがでしょうか。何かご質問がしたいこと、頂戴できると思います。海藤さん、今からライブなんですか。

海藤：はい、ちょうど定禅寺で、3時からライブなので。ぴったりの時間で、今から音をチューニングしたりするので、ちょうどいいかなって感じですね。

司会：ライブ前でもそんなリラックスされてるってすごいですね。あと 15 分ですよ。

海藤：まあ、すぐですので。

司会：さすがプロフェッショナルでいらっしゃる。あそこ、弦の方はぜひ回収して、また使っていただける。あれは価値があるんですか。金属として回収して、価値が出る、生まれるものなんですか。

海藤：そうですね。岩手の企業が、スズと銅を取る加工場がありますので、そちらの見学に、こういう人たちと一緒に見学に行くと、実際そういう回収があるんだというようなことを知っていただくようなことをしていきたいなと思います。

司会：ありがとうございます。今、今日は仙台駅前も歩行者天国をやっているんですけども、あそこの木材とか、回収していないみたいなんですよ。無駄だなんて話をさっきしていたんですけども、ちょうど海藤さんの今日のお話を伺えて、本当に良かったです。じゃあ時間になりましたので、ぜひライブのほう、頑張ってくださいと思います。ありがとうございました。

海藤：ありがとうございました。失礼いたします。

司会：それでは少しだけお休みいただいて。

#### 4. 教員による本年度の実践発表

ホールスクールで ESD に取り組む―妙高市立斐太北小の実践  
 妙高市立斐太北小学校校長 飯塚教裕・佐藤仁

飯塚：それでは続いてなんですが、斐太北小学校のどのような状態か地図を見ていただくと、どのようなところに位置するかのイメージなんですけれども、ご覧いただくように周囲には田畑が広がっている状態です。校区には矢代川というのが日本海につながっております。そして、私もここに赴任して初めて知ったんですけれども、この斐太県民休養地っていうのは毎年数万人の方が訪れて、山登りや自然観察等をされるということでありますし、この鮫ヶ尾城。先ほどトップ画面でありましたけれども、旧城跡があるところなんですけれども、ここも多くの方が訪れています。そして、この勝福寺というのは、上杉景勝、上杉景虎の関係で、上杉景虎の供養塔があって。毎年、私も知らなかったんですけれども、歴女の方が毎年多くの方が訪れて、ここでいわゆる法事と言いますかね。毎年決まった日に上杉景虎の供養をされているということを、初めて知りました。ご覧のように、自然と歴史あるいろんな環境の中である斐太北小学校であります。さて私たちの斐太北小学校なんですけれども、ESD 教育の推進に向けて、私自身が赴任にした中で、3つの基本的な考えということで、にも示しながら、話をしながら進めていきます。1つ目は価値づけ、位置づけであります。これはみらい学習。これはもう推進してきた教育でありましたので。これまでの教育活動を ESD 教育に落として、自分たちのこれまでの活動は、このような良さがあるんだということを理解し、それを継承しながら新しく発展していこうということを話しております。2つ目は自校化であります。先進校の取り組みを学びながらも、自分たちの子供、自分たちの教育活動の実態に合ったものになるよう熟議して、それを実践しようということで話をします。3つ目は、連携、発信、交流であります。私自身、子供が成長する上で、他者、大人と関わる体験や、経験を通して、子どもたちが違う景色を見て、感じてほしいなと考えています。また校長として、一方では働き方改革も視野に入れなくてはいけないと思っていますので、前例踏襲、前年度の踏襲。これも熟議をした上で、考えながら働き方改革を視野に入れながらも話をしていきます。では実際に、具体的にどのような実践を行っているか。学校全体で行っているかをお話させていただきます。最初に価値づけ、位置づけですね。前述しましたように、生活科、総合的な学習の時間を「みらい学習」と呼んでいます。画面はみらい学習の1年間の単元構想表です。毎日学級担任が、1年間の活動を、見通しを持って作成しています。これをもとに、ESD 教育を通して子供たちが身につけたい力、SDGs の 17 の目標、どこに関連するかなということで考えています。ちなみに、単元構想表なんですけど、年 3 回見直しを行っているんですけど、それに各学期なんですけれども、この見直しにあたっては学校運営協議会、14 名いるんですけども、委員の方がみらいトークというものを開催して、その専門的な立場からこうした方がいいんじゃないかとあの時はこうだったんじゃないか、こんな活動を取り入れたらいいんじゃないか。こんな人材があるよということもアドバイスをいただきながら取り組んでいます。画面に示したのは、チャートカレンダーというものを今年度から作りました。見える化ということを図るためにですね。年間の授業は、教育活動を SDGs の 17 の目標との関連性がわかるように作成しました。17 の目標を縦軸、月を横軸として、各学年の活動を色分けしながら落とした。こちら、今年度から作成しましたので、まだまだ改善点がたくさんあると思っています。まだバージョン 1 の段階で先ほどのみらいトークですね。学校運営協議会の委員の方との話し合いも含みながら、徐々に変えていこうということで、確認しております。続いて、自校化における取り組みを紹介させていただきます。ESD 教育における 6 つ

の視点、7つの能力・態度は皆さんもご存知のように、このようになっております。ただ、これは文字にするところになっているんですが、職員、そして子供たちは、なかなかこれはやはり分かりにくい。どういうものなのかと。全員が同じレベルで理解する方がいいだろうということで、これを斐太北小学校ではこのようにしようということで、このようなイラストも入れながら、表現を変えてみました。作成にあたっては、令和4年度から校務文章上にESD部会というものを設けましたので、子供たちの実態を踏まえながら作成しました。左部分が6つの視点、右部分が7つ能力・態度ということで。各教室に掲示をして、1年生でもわかるように。表現であったり、ふりがなを付けるなど、そのようなことで取り組んでおります。また、授業や単元を終えた後、SDGsとの関連や学びを、子供たち自身が振り返ることが必要だなということで、名前はマイカードと呼んでいるんですけども、マイカードを作りました。こちら先進校のものを色々見させていただく中で、自分たちの学校にどういったものがあるのかなということで、低中高と、学年に分けて作成しました。一つ説明させてもらいますけれども、1年生。これなんですけれども、今日勉強したことはどれと関係あるかなということで、1年生はそこをまず判断からでき、そして感想、記述をするというようなカードになっております。次に連携、発信、交流です。子供達の成長、そして子供たちが違う景色を見ることができるように、私自身、この3つの活動を大切にしたいなと考えています。連携は他者、大人との連携を積極的に設定しています。学校運営協議会の委員を中心に、たくさんの地域の方々、学校教育活動に参画していただいています。特に今年は5年生のコメ作り、そして2年生の畑等でも、農業法人、地域にある農業法人と連携させていただいて、専門的な知識だとか、専門的な器具だとか、方法だとか。そんなことも指導いただいています。この写真なんですけれども、この写真は先ほどあった県民休養地を訪れる方に、地域のガイドボランティアの方が説明をするんですけれども、この地域のガイドボランティアの方々と一緒に県民休養地に行って、子供たちが県民休養地の歴史や良さ、自然等について学んでいる写真になります。発信に関してです。自分たちの活動を保護者、地域、市内の他校にPRするため、今年度よりESDだよりというものを作成して配布しています。市瀬先生からもご指導いただきながら作成したものであります。たよりの中身としては、活動の概要、ESD教育との関連、子供たちの学び、振り返り等を紹介しています。当校のホームページにも掲載していますので、今後見ていただければと思います。最後の交流ですが、ここは今私たちの弱いところ、ウイークポイントかなと思っています。今後、改革して、先進校もそうですけれども、他校の児童との子供たちの発表の交流だとか、意見交換だとか。そんなことができれば、子供たち、さらには職員にとっても良い学びの機会になるのかなと思っています。今回の発表も、交流の場の開拓の礎となればというように考えています。それで、ここからは具体的な活動に移りますので、発表佐藤の方からお話します。

佐藤：では、斐太北小学校の佐藤と申します。よろしく申し上げます。私の方からは、みらい学習を中心とした活動について、具体的な活動についてお話をさせていただきます。まず、全校での取り組みなんですけど、最初に全校で取り組んでいる活動についてです。全校の活動として、子供たちが地域を理解し、地域に愛着を持てるような活動を行っております。令和3年度につきましては、初めて全校児童で鮫ヶ尾城跡まで登りました。皆さんの小学校であれば、どこの学校もわりとあるかなと思うんですが、縦割り班の活動として行って、全員が頂上まで行けるために声を掛け合ったりとか、支え合ったりしながら協力することの大切さを経験するという形で、頂上を目指して活動することができました。また、途中にある県民休養地などの自然に触れることで、ふるさとの良さを実感するっていうような機会にもなりました。令和4年度につきましては、今度は鮫ヶ尾城ではなく、校区の児童がいない地域っていうのを散策するウォー

クラリーを行ないました。色んなところにチェックポイントを設けて、地域の人から子供たちの活動の様子を見てもらうというふうな形で、地域の人と一緒に活動を進めました。子供たちが普段訪れることのない地域を訪れたということ、訪れたりとか、あとは地域でなかなか子供たちが行かない名所なんていうところにも触れられることで、子供たちにとってもとても良い経験になったのではないかなというふうに感じています。このような活動を通して、SDGsの目標、11、17の達成を目指しました。続きまして、各学年の活動を紹介します。まずは昨年度の4年生の実践です。4年生は、学校近くに矢代川をさっき紹介したんですが、もうひとつ本当にすぐ近くに内川っていう川もあります。そこを題材として川で遊んだり、生き物を捕まえたり、内川の源流体験を行ったりして、川の楽しさを体験する活動を行いました。ただ子供たちは遊ぶ中で、中心の写真にあるような川の中にブロックがあるよとか、左の写真のように岸が護岸されているよ、なんていうところで、何か川ってどんな場所なんだろうな、ただ遊ぶ場所じゃないんじゃないかな、なんていうことに疑問を持つようになりました。ここで、国土交通省の高田河川事務所の方を講師に招いて、川の持つ働きや役割について学びました。また、子供たちが川の環境が海の影響にもつながっているということを知り、川を知ることは海を知ることもつながるということも実感できました。そこから自分たちが関わった以外の川ってというのは、どのようになっているのかっていうのを気になって、それを確かめることにしました。

いくつかの河川に出掛けたりとか、川を活用した活動を展開しているNPO団体の方に教わったりして、川の色々な利用の仕方を調べました。調べていく中で、川の環境を維持できるように活動している人がいたり、川やその周囲を汚さないように活用しているということも知ったりして、SDGsの目標、12、14が意識されているんだなということ子供たちが実感するようになりました。子供たちは、このようなさまざまな川の活用の仕方とか、楽しみ方を知って自分たちの近くにある内川でも川に入る以外の楽しみ方ができるんじゃないかなということを考え始めました。そこで、内川に沿って歩きながら、他の川で見つけた活用の仕方を生かせるポイントがないかというのを探し、内川との新しい関わり方を考え、動画にして発信するという活動を行いました。それと同時に、内川の生き物について詳しい市の理科センターの先生から、内川の生物の多様性、希少性を教わったり、世界の水事情を調べて、世界的な水不足が心配されているようになってきていることを知ったりしました。これらの活動を通して、川や水を大切にしながら、多くの人たちにも内川を楽しんでもらいたいという思い子供たちは持つようになりました。そして子供たちは目標11の住み続けられるまちづくりってことを意識して、妙高市のSDGsフォーラムというものがあったんですが、そこで発表しました。発表することを通して、子供たちは川に対する自分たちの思いや考えを明確にするような姿が見られました。続いて、今年度の3年生の実践です。先ほど紹介した県民休養地を舞台に活動しています。斐太北小学校の近くにはその県民休養地なんですが、希少な植物があります。例えば白いカタクリの花が咲くってのがありまして、その時期に探しに行ったりとか、先ほどの鮫ヶ尾城なんかもその一角にありますので、長い歴史を有する史跡もあります。その場を訪れたようなことのある子供たちはたくさんいるんですが、その価値はまだ理解できていないというところもありました。自然や文化財の価値や、魅力を知ってもらおうという思いを持って活動するボランティアガイドの方々と一緒に活動する中で、子供たちは県民休養地の良さや魅力を感じていました。その中で子供たちは県民休養地を大切にしたいと、もっと知ってもらいたいという思いを強くし、教わる側から教える側へと景色の見方を変えて、共に活動しようとする目標17への意識が芽生え始めてきたように捉えています。子供たちは教えてもらったり、自分たちで見つけたりした県民休養地の良さや魅力を伝えたいと考

え、自分たちが感じた喜びや感動を味わってもらうにはどうしたら良いか。そして大好きになった県民休養地が、これからもこのままあり続けていくためにはどうしたらよいかという課題意識を持つようになってきました。2 学期に入ってから県民休養地の散策は、これまでとは視点が変わり、自分たちの立場から捉え直した良さを、どこでどのように伝えるかというふうな視点に立って散策するようになりました。そこからは県民休養地の魅力がいつまでも持続し、魅力ある地域であり続けることを狙った目標 11 に結び付いて活動する姿ではないかなというふうに考えています。続いては 5 年生の実践です。5 年生は地元を支える重要な産業のひとつである米作りに取り組んでいます。単純な栽培活動ではなく、米作りを行うことの必要性や米作りが抱える問題、米作りを発展させていくために地域の人達に取り組んでいることを学びながら、自分たちの立場で出来る米作りを行いました。自分達だけでは分からない部分に関しては、地域の農業法人の方から教えを受けたり、具体的な作業については、米作りを長年行ってきた学校運営協議会の方々に学びながら、子供たちの目指す米作りというものを進めていきました。米を作ることにより、作り方、収穫した米の使い道、地域との連携等、様々な要素と、目標をつながげながら自分たちの活動の価値を今見出そうとしながら活動を進めています。今度は 2 年生の実践です。2 年生は雪が降るまでの間、その時期ごとに合わせた野菜作りに取り組んでいます。地域の方々がやっている野菜の栽培方法を教えてもらい、継承しながら地元に合わせて野菜作りを学んでいます。野菜の苗も地元で種苗店があるんですが、そこに自分たちで買い付けに行って、地元で密着した野菜作りを行っています。当地区においては、各家庭において野菜を自家栽培することも生活する上では重要な意味を持つものであって、妙高の特色を生かしたまちづくりや、生活のあり方を学ぶきっかけとなっています。また、育てた野菜の使い道を考える活動として、目標 12 につながる栽培したものに対する責任、収穫したものを扱うことへの責任を意識できるように、活動を進めております。最後に 6 年生の実践です。6 年生は SDGs について学んだ際に、自分たちの立場からできることはないかということを考えました。そして、実際にいろんな取り組みを調べてみると、ペットボトルのキャップを回収してワクチンに変えている県内の企業であるとか、家庭で不要になった服を集めて、発展途上国の子どもたちに贈る支援をしている企業があるってということを見つけました。なかなか自分たちで直接支援するっていうのは難しいね、なんていう話をしていたので、企業の活動に賛同することで、間接的に支援できるっていうふう考えた子どもたちは、各企業の方から活動の仕方を教わり、それぞれの活動を進めました。そこには目標 17 をはじめとしたいくつかの目標を意識した姿があったのではないかなというふうに感じています。また、理科の学習と結びつけて、学校の緑化を推進することで、目標 13、15 を達成できるのではないかと考えて、花いっぱい運動を計画し、全校に働きかけていく活動をしました。最後、そのような活動についての評価についてです。これらの活動を行い、先ほど紹介したマイカードの他にも、左側のような当校で設定したルーブリックを基にしたポートフォリオを作成し、活動ごとにカードを使い分け、自分と SDGs がどのように関わっていたか、自分が意識できた目標は何だったかっていうことを子供たち自身が振り返り、認識できるようにしています。評価やポートフォリオに関しては、たくさんの改善の余地があるかなというふうに考えております。昨日も面瀬小学校さんとか、宮城教育大学と気仙沼市の連携センターのアサノ先生からお話を聞いてきた時に、評価の難しささというのを感じていますが、また子どもたちの学びの自覚をより促せるように、我々の方でも ESD 部会というのを設定しているんですが、そこを中心に改善に努めていきたいと思っておりますし、また皆さんからもいろいろご意見いただければなというふうに思っております。これで斐太北小学校の方の発表を終わらせていただきます。皆様よろしくお願ひいたします。

(拍手)

司会：ありがとうございました。本当にきちんとたくさんご準備くださりまして。妙高市ということで、今日は新潟からいらしていただいたんですけれども。

第2の只見町、あるいは気仙沼として、SDGsが活発になっていっていただきたいなと考えているところなんです。せっかくですので、学校の先生の皆様から、いろいろアドバイスがいただけると、せっかく来た甲斐もあるかと思しますので、ご意見等を頂戴できればと思います。よろしくお願ひします。はい、お願ひします。

イダ：福島県只見町の明和小学校のイダと申します。今日発表ありがとうございました。一步上の自分へというスローガンを旗にして、子供たちと共有されていたり、学校運営協議会とESDを連携させて取り組んでいたりと、大変素晴らしいなと思って何かこう、目から鱗が落ちたような気持ちでいます。それで、ちょっと教えていただきたい、もう少し聞きたいなというところがあって。その学校運営協議会でのみらいトーク。そのことについて、すごく私は興味を持ったので、もう少し詳しくお話をいただけたらなと思いました。

飯塚：はい。3回行なうんですけれども、それぞれの回でちょっと違っていて、最初に4月に行なうんですね。その時は、担任も新しく転入してきた職員もいますので、今年1年間総合ではこんなことをやりたい、生活ではこんなことをやりたいんだって言った時に、学校運営協議会の方は、もう複数年勤めて経験されていますので、反省も含めてこんなのがあるんじゃないか、こんな人がいるんじゃないかとか。担任は必ずしも、毎年全て同じではありませんし、思いが変わっているのもありますから、そういうところを話す時にアドバイスを伺って、スタートをきると。2回目は8月に行なうんですけれども、1学期を終えてみて、当然まずいところもあるので。修正をかける時に、担任はこういうふうにしていきたいと言った時に、学校運営協議会▲(の人と、こういうふうにする)という話でしょうか。それで3回目。私が来る前は年に1回だったんですかね。2回だったかな。年2回。去年は3回やりましょうと。要するに、締めをやりましょうということで、2月とか3月ぐらいにやるんですね。いわゆる最後の回ということで。終えた時、今年度はどのように成長したかとか、どういう良さがあったか。来年は、でもこんなことを改善だよって話をするんですけれども、必ずしも担任は持ち上がりではないので。そこで最後反省、振り返りというようなイメージの思います。

司会：はい。ありがとうございます。よろしいでしょうか。

イダ：ありがとうございます。

司会：学校運営協議会、非常に特徴的な地域かなというふうに思います。そのほかいかがでしょうか。

はい、メグロ先生お願いします。

メグロ：福島県只見中学校のメグロと申します。よろしくお願ひします。非常に学年に分けて、すごくいろいろな活動をされているなということで、すごく参考になりました。ありがとうございました。2点質問あるんですが、1点目は地域の方にたくさん入っていただいているということを見させていただいて。地域の方の変容なんか。地域の方自身の変容がもしあれば、教えていただきたいなというのが1点です。それからもう1点が、今度は生徒、児童なんですけど、児童の自発的な行動について、もうちょっとお聞かせ願ひたいなと思いました。例えば、内川という川のことについて動画を発信したということなんですけど、これはどのような子供たちが、言動が、先生たちが、どのように支援されたのかとか。それからペットボトルのキャップのことなんかもあったかと思うんですけれども、これも子供たちの話の中でこういったのが出てきたのか、それとも先生方がこういうのあるよっていうふうで紹介されたのかどうかということなんかも、もうちょっと詳しくお願ひします。2点よろしくお願ひします。

飯塚：それでは1点目は私の方からお話させていただきますけれども、私も2年目なので、昨年との違い、その前との違いを学校運営協議会の方と聞く。私自身が体験したことでお話をさせていただくんですけども、昨年よりもいろんな活動に、保護者や地域の方が来ていただけるっていうのは明らかであります。例えば、2年生の畑のやつも学校運営協議会とか、地域の方だったんですけども、もう保護者が本当に来てくれて、一緒に子供の様子を見ながら、苗植えとかやっていたいていますし、保護者じゃなくても、祖母の方が結構来てくれるんですね孫の姿を見に。それはすごく感じているところではあります。あとはESDだよりを回したので。各、毎回出るたびに各町内に回覧で見ますので、町内の方とか、そういう方たちからは活動をやっている様子に関してはお声がけいただくことは増えているかなと思いますし、非常に本当にどちらかという、ずっと自分も、親で言うと、子供も孫も斐太北小学校という方がすごいので、そういった面で、応援していただけているのは感じております。

：ありがとうございます。先日実は、階上小学校さんに私、行ってきたんですが、その中で自治会長さんがいらっしやったりとか、素晴らしいなというふうに思いました。私たちの所はそういうところ足りないので、参考にさせていただきながら、これから学び続けていきたいと思います。

：すみません、2点目の児童の自発的な行動ってっていうことで、こちらは私の方からお話させていただくかなと思うんですが、内川の紹介をしておりました。去年私担任してまして、とりあえず何て言うか、子供たちも経験からしか入れなかったんで、とりあえずいっぱい体験させました。いや、色んな事させて、結局川ってどんどこって言った、こういう楽しみ方ができる、ああいう楽しみ方ができる、こういうのができるよって話したときに、ああ、そかって。そかってやっぱり内川とはつながってなかったんで、それって内川は見ているの、なんて話をしたら、わからないって。どうするって。見てみたいっていうから、ずっと歩いてそこでこういうことができそう、ああいうことができそうだって言った時に、方向としては今まで出てきたような、ポスターにするとか、マップにするとかだったので、ああそれもいいね、なんて言いながら。でもさ、あなた方の気持ちで未来に伝える方法って他にないっていうと、とかって。ああもいいね、なんて言って。ちょっと誘導的な感じがあったんですが、できるだけ子供たちが自分達の表現でも伝えるような形に、少しずつ話をしながら、整えていくような。そんな感じで。そしたら何か動画にすればみんなに見てもらえるね、みたいな最後、誰かが誘導してちょっと何か仕立てたようなところはあったんです。そういう感じで、子供たちが考えてしていたところでした。ペットボトルキャップの方に関しては、それも私の今年担任している学年なんですけど、そっちで言うと、正直こっちは子供たちに何かできるかねって言った時に、やっぱり何もないところだったので、なかなかこう生まれませんでした。それで、ので、そこにいろんなところ散りばめたよとか、この中からなんかできそうなものある、みたいな感じで考えた時に、やってみたいけど、これってできそうだねって言うんだけど、だけどこれを集めてどうするのかな、なんて話をしたから、じゃあそれだったら聞いてみればいよっていうふうな形で、いくつかの選択肢の中から選ばせるっていう方法をとって。こっちはかなり、こっち主導でやったかなってところが、正直なところでした。まずは教えるっていうことも必要なかなというところで進めたところでした。

メグロ：ありがとうございました。すみません、もうひとつお願いというか、最後のスライドの、具体的な実践の(3)評価の学習シート、大きく見せていただけると。もしくはデータとか何かいただけると。ちょっと私、目がだんだん見えなくなってきた。これ見たいなというふうに思ったので時間あれば、見せていただけるとありがたいなと思いました。

：この評価、左側のやつですよ。

メグロ：左側のやつです。はい。

：市瀬先生に、評価についてご相談させてもらった時にルーブリックの資料として、それを基にばーっと作ったんですけども、なんかいろんなものがなんか、自分たちの中で処理しきれなくなってしまうので、もう少し何かつながるものないかということで、ESDの3つの視点の7つのもつてありますよね。それに合わせて、ルーブリックを作れないかっていうふうな話をして、それをまず、これができたらいいねっていうのを職員に話しながら、ルーブリックを作ってみました。更にその中で、子供たちが自分たちで認知できたらいいねというものを、更にそこからピックアップして、子供たちに考えてもらったかどうかということを実験的に試してみたのがこのシートなんです。ですが、実際やってみると、なかなか難しいなっていう。やっぱりそもそもこの評価っていうものが合っているかって、評価方法がどうなのかということと、あとは評価の基準がどうであるかということ。子供たちと、本当にこれは適正な評価ができるか。適正な評価っていうよりも、子供たちがこれを見ることで意識できればいいかなっていうふうな気持ちもちょこっとありながらやっているところがあるんですが、そういうふうにして考えたところがあります。なので、そこがもし必要であればデータを送っても全然構わない。

：今年から7月ぐらいで、最新ではなくて。

：とりあえず子供たちの変容を重ねていくことが大事なんじゃないかなというので、その上の部分は選択式で、下の方に言葉として子供たちの変容が見られるといいなと。記述式っていうふうな2段構えでやったら、子供達の変容を積み重ねで見られるんじゃないかっていうふうなのでやってみたんですが。今話した通り、まだまだちょっと改善の余地はあるので、ぜひ送らせていただいた上で、ご指導というか、本当にいろいろとご意見をいただけるとありがたいなというふうな思いがあります。

メグロ：ありがとうございます。。以上です。ありがとうございました。

司会：はい、ありがとうございました。それでは斐太北小学校飯塚先生、佐藤先生、ご発表どうもありがとうございました。

(拍手)

司会：最後の発表に参りたいと思います。皆さん、お疲れだと思いますが、最後は、今日は高等学校からご発表いただきます。はい、ちょっとパソコン切り替えさせていただきます。失礼いたします。

(2:27:14~2:30:36：無音)

坂上：…校、兄弟校です。全日制普通科、男女共学の高校です。平成30年に附属中学校を開校いたしまして、現在中学校1年生から、高校3年生まで518名生徒がおります。非常に女子の割合が多くてですね。6割、7割ぐらい。女子の生徒が在籍しています。卒業生の進学状況は、大体1割から全体の6割の生徒が、4年制大学に進学します。3割の生徒が短大、専門学校。残り1割の生徒が就職するような学校です。進学指導を強くやっている学校です。普通科ですけども、3つのコースを備えておまして、難関大学、それから、進学コース、それから普通の進学、それから就職を目指す総合コース。それから高等学校では大変珍しいんですけども、美術専門に学習します美術コース。あります。美術コースは昨年、一昨年と現役で東京芸大に合格者を出しておまして、卒業生の中には有名なイラストレーター。ちょっとこれは名前を出すことはできないんですけども、右下の猫のイラスト有名な方なんですけれども。活躍しております。本校は、2019年からESDを本格的に取り入れまして、活

動をしてきております。ユネスコスクールの認定を目指して活動しておりまして、2020年の9月には活動推進拠点として、登録していただいています。つい先月、市瀬先生のご指導もありまして、ユネスコスクールのキャンディデートに承認をされております。ユネスコスクールの認定を目指して活動したことで、色々校内が整理されたというメリットがありました。本校はもともと、ボランティア学外学習、それから国際交流も積極的に行ってきた学校ではありましたが、どちらかというてんでばらばらに、色んなことをやっていたというのが、ESDで共通理念ができたことで、目的とか着地点が明確化されて、色んな活動の横のつながりがはっきりしてきたなと感じております。ちょっと分かりにくいんですが、左上の写真は、工業大学で。姉妹校なので、いろいろ実験しているところで。右の大きい写真がフィリピンとのオンラインで交流しているところです。本校が長年取り組んできた活動に、観光ボランティアというのがありまして、八戸市内の観光地で、高校生が観光客の皆さんにガイドするっていうものなんです。もうこちらがですね。10年ぐらい続けてきた活動なんですが、コロナでガイドどころではなくなってしまいました。そこで今、生徒たちが八戸の魅力を発信する動画を作っています。こちらを発信することで、八戸の良さを知ってもらい、自分たちも知る。また観光客を呼び戻したい、地域の活性化につなげたいという思いで活動しています。今、まだ完成品ではないんですが、作っている動画をご紹介しますと思います。音が出ないこともありますかね。

司会：大丈夫だと思いますよ。

坂上：大丈夫ですか。ではちょっと行きます。

(動画再生中)

坂上：はい。完成しましたら、ホームページの方で公開する予定ですので、時間があればぜひ、本校のホームページの方もご覧いただければと思います。またですね高等学校では、小学校中学校さんもそうだと思うんですけども、総合的な探求の時間というのが今、令和元年度から行われております。本校では2年生からゼミという形に分かれて、ここのESDと関連させて、活動しております。教員が一人ひとつゼミを開講しまして、その中で生徒たちが興味のあるものを選択して、活動するということになっております。さまざまな活動がうまくさまざまな教育活動の流れにのって、生徒たち、うまくその自分のキャリアと学びを結び付けられた生徒たちもおります。それと2人のグループ例を紹介したんですが、一人は保育士希望の生徒でした。子供が好きで、何となく将来保育士なのかなという感じだったんですけども、学童保育のボランティアですとか、教育振興のボランティア、小学生対象のもの。NPOの方などをやっている中で、集団に馴染めない子供たちの存在に気が付いて。ここからの障害児保育ですとか、児童保育に興味を持って、だいがおります。次ですね。最近歴史女、歴史好きな女の子なんですが、探求学習の中で民俗芸能「えんぶり」。えんぶりの調査を行ってまいりました。ここでもそうだと思うんですけども、はっきりした資料というものが残ってなくて、全部だいたい口で伝わってきているものだったんですけども、これは書面に残している活動で、明治時代からの新聞を読み解いて、えんぶりの歴史を探って活動してきました。その中で、やっぱり民族芸能とか伝統芸能っていうものが、戦争とか景気とか、伝染病によって、幾度と廃止されるような危機を乗り越えてきているということに気が付きました。ちょうどこの頃でも、コロナでこのお祭りとか、えんぶりとかが中止になっている地域でもあったので、その辺りを絡めて、検討して。今第一世代さんにも、すでにかなり、な地域になっていた。コロナがこの町の地域のえんぶりとか、その他のお祭りを中止にしているというところで。世界の動きが、地方の動きにもつながっているんだなっていうのに気付く

ことができました。この子はもう、歴史にはまってしまって。えんぶりが、えんぶりは祭りなのか、聞いたら山形にもあるっていうのを発見して、何かつながりもあるっていうので、今山形の大学行って歴史の勉強をしています。高等学校になりますと、やはりこのつながりっていうのが出てきて、いい形でここにつなげていければいいなって思っているんですが、ただ実際、こういうふうがいい形でつながっていてもっていうのは、本当にごく少数しかなくて。実はこれ、正直なところ非常に珍しい例です。大成功例です。実は大部分の生徒は成功しないんです、なかなか。大部分の生徒は、SDGs は大切だとは思いますが、便利な生活も大事だよと。何か世の中のためになること、地球のためになることをやりたいけれども、それが何か分からないし、誰かが考えてくれたらやるよと。そんなところなんです。正直な話。これ生徒のことに気付いたのが、生徒会役員の子たちと対話をする中で、今着きました。のマイクロプラスチックの研究をやっている子たちがいるので、その、何をからめて只見町の中学校さんのエコ活動があって、ペットボトルをこうなんかどうかする活動ができないかなって、生徒の前で話したら、そうしたらわかる。気持ちはわかる。海洋ごみを減らすのも大事だ。マイクロプラスチックも良くない。でもペットボトルがなくなったら困るから、それは嫌。マイボトルを持ってくればいいのかはわかる。忘れてきたらどうすればいい。じゃあ缶ジュース買えばいいよね。でも缶ジュースって、一回開けたら蓋閉められないよね。どうすればいいかはわかりません。。、いいことは言っても、本音の部分はそうなんだな。逆に勉強する主体性が育っていない。先生が言うからやる。教科書に書いてあるからやるみたいなことなんだなって感じました。そこで、今の主体性を育てたい一方で、SDGs 研究会っていうのをちょっとずつさせてやっています。生徒の中から興味がある子たちをつのって、プロジェクト学習ですね。ちょっとやってみたいなと思って、今やっています。今、ただ希望者が4人しかいないんです。でもみんな、何やらそういう部署がないで、やりたいって言ってくれた4人を集めて。この辺のテーマに活動しています。今の段階では、いろいろ外部員を入れて、いろんな方の話を聞いたり、言及をしたりしているところです。この後、いろんなところで勉強してきた知識を集めて、プロジェクトを動かしていこうというところで、動いています。生徒の主体性を育てるっていうのが、だいぶ難しい話なんですけど、それ以上に、教員の意識を高める、実はすごく難しいなと思ひまして。結局教員自身が、そこまでSDGsとかESDにのめり込めていない。理解や準備が十分ではないという現状が個々にあるかなと思っています。ただ、これは他の教員の悪口を言いたいっていうことでは全くなくて。正直日常の業務が忙しすぎて、全員が高い意識で何かを達成する。しかも新しいSDGs、ESDを達成するっていうのは、現実的に非常に難しい話になっています。高等学校は今入試改革で。高校一年生から新課程が始まって、2年後には新課程入試。センター試験とはまたぜんぜん新年度の違う入試が行なわれています。知識があるだけでは何もできない。でも知識がないと何もできないみたいな。してまして、対応ですとか、その他いろいろ部活動の問題とかもありますし。今、ただでさえやることが多い先生たちに、もっと一生懸命やってくださいっていうのも、これでは言えないという状況です。いろいろプログラムを組んでみたりですとか、計画的にやっているんですが、するっていうところまで、まだ発展しきれていないという状況です。ただ、その意識を変えろとか、時間はかかるものだとは思っていますので、時間をかけつつ。例えば校内でできないなら、地域の人に巻き込まれながら活動しました。左側の方、これは卒業生の方で、先ほども出ました鹿児島にいるウミネコを研究している方がいるんですが、こういった方とコンタクトを取りまして。ウミネコの生態調査を今年から行なっています。だいぶウミネコの数が今年減っているっていうので、調べていたらキツネの数が増えたからっていうのがわかりまして。キツネが卵を食べちゃうんですね。何でキツネが増えたかっていったら、結局その人間の事情で、わなをかけるための予算が細くなったとかっていうので、普段よりも罠をかける時期が遅くなったら、キツネが

増えすぎてしまって。卵が食べられて奪われている。結局、人間の生活が、そういう自然環境にも多大な影響を与えているっていうのがわかってきました。右側、「せ」と書いた T シャツを着ているのがあるんですけど、これは実は、先ほどのせんべい汁の話を出していただいて嬉しかったんですが、B-1 グランプリって皆さんご存知ですか。B-1 グランプリを主催している八戸せんべい汁研究所の所長、木村聡さんもこの先生でして。そういったところからのつながり、たどって行って、生徒たちがボランティアでいろいろ参加しています。本校が八戸工業大学っていう学校、59 年ですけども、大学の先生方とも連携をしまして、今ドローンをプログラミングで動かすっていうのを生徒たちがやっています。分かりにくいんですけども、これ体育館のところで、赤い丸で囲んだハエ、セミみたいなドローンです。生徒たちがプログラミングで作って、動かして、飛ばしています。これ自体はなんか簡単なやつなんですけど、この先 python というプログラミング言語を用いたもので、をして動かすっていうものでやっています。実現できるようになりますと、特定の特徴を持つものをドローンに発見させて、それを追跡するっていうのができるようになるわけです。災害現場への救済ですとか、何かこう自然災害の何かなのがよくわからないですが、そういうものにも使えるんじゃないかと。前に、また動画なんですけれども、python を用いてプログラミングしたドローンで撮影した動画を、ちょっと紹介したいと思います。途中で映像がありまして、それを動画にした様子です。こういうことを言っただけですが、生徒が勉強用で使っている安いドローンなので、映像がだいぶ、きれいではないので。参考程度に見ていただければと。音楽は私が自分で付けました。音楽がないと酔ってしまうので。途中から見ながらで。はい。

(動画再生中)

坂上：はい。こんな感じです。ESD とかって、ESD の取り組みを始めて 3 年ぐらいしか経っていない。本当にまだ、右も左もわからないままで進んできた学校です。他の学校の方々の、先進的な事例があって。いや、本当に素晴らしいなと思って。いろいろご意見いただきたいなと思っていました。その生徒の主体性をですとか、学校の中の意識をたんです。どういふので先生方が組み合わせているのかっていうところですね。もし今日よろしければ、ご意見いただきたいなと思います。タイトルがマイナスから始めるっていうことになっているんですが、何でこのタイトルにしたかっていうと、恐らくこの生徒の意識の中にあるプラスの子たち、マイナスの子たち。教員の中のプラス、この。0 付近のものっていうのを全部平均化した時に、まだ 0 に行っていないんじゃないかなと思うところがあって。マイナスから始めるっていうふうに、タイトルをつけさせていただきました。色々ご意見をいただければ、大変ありがたいと思います。本日はお疲れのところ、ありがとうございました。

(拍手)

司会：いいお話をありがとうございました。まさにこういうことを議論するために、こういう場があるのかなというふうに思います。本当に皆さん、そういうふうに思っているんですね。そのことについて今日、皆さんと議論を戦わせる、情報交換できるかと思えます。いかがでしょうか。今日は本音レベルでお話ししてくださったんですが、別に、特に焦点は、意識が高くない生徒がたくさんいて、その主体性を育むにはどうしたらいいか。そしてまた教員の方の課題ですね。これについてどう考えるのかということでした。はい、いかがでしょうか。はい、お願いします。

質問者 6：発表ありがとうございました。意見というよりも、ちょっと教えていただきたいということ、先生方がひとつひとつのゼミを開講して、というような形で、もうスライドにももちろんあったんですが、それから高校の先生がそういうふうに見えるんだな、なんて思ったんですが。このゼミの設定って、毎年テーマが変わって行くのかなということがひとつ。何か、それは先生方がそうやって、何ができるかなと考え始めて。要するに、さっき言った職員の意識と変わるのかな、なんて思って話を聞いていたんですが。もうひとつ、聞き逃していたら申し訳ないんですが、SDGs 研究会で、気候変動をテーマにしてやっていたと思うんですが、その活動って、その子たちがどこかに発信したとか、波及させていったみたいなのとかって、そういうのってあるかなと。もし、教えていただけたらありがたいです。

坂上：はい、ありがとうございます。探求のゼミなんですが、これ今年で3年目になります。1年目はもう完全に教員が自分でやってみたいことを、ゼミのテーマにしてやりました。一方これが若干、分野に偏りが出てしまっていて。2年目からは、ある程度分野を分けて。例えば社会向け、国際向け、工学系とかって分けて、ゼミを設定しています。発展がいきそうなものは連続してやっています。正直希望する生徒がいないとか、ちょっと難しかったんでっていうのは切り替えて、違うゼミをまた作ってやっているものです。はい。あともう1点なんですが、SDGs 研究会は本当に9月の頭くらいに発足したところで、これからちょっと活動していきたいと思っていましたので、まだメンバーが決まったくらいです。はい。ありがとうございます。

司会：はい。そのほかいかがでしょうか。

スズキ：すいません、オンラインの方から質問してもよろしいでしょうか。

司会：じゃあ、スズキ先生お願いします。

スズキ：はい。東京のESD-Jのスズキと申します。大変素晴らしい発表、ありがとうございました。私も今ほどの質問に絡めて。気候変動の話って一体どういうふうに取り組んでいくのかなということに、ちょっと関心があって。気候変動の問題って、分野が広くて。脱炭素みたいなことを今、日本政府自体は一生懸命やっている。他方で、こう台風の影響とか、気候変動による影響の問題っていうのも今、非常に深刻になってきていて、どんな分野に取り組んだらいいのかなって。気候変動問題全体というと、何となく身近な環境から離れてしまうような。そんな印象もあるかと思うんですけれども、子供たちの自主的な関心を引きつけていこうという話を進めていこうとすると、これからというお話でありましたけれども、どんな形で気候変動問題に取り組むように、アドバイスをしたりしていけるのかなということについて、もし何かお考えがあったら教えていただけたらと思いました。

坂上：ありがとうございます。気候変動ってその枠が広いからいいなと思った部分もありまして。例えば、もうこっちから脱炭素とか、温暖化とかってやってしまうと、その中でもできることって大体、大人からある程度洗脳されているようなことしか出てこない。洗脳ってちょっと言葉は悪いんですけども、出てこないかなと思ってまして。気候変動って何にでもつながるなっていうところで、だからこそ生徒たちのその中でできることとか、興味あることを見つけてほしいなと思って設定しています。生徒たちはこの間、防災・減災のための取り組みの勉強会に行ってきた。その辺りでやりたいこと、できることを何か広げられていきそうだなと今、思っているところです。ですので、ご質問いただいたことにお答えするとすれば、枠が広いからこそ、その中でできることを自分たちで見つけていってほしいなとも思っているところです。以上です。

スズキ：ありがとうございました。

司会：はい、ありがとうございました。そうすると防災と気候変動ということで、八戸工大の方ではまた、展開していくのかなというふうな期待を持ちました。生徒の主体性っていうことで、まだご意見が出ていない

ようなんですけども、私の考えを言わせていただくと、私は全部が意識高い系で主体性を持つということではなくていいんじゃないかなというふうに思っているんですね。それで非常に人間って矛盾したもので、ごみを細かく分別するという律儀な人もいるけれども、私なんかは面倒くさく見えて何でこんなこと思ったりする部分もあります。アメリカではごみ箱って1個しかありません。全部まとめて入れていますよね。そういう人間の2つの側面っていうのはあるし、子供さんもどうしてそういうこと、自分の欲望をセーブしなくてはいけないのかっていうことに疑問を持つ。当然なんじゃないでしょうかね。ただ一部ではそういう高い意識を持つ子がいて、またそういうふうなお子さんが自分自身の生活を振り返ってみて、まず将来ですね。また、そういうことが素養になっていって、歳を取った時にまたその持続可能性について考えるっていう、そういうチャンスもあるのかなっていうふうに思っています。むしろ全体が同じ方向性に向かって同じ行動を取るということ自体に、また私も、疑問を感じていますので、生徒さん自身で議論が起こるということに意味があるんじゃないかっていうふうに私は考えているところなんです。2人とおっしゃいましたけれども、もう少し出てくるかなと思いますし、高等学校の課題研究とキャリア形成の議論って結構あるんですけども、どこの高校さんでもそんな課題研究で選んだことが、将来につながるっていうのは、多くはないと皆さんおっしゃっていますので。でもいるというのが実情かなっていうふうに考えているところです。生徒に関しては、そのほかいかがでしょうか。スズキさん、何かありませんか。これで終わりますか。何でもいいです。

スズキ：ありがとうございます。お話ありがとうございました。それこそ八戸工大第二高が、SDGsを取り組み始めようという時に学校にお招きいただきまして。その時から支援をさせていただいております東北地方ESD活動支援センターのスズキと申します。今、我々ESD活動支援センターが何をしているかと言いますと、まさに先生方、悩んでいらっしゃるところを、どうやって我々が支援できるだろうか。支援センターっていう大層な名前が付いていますけれども、私たちは学校の現場で教えている先生方ではないので、その私たちが、素人が、何をできるんだろうっていうことで、今様々なプログラムを展開しております。今年何となく手ごたえをつかんできたのかな。まさに今ご質問があった気候変動教育をテーマにした、学校現場での評価学習につなげながらの展開って何かないかっていうところと、学校の先生たち自身があまり背負わずに、外にいる人たちと連携をしながらの展開ってできないだろうかというところでのプログラムの挑戦と、それから今日もこの会場にいらっしゃる、いろんな先生方にご協力いただいて、トライアルしたプログラムのESD的な要素ってどこなんだろうっていうところと、ブラッシュアップするためにはどういうところが必要なんだろうってというような、そういう整備の分析、抽出するっていうことを今トライアルでやっているんですね。これをまた悩んでいらっしゃる先生方のところにお届けできるように、取りまとめして発信できないかしらっていうのを考えておりますので、何かございましたらお手伝いできることがあるかと思っておりますので、ぜひまたご連絡いただければと思います。ありがとうございます。

坂上：ありがとうございます。相変わらずアナウンサーごとく。素晴らしい美声をありがとうございます。大変お世話になっております。

司会：お若い先生からのご発言などもよろしいでしょうか。せっかくですので。一言。

フジサワ：今ご指名いただきましたので、私高校のフジサワと申します。高校でもESDの活動を推進しまして、さまざまなことを挑戦させていただいておりましたけれども、本当になかなかこう生徒自身もそうですし、我々自身も時間を取って活動に取り組んでいくっていうふうなことも、なかなか難しい状況で。おそらく先生方の学校の中でも、そういったことがあるかと思っておりますけれども。まずはこういった機会、頂戴いたしま

した思い、感謝申し上げます。ぜひ何かご縁がありましたらぜひいただければと思っています。よろしく願いいたします。

司会：はい、ありがとうございました。八戸工大のの、を期待しております。本日はご発表どうもありがとうございました。

（拍手）

坂上：ありがとうございました。

司会：それでは長くお話いただいて、ご苦労いただきました。リフレクションタイムということですが、お手元の、先程のシートの方ですね。こちらの方にお書きいただいていると思いますけれども、そちらの方を退室の時に置いて行っていただくと、またいろんな感想や、アドバイスを共有できるのかなというふうに思います。そうしましたら、今日は最後に、本コンソーシアムの副会長でいらっしゃいます、サイトウシュウイチ先生に総括をいただきながら。本当に様々な視点からの発表を行なっていただきましたので、まとめるのも難しいかなと思いますが、先生よろしいでしょうか。。

サイトウ：今日、第2回目の未来セミナーということで、ここ会場に来られた方々、それからオンラインで参加されている方々、改めて御礼を申し上げたいと思います。本当にお忙しい中、ありがとうございました。市瀬先生から総括的などはありましたが、だんだん回を重ねるに従って、私の力量ではなかなかですので、若干の時間が一つ一つ。私自身が学ばせていただいたことで、ご勘弁させていただければというふうに思っています。一番最初のそのメタバースという、太見さんからのお話の中で、一番印象に残りましたのは、リアルな体験とそのバーチャルな体験を結びつけると。そして学校教育の中で子どもたちにあえて、いわゆる学習動機付けというお話をされました。これは非常に、ああこういうことができるんだと。先ほど海の中という話がありましたけれども、リアルには体験できない。そういうところをバーチャルで体験する。こういうこともできる。これは大変な驚きです。そういう意味では、これからの学校教育を、新しい視点で事業の質を深めていくっていう。そういうことが夢として出てくる。そんなことを学ばせていただきました。それから、2つ目の谷山先生の実践のお話の中では、今日典型的にこれは学べるなというふうに思いましたのは、英語でTという。それからAという、Eというのが出てきました。私は、これ直線的に使われるんだとばかり思っておりましたが、そうではなくてTの学ぶ、そしてAの気づき、そして第3段階のEの体験、経験。これは行動ということになるんですか。それが直線的につながるだけではなくて、その後またEからAに行ったり、AからTに行ったりとか、螺旋的に学びが発展していくんだということを学ばせていただきました。これは単元全体をどう構成するか10何時間。場合によっては20何時間。あるいはもっとですね。年度初めの4月から3月のの姿を考える時に、非常に参考になる。実践で、具体的な実践で良かったかなというふうに思っております。それから3つ目。海藤先生のお話。実はちょっと私的なお話になりますが、私SDGsという言葉は全然知らなかったんですが、あるところの会場で海藤さんが、「サイトウさん、これからはSDGsの時代だよ」と言われて、えっ何それっていうのが海藤さんから学んだことです。それで早速、私の只見町の教育委員会に来ていただきまして、教育委員会の職員を対象に、海藤さんにSDGsの講演をしていただきました。随分前の話になりますので、職員は多分何を、何なのかっていうのは、多分理解できないぐらいの。そういう早い時期に海藤さんの意識はもうすでにそこにいたということです。今日のお話の中では、私は海藤さんの生き方そのものから来る実践の重み。そして何10年間も取り組んでい、その継続の重み。そういったものを学ばせていただきました。特に一番最初に言われました、誰がやるかではなくて、何をするか。これが大切なんです。そして今日の学びを明日に生かしてほしいと、私たちに

言われたんですね。ESD は、私たち教員だどうしても子供たちについていうふうに思いがちなんですが、よくよく考えてみると、自分の生き方が問われているんですね。そういったことを、海藤さんから改めて突きつけられたということを感じました。それから4つ目の斐太北小学校の実践の中では、2つのキーワードありましてね。一つはホールスクール。そして2つ目は地域とともに。これがキーワードでした。特にホールスクールにつきましては、この前の第2回目の時も、なかなかESDが一部の教員のみ、あるいはその先生が退出すると継続しないという悩みがありました。そういう点から言いますと、今回の校長先生のご発表の中に、全職員、それからもう一つはその具体的な実践ですね。抽象的な実践ではなくて、具体的な目に見える実践。それを取り組まれている。多分、一番最後の話だけれども、坂上先生からすれば、これ先生、これどうやって全職員でやれるようになったんですかってお聞きしたいぐらいの気持ちが、多分あると思うんですよ。そういうところは、このホールスクールっていうキーワードで。具体的な実践はもう、お話がありましたけれども、今あります。それから地域と共にってありました。この中で、コミュニティー学校の運営協議会と。これ今、皆さん現状どうなっているか、分かりますか。実は形だけなんです。そういうところが多いんです。でも、この学校のコミュニティー学校は形だけじゃないんですね。なぜでしょう。これは明確な目的。つまりみらい学習をどうするよ。学校だけじゃなくてみんなの力を貸してくださいと、こう言っているんですね。本当にその地域と共にというのをコミュニティー学校の協議会の組織をしっかり生かしながらやられていると。こういったところが、私たち学べるんじゃないかなと思います。それから最後の八戸工大の高校、中学校の先生からお話がありました。私テーマを見て、ドキッとしました。マイナスから始める、いいです。マイナスから始めるんだったら、普通はくじけますよね。でも何故やっておられるんですよ、この先生方。そこですよね。多分、その情熱なんですね。4人のSDGsの研究会。たった4人でも、それから先生方の中にも、なかなか意識が高まり。でも、あの先生たち面白そうなことをやっているねとか、あの先生たちの取り組みは子供たち変わったよねとか。そういうふうになってくると、多分他の先生方も意識が変わってくると思います。そういう意味では、生徒たちあるいは先生方の小さな動きが、やがて大きな動きになることを期待しておりますので、本当にくじけそうになると思うんですが、頑張っただければと思います。総括にはなりませんが、私が学ばせていただいたこととお話して、私の話、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。感謝申し上げます

司会：サイトウ先生、大変丁寧な、ひとつひとつに対する温かいコメントどうもありがとうございました。それでは予定時間を8分経過してしましまして、本当に申し訳ございませんでした。今日も本当に頭から、非常に濃密な時間を過ごさせていただきました。非常に皆様のご協力、ご支援に感謝を申し上げます。次回は、今度はユネスコスクールの東北大会というものと合体して、こちらのコンソーシアムを開催します。多分12月17日の土曜日を予定しております、今度は子供さんに、子供さんの発表会をいつもやっています。こちらの方で、子供さんの姿を見ながら、また考えて行きたいなと思いますので、また、その応募は皆さんが学校の方にお送りさせていただきますので、ぜひ課題研究発表、あるいはユネスコスクールの活動、クラブ活動等でも構いませんので、ご応募いただければというふうに思います。はい、それではこれにて本日の会議を終了させていただきます。ぜひ残りの時間は、先生方楽しんで帰っていただければというふうに思います。本日はどうもお疲れ様でした。ありがとうございました。

(拍手)

ウィズ・コロナ時代におけるESDの役割と方向性とは

～探究的な学びを個別最適で協働的なものとするために～

市瀬 智紀

宮城教育大学 教育学部

ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp

1

# 編集集中

ユネスコ  
グローバル  
研修会の  
課題

地域学習の体験学習では「体験することが目的となってしまう、問題解決のための知識や技能を身に着けたり、自分たちにできることを考え実践しようとしたりする意欲や態度を育てることが難しい。」

探究的な学習については「①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の過程が大切であるが、単元の導入時に課題意識を持たせることが不十分であったため、深い課題設定とならなかった生徒が多くいたこと、①④のサイクルを繰り返す中でさらに学びを深めていくことができるようになることが課題である」

2

## ウィズコロナ・ アフターコロナ の体験学習・探 究型学習・課題 研究

- コロナの終息にともなう体験学習の再開とともに、コロナ禍で進んだICTを活用し、新しい学びの空間の創造が期待されている。

ニューヨーク国連本部「教育変革サミット」

- 2022年9月19日の週（国連総会ハイレベルウィーク中）
- 内容：SDG4（教育）の達成のための教育変革に関し。
- デジタルラーニング（Digital learning）が議論される。

3

# 編集集中

## 学校ICTで 目指すべき教育環 境

- 1. 学びにおける時間・距離などの制約を取り払う～遠隔・オンライン教育の実施～
- 2. 個別に最適で効果的な学びや支援～個々の子供の状況を客観的・継続的に把握・共有～
- 3. プロジェクト型学習を通じて創造性を育む～文理分断の脱却とPBLによるSTEAM教育の実現～
- 4. 校務の効率化～学校における事務を迅速かつ便利、効率的に～
- 5. 学びの知見の共有や生成～教師の経験知と科学的視点のベストミックス(EBPMの促進)～

出典：文部科学省教育の情報化～GIGAスクール構想の実現～

4

ロイロ+ School

オンライン研修 サポート 授業案 導入事例 ご利用料金 お問い合わせ ログイン



教材配付し通知する +



回答を一覧に回収 +

ノート写真やPDF等様々なファイルを回収して一覧表示。未提出者を把握。添削して生徒一人ひとりへ返却。  
さらに詳しく >



回答共有し学び合う +

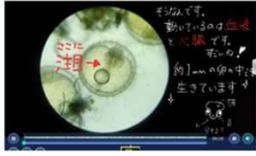
PDF等様々なファイルを回収して添削返却。未提出者を把握。回答を共有して教え合う環境を実現。  
さらに詳しく >



理解度を確認 +

回答結果のリアルタイム表示で理解度確認。自動採点で採点時間を短縮。学習履歴をデータ出力可能  
さらに詳しく >

ロイロノートHPから



メディア編集自由自在 +



集中カUP! クラス管理 +



健康観察 / 出欠管理 +



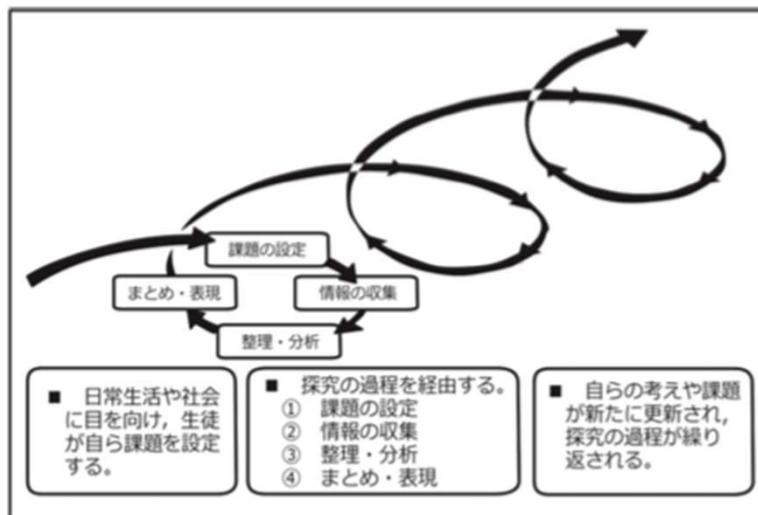
英語4技能を鍛える +

5

# 編集集中

本日の課題：  
探究学習のプロセスでどのようにICTを活用できるでしょうか？

## 探究的な学習における生徒の学習の姿



6

## 1. 課題の設定段階

- 基本情報の収集
- 定義の確認
- 自分の疑問について客観的にとらえられる



7

# 編集集中

## 2. 情報の収集段階

- 思考錯誤しながら適切な情報を探す。
- 批判的に思考して情報を収集する。
- 適切な場面で適宜情報を収集する。
- 記録・メモ、写真撮影、動画撮影、音声インタビューなど状況にあわせた方法を用いる。
- 時間や距離を超えて情報を収集できるICTの特性を活用する。

8



### 3. 整理・分析の段階

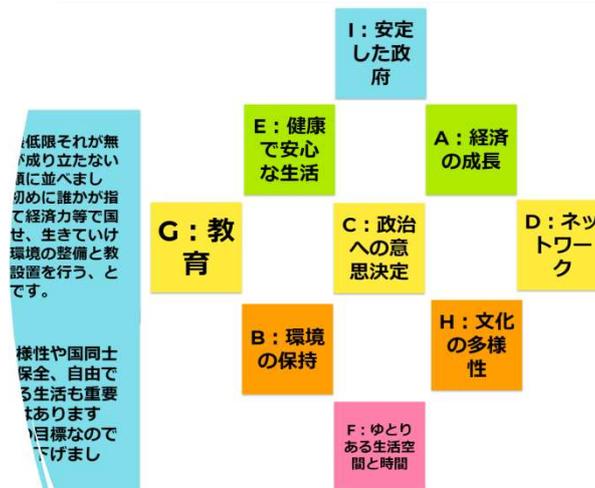
- 実験・観察・体験の結果の記録する。
- 写真や動画、インタビューや動画をタブレット上に保存する。
- 大容量の情報をペーパーを保存することがきる。
- タイトルをつける、記録を記す、取捨選択などの作業を行う。
- 制作・加工プロセスを通して思考力・判断力を育成することができる。

9

# 編集集中

### 3. 整理分析の段階

- シンキング・スキルを使って、思考のプロセスを明確化できる。
- シンキング・スキルを使って思考したことを、次に文章化することで表現することで論理的思考力が増す。



10

シンキング・スキルで思考力・判断力を高める

ベン図	比較する
Y / X / Wチャート	多面的に見る・分類する
ピラミッドチャート（上から下）	具体化する・構造化する
ウェビング（イメージマップ）	広げる
フィッシュボーン	多面的に見る・見通す
KWL	見通す
データチャート	比較する・理由付ける
座標軸	順序付ける・比較する
PMI	多面的に見る
同心円チャート	変化をとらえる
情報分析チャート	構造化する・見通す
ダイヤモンドランキング	比較する・順序付ける

11

# 編集集中

## 協働的な学びと個別最適化

ICTで他の生徒と情報を瞬時に共有でき、他の生徒の意見や考えも瞬時に共有できる。

距離を超えてほかの生徒にもコメントができる。

シンキングツールを協働作業することで、思考を明確化することができる。

個別最適化とは一人ひとりの理解状況や能力、適性に合わせて個別に最適化された学びを行うことを指す。

ICTの活用によりまれな才能を発揮する生徒がいる一方で、展開の遅い生徒への配慮が必要。

生徒の作成した情報を共有する際に、生徒の動機づけになる情報と生徒間で差がつく情報を見極めて共有する。

12

## 4.まとめと表現

コミュニケーション力  
自己表現力の高まり  
自己肯定感の高まり  
個別の表現方法を採用



13

# 編集集中

ICTによる生徒のデータの蓄積をESD評価に結び付ける～ACCU評価事業の成果をご紹介します。

子どもの変容を評価するときに大切にしたい「17の評価要素」 ※昨年度の26の評価要素をもとにした。赤字は今年度追加。

認知領域	① 持続可能性に関する知識・スキル習得 ② 情報収集・選択・活用力	③ 批判的思考力 ④ 意思決定力	⑤ 問題解決能力（探究する力） ⑥ メタ認知能力 ⑦ コミュニケーション能力
社会情動領域	⑧ 困難を乗り越える意思 ⑨ 人権や平和の価値 ⑩ 生物多様性の尊重	⑪ 社会的共生と公正さ ⑫ 自己肯定感 ⑬ 持続可能性への価値観	⑭ 主体性 ⑮ 協働性
行動領域	⑯ 持続可能なライフスタイルの実践	⑰ 地域や社会の活動に参加する力（社会参画力）	

14

\* 各項目の点数が平均より高まるほど目標達成を挙げた点で、自己肯定感を高めているかを定量的に評価して高くなることを結果と見ます。

観測内向けルーブリック		※ 観測が対象となる人向けに文章が変更されています。本ルーブリックを活用する際は、各校の児童の年齢に応じた観測内向け文章に書き換えてください。																
評価要素		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
		持続可能性に関する知識・スキル獲得	情報収集・選択・活用	批判的思考力	意思決定力	問題解決能力(解決する力)	メタ認知能力	コミュニケーション能力	困難を乗り越える態度	人権や平和の価値	生物多様性の尊重	社会的共生と公正さ	自己肯定感	持続可能性への意識	主体性	協働性	持続可能なライフスタイルの実践	地域や社会の活動に参画する力の実践(活動参加)
S評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルを身につけている	50%や環境問題など持続可能な社会づくりの知識や関心スキルを身につけている	課題を解決するために適切な方法で情報を収集し、選択して活用している	いつも特定の友人を呼び出した後、ほかの考えや方法も検討している	活劇の方法、課題の解決方法、結果の予測などについて、自分自身から考えをもち、工夫して発信している	課題を発見し、調査や計画に基づいて行動し、結果から考えをもとめ、工夫して発信している	何が分かったか、何が分かっていないか、自分自身から考えをもち、工夫して発信している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	困難な課題でも、諦めずに取り組んでいる	人権や平和の価値について、身近な人や社会や地域に響かせることができる	動物や生態系、自然の多様性の大切さや、生物多様性の大切さを理解し、保護を促している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	未来に向けて、自分自身の役割や責任を認識している	課題を自分自身で解決しようとする意識がある	協力する大切さを理解し、自分自身の役割や責任を認識している	働きなど環境負荷を減らす、資源を大切に使うなど、持続可能な生活や行動を実践している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している
A評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルがある	課題を解決するために適切な方法で情報を収集し、選択して活用している	特定の考えや方法だけでなく、ほかの考えや方法も検討している	自分自身から考えをもち、工夫して発信している	課題を発見し、調査や計画に基づいて行動し、結果から考えをもとめ、工夫して発信している	何が分かったか、何が分かっていないか、自分自身から考えをもち、工夫して発信している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	困難な課題でも、諦めずに取り組んでいる	人権や平和の価値について、身近な人や社会や地域に響かせることができる	動物や生態系、自然の多様性の大切さや、生物多様性の大切さを理解し、保護を促している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	未来に向けて、自分自身の役割や責任を認識している	課題を自分自身で解決しようとする意識がある	協力する大切さを理解し、自分自身の役割や責任を認識している	働きなど環境負荷を減らす、資源を大切に使うなど、持続可能な生活や行動を実践している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	
B評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルが少しある	課題を解決するために適切な方法で情報を収集し、選択して活用している	特定の考えや方法だけでなく、ほかの考えや方法も検討している	自分自身から考えをもち、工夫して発信している	課題を発見し、調査や計画に基づいて行動し、結果から考えをもとめ、工夫して発信している	何が分かったか、何が分かっていないか、自分自身から考えをもち、工夫して発信している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	困難な課題でも、諦めずに取り組んでいる	人権や平和の価値について、身近な人や社会や地域に響かせることができる	動物や生態系、自然の多様性の大切さや、生物多様性の大切さを理解し、保護を促している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	未来に向けて、自分自身の役割や責任を認識している	課題を自分自身で解決しようとする意識がある	協力する大切さを理解し、自分自身の役割や責任を認識している	働きなど環境負荷を減らす、資源を大切に使うなど、持続可能な生活や行動を実践している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	
C評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルはあまりない	課題を解決するために適切な方法で情報を収集し、選択して活用している	特定の考えや方法だけでなく、ほかの考えや方法も検討している	自分自身から考えをもち、工夫して発信している	課題を発見し、調査や計画に基づいて行動し、結果から考えをもとめ、工夫して発信している	何が分かったか、何が分かっていないか、自分自身から考えをもち、工夫して発信している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	困難な課題でも、諦めずに取り組んでいる	人権や平和の価値について、身近な人や社会や地域に響かせることができる	動物や生態系、自然の多様性の大切さや、生物多様性の大切さを理解し、保護を促している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	自分の考えや気づきをもっと伝えたい、意見を交換したい、意見を交換したい	未来に向けて、自分自身の役割や責任を認識している	課題を自分自身で解決しようとする意識がある	協力する大切さを理解し、自分自身の役割や責任を認識している	働きなど環境負荷を減らす、資源を大切に使うなど、持続可能な生活や行動を実践している	地域や社会の活動に参加し、自分自身の役割や責任を認識している	

15

# 編集 中

ESDルーブリック < 小学校5年生用 >

学年: \_\_\_\_\_ 月: \_\_\_\_\_ 日: \_\_\_\_\_

名前: \_\_\_\_\_

学号: \_\_\_\_\_

担任: \_\_\_\_\_

※ 各項目の点数が平均より高まるほど目標達成を挙げた点で、自己肯定感を高めているかを定量的に評価して高くなることを結果と見ます。

※ 各項目の「評価」欄には、各項目の達成状況を記入してください。達成状況を「A」「B」「C」と記入してください。

※ 評価の目安: A: 高い達成度、B: 中程度の達成度、C: 低い達成度

評価要素	達成状況	評価	合計
S評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルを身につけている	A	4
	情報収集・選択・活用	A	4
	批判的思考力	A	4
	意思決定力	A	4
A評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルがある	B	4
	情報収集・選択・活用	B	4
	批判的思考力	B	4
	意思決定力	B	4
B評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルが少しある	C	4
	情報収集・選択・活用	C	4
	批判的思考力	C	4
	意思決定力	C	4
C評価	持続可能な社会づくりの知識や関心スキルはあまりない	D	4
	情報収集・選択・活用	D	4
	批判的思考力	D	4
	意思決定力	D	4

自由記述欄:

① 達成できなかった項目について感想や気づきを書きなさい。

② 達成して感動した項目について感想や気づきを書きなさい。

16

ESD活動自己評価表		年 組 番 名 姓	自己評価表(コンピテンシーを意識しながら記載してみよう。)			
我が校で育みたい 資質・能力	3つの 社	ESDに関する実践活動で 意識するコンピテンシー (ESDの評価要素)	[活動前]今の自分を振り返り、どんな 力が伸びているかを書こう。			
			[活動中]活動を通じて、自分 はどんな力が伸びたかを書こう。		[未来]伸ばしたい力について どんな取り組みが必要か、何を したいかを書こう。	
①	知識 技能	持続可能性/SDGsに関する知識・理解・スキル習得	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		持続可能なライフスタイルの実践	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		人権や平和の価値、情報収集・選択、活用能力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	思考力 判断力 表現力	言語化力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		応用力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		問題解決能力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		意思決定力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		論理的思考力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		創造力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	学びに 向かう 力 人間性	国際的思考力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		システム思考力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		批判的思考力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		(情報収集・選択)・活用能力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		持続力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		持続可能な地域・国際社会への貢献への行動力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
②	学びに 向かう 力 人間性	メディア活用能力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		自己肯定感	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		課題の自分事化	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		多様性と共生の尊重	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		学び続ける力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		継続力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
③	学びに 向かう 力 人間性	リーダーシップ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		責任感	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		公平性	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		柔軟性	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		困難を乗り越える意欲	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		合意形成と協力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
④	学びに 向かう 力 人間性	自己肯定感	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		課題の自分事化	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		多様性と共生の尊重	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		学び続ける力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		継続力	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		リーダーシップ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

17

# 編集集中

モデル評価手法を活用した実践紹介

奈良県奈良市立平城小学校 <b>新宮 済</b> <a href="https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/03//2022/jissen01_ele.pdf">https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/03//2022/jissen01_ele.pdf</a>	東京都新宿区立西戸山小学校 <b>小野瀬悠里</b> <a href="https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen02_ele.pdf">https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen02_ele.pdf</a>	宮城県気仙沼市立新城小学校 <b>熊谷久恵</b> <a href="https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen03_ele.pdf">https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen03_ele.pdf</a>	兵庫県神戸市立摩耶小学校 <b>阪井園子</b> <a href="https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen04_ele.pdf">https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen04_ele.pdf</a>
--	--	---	--

[https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen01\\_ele.pdf](https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen01_ele.pdf)  
[https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen02\\_ele.pdf](https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen02_ele.pdf)  
[https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen03\\_ele.pdf](https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen03_ele.pdf)  
[https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen04\\_ele.pdf](https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen04_ele.pdf)

18

## 六中 ESD

**ESDで音わ力 (校内研修)**

- 思考力分科会 「批評的に考える力」「本家を予測して考える力」
- 判断力分科会 「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーション分科会」「課題解決のための話し方、聞く力、表現する力」
- ESDで音わ力 「つながりを構築する態度」「進んで参加する態度」

**特選活動**

ユニクロのサカサプロジェクト 食品油漬漬 離島への食料、食品ロス削減活動 ニコキップ国政活動 書き損じ社がき国政活動 など

鳥緑祭 大岡山駅前花壇メンテナンス 視覚障碍 グリーンカーアクション ホタル放流式 (ホタル復活プロジェクト) 等

課外活動

**食育**

校内作製の竹の子給食  
コーナン給食  
残さず大会  
食ロス削減活動  
食ロス削減メニュー考案  
長健給食委員による啓発活動

# 東京都大田区立大森第六中学校 3つのCHA CHANCE CHALLENGE CHANGE

キャリアアートの作成  
あゆみ

SDGをカレンダーによる  
カリキュラム・マネジメント

小中一貫教育  
施設分館型の一貫教育  
教育活動の多様化を促す小中一貫教育

Think Globally Act Locally 地域の学びから 世界の学びへ

19

# 編集中

**SUSTAINABLE ISLAND**

1班

【視察地の調査】  
持続可能な島づくり  
持続可能な島づくり  
持続可能な島づくり

【持続可能な島づくり】  
持続可能な島づくり  
持続可能な島づくり  
持続可能な島づくり

**Athenego**

地域活性化と  
発電

エネルギーの開発  
資源一掃でられているもの。  
発電方法…主に発電機。そのほか太陽光、風力など  
立地…使われていない工場を使用。

環境 廃棄物を減らすことで解決する環境問題  
様々な問題を同時に解決していく

**大豆インク**

エネルギーの地産地消  
エネルギーの自給自足

③大豆インク

大豆インク  
大豆インク  
大豆インク

**Uchi de green**

4班 ①石川、②秋山、③中山、④長谷川、⑤小澤、⑥小山

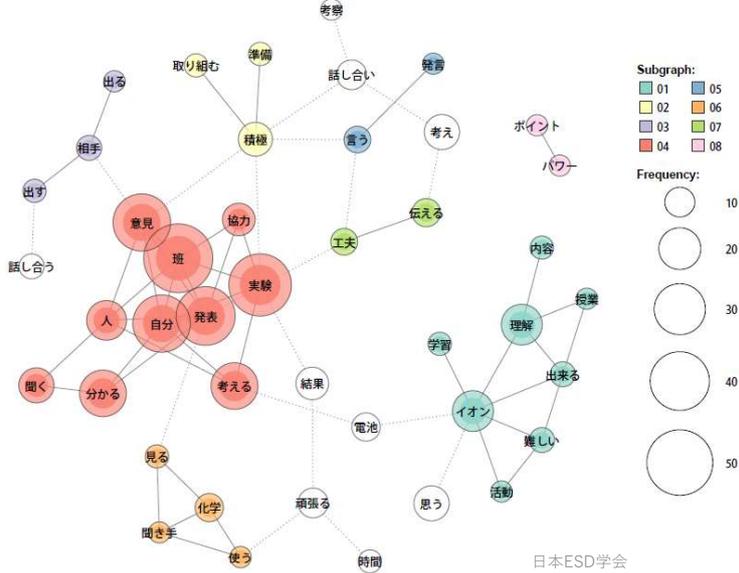
販売するものについて  
再生可能エネルギーを使った電池  
二次電池にして、電気がなくなったら無料で充電  
一回電気に充電

雇用の工夫  
【雇用】  
◆他国とつながるため英語と中国語を話すこと  
できる人  
◆環境についてさらに学び、活用が出来る人  
【賃金】  
◆給料：月約30万  
◆広報

日本ESD学会

20

# 文章表記 形態素解析 市瀬先生にお願いしました。



ループリックの評価と言語表現による自己評価が必要

左図の例は3年理科「イオンと化学変化」の単元を通して、成長した場面を考えさせ、生徒の言葉の中で頻出した回数を表したもの

**班で協力して実験を行い、人の意見を聞き、自ら考えて自分の意見を考え、自分の意見を発表することで、理解できたことが、伺える。**

21

# 編集集中

相関		
		相手の意見を聞き再考
望ましい未来像を考える	Pearsonの相関係数	.486**
	有意確率(両側)	.000
	度数	119
望ましい未来像のために計画	Pearsonの相関係数	.500**
	有意確率(両側)	.000
	度数	118
課題を理解し自分の言葉で語る	Pearsonの相関係数	.506**
	有意確率(両側)	.000
	度数	119
課題解決のための意見	Pearsonの相関係数	.481**
	有意確率(両側)	.000
	度数	119
自分の意見積極的に伝える	Pearsonの相関係数	.328**
	有意確率(両側)	.000
	度数	119
説得力のある表現工夫	Pearsonの相関係数	.484**
	有意確率(両側)	.000
	度数	119
相手の意見を聞き再考	Pearsonの相関係数	1
	有意確率(両側)	
	度数	119

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)です。

<8つのカテゴリーの相関から例示>

ESDの態度<--> 経験値 .570  
 ESDの知識<--> 経験値 .658  
**ESDの態度<--> 思考力 .709**  
 ESDの態度<--> 表現力 .690

<個別の項目40項目の相関から例示>

既習事項や経験と結び付ける<-->課題に気づいて行動を変える .511  
 既習事項や経験と結び付ける<-->多様な課題を発見考える .514  
 他者に共感尊重<-->多様な課題に自分の考え .520  
 ICTの活用<-->資料作成のスキル .578  
 SDGs達成のために行動<-->課題に気づいて行動変える .614  
 日常生活でSDGsを意識<-->課題に気づいて行動変える .576  
 日常生活でSDGsを意識<-->望ましい未来像を吟味 .606  
 家族友人と話す<-->課題に気づいて行動を変える .552  
 地域や日常生活の課題発見<-->多様な課題を発見考える .597  
 情報検索・収集するスキル<-->課題解決のための意見 .601  
 考えを改善し解決につなげる<-->課題に気づいて行動を変える .571  
**考えを改善し解決につなげる<-->多様な課題に自分の考え .683**

日本ESD学会

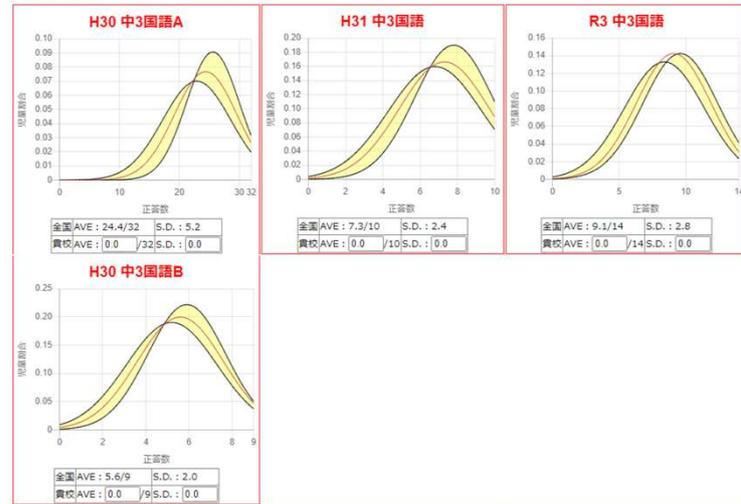
22

さらなるBig Data の活用をめざして  
田端健人先生開発：平均ゾーンシステムWebアプリ

[https://italab.info/tabata/elem\\_jm.html](https://italab.info/tabata/elem_jm.html)

H30-R3 中学校【国語・数学】  
(全国学力・学習状況調査結果)

MEMO:



MUE Scientific research by Dr. Tabata Taketo

# 編集集中

UNESCO School Network (ASPnet): Collaborative Action Research on the Role of Schools in Achieving SDGs in Asia-Pacific

What indicators and Materials are used for learning assessment?

National University Corporation Miyagi University of Education  
Tom ICHINOSE, Ph.D. Professor





United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

UNESCO Ass

1

# 編集集中



Zoom ミーティング

録音中

Tomonori ICHINOSE (ホスト, 自分)

上長根伸哉

(Thai Natcom)

Benjamas Ch

Supranee ThaiN...

HPSompong

レコーディングしています...

Benchama Maharat School  
Ubon Ratchatani Province Thailand  
UNESCO Associated School

HAPPY SCHOOL PROJECT

Happy School เ็นกระจกบานทอง

Inter Danunai No.14

参加者 (15)

Q 参加者の検索

T Tomonori ICHINOSE (ホスト, 自分)

Inter Danunai No.14

伸哉 上長根伸哉

(N) (Thai Natcom) Pattadon L.

(N) (Thai natcom) Ratchanin

B Benjamas Ch

招待

すべてミュート

チャット

That is ok. Thank you very much.

開始Inter Danunai No.14に全員

We have vdo presentation about intercultural, can we show?

メッセージは誰に表示されますか? 録画が有効

送信先: (Thai...) (テキスト) ファイル

FO

17:43 2023/07/14

2



1

# 編集集中

気仙沼ユネスコスクール研究会	地域の動向に対応した導入事項	国内の動向に対応した導入事項	世界の動向に対応した導入事項
2009年度		ユネスコスクールとは	2005年持続可能な開発のための10年(DES)の開始
2010年度		ユネスコスクールとは	
2011年度	2011年3月11日 東日本大震災		
2012年度	防災教育	ユネスコスクールガイドライン 資質・能力・態度	
2013年度		グローバル人材の育成	
2014年度			持続可能な開発のための10年(DES)を振り返る。
2015年度			第3回国連防災世界会議「仙台防災枠組2015-2030」グローバル・アクション・プログラム
2016年度	海洋教育	カリキュラム・マネジメント アクティブ・ラーニング 探究型学習	
2017年度			ホールスクール・アプローチ
2018年度			持続可能な開発目標(SDGs)
2019年度		資質・能力 新学習指導要領「持続可能な社会の創り手」	ホールスクール・アプローチ
2020年度		カリキュラム・マネジメント	ESD for 2030

2

## 「只見町で生き抜く力」 「地域を誇りに思う『誇り教育』」

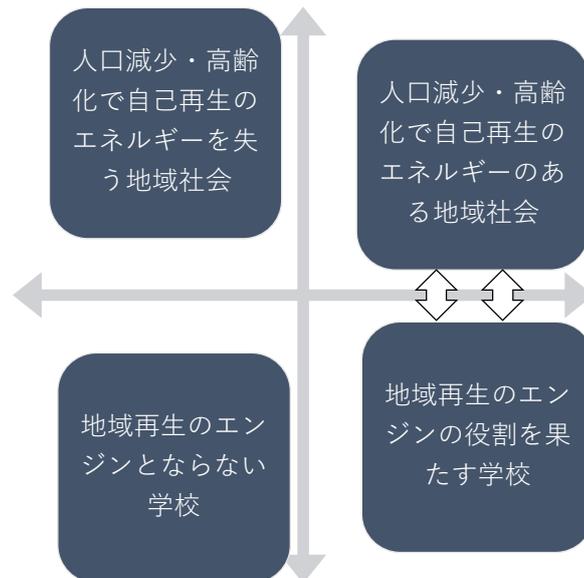
- ・只見町でESDを取り組むのはなぜかということになりますが、わたしたちの町はユネスコ・エコパークという世界的な認証をもらいました。ユネスコ・エコパークというのは、人と自然が共生して生きているモデル地域、そういう指定を受けました。そのような大きな枠組みの中で、悩みがあります。
- ・只見町は、モデルの指定は受けたが誰もいなくなった。町が消えてしまったということになりかねない。それが、ESDを今と取組まなければいけないと思った最大の理由です。人と自然という生き方を残していくということ。山深い、雪深い、3メートルも4メートルも雪が降る、私たちの町の4つの小学校が、どんな教育をしなければいけないかと考えたときに、只見で生き抜く人材育てるしかない。
- ・具体的にどういうことか、それは、わたしたちの町に戻ろうとしても勤める場所がない、誘致企業もない、ならば俺が仕事創ってやるんだ、それくらい気概のある人材を育てる教育をどうやってできるか、そう考えたときに、ESDとはどういう教育か、地域を支える人材を育てる以外にはない。
- ・では、今、私たちの地域が持続しないのはなぜか。それは理由がはっきりしています。それは否定教育、無言の否定教育だからです。子どもたちが育つなかで、こんな雪の多い只見にいたって仕事なんかない、こんな生活をしていても未来はないんだ、そんなことを暗に感じながらずっと成長してきた。本当にこれで地域が持続するのだろうか。
- ・その無言の否定教育から、地域を誇りに思う「誇り教育」に転換する必要がある。ではどうやって転換するのか、そこに郷土学、只見学を位置付けました。その只見学を通して只見愛をいかに育むか、これをしていかなければ、只見を支える人材は育たない、というところに行き着きました。そういったことでESDは地域の課題という課題だったり地球規模の課題だったりしますが、まずは地域の課題をどうするかというところにESDの焦点を合わせたというような状況であります。
- ・(只見町教委前教育長 齋藤修一 2016年11月25日)

3

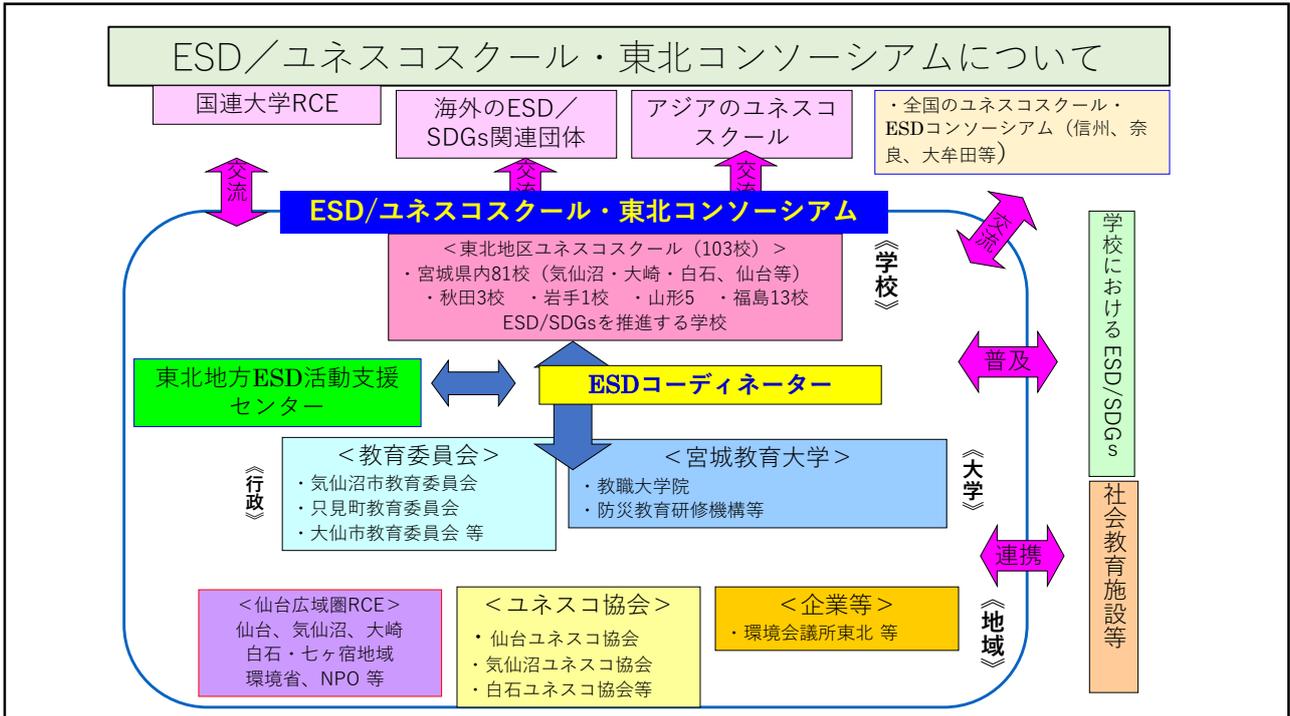
# 編集集中

人口減少  
と地域社  
会そして  
教育

「ねっかさすけねえー (No problem at all)」



4



5

# 編集集中



6

## ユネスコスクール北海道・東北ブロック大会

Transformative Action for 2030

• <https://hokkaidotohokuaspnet.com/>

**投稿**

2020年10月28日  
宮城県気仙沼市立面瀬小学校 6年生

守ろう 作ろう グレート・オモトープ



見る YouTube

検索 ... 🔍

**最近の投稿**

- 宮城県気仙沼市立面瀬小学校 6年生
- 宮城県気仙沼市立豊折小学校 半沢和奏・高田咲希・小野寺眺里・金野映
- 宮城県気仙沼市立陸上中学校 小野寺重美・武藤榮奈
- 福島県只見町立只見中学校 山本愛佳
- 福島県立安達高等学校 山見坂琴子・鳥谷彩華・遊佐喬果・鈴木愛菜・梅津大輝・遠藤結輝

**最近のコメント**

7

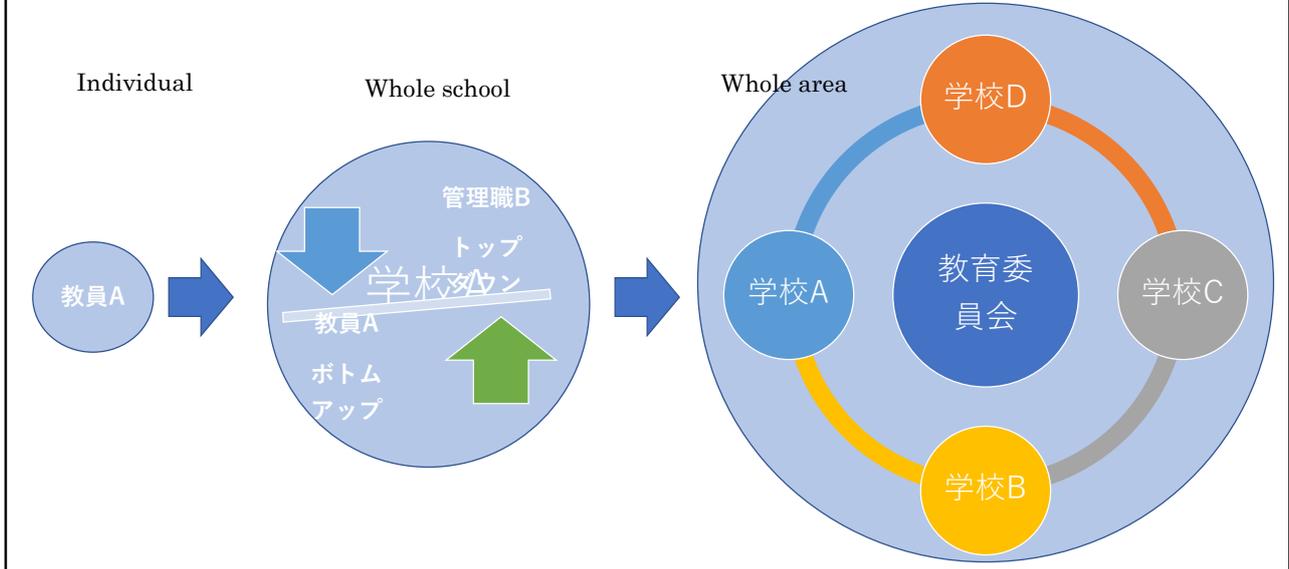
# 編集集中

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2019	2020	2021
宮城県気仙沼市教育委員会			スローフード	国際環境学習			RCE		ユネスコスクール		海洋教育		SDGs						
宮城県大崎市							ラムサール	RCE	ユネスコスクール		世界農業遺産								
秋田県大仙市教育委員会											国研ESD研究指定	環境学習							
福島県只見町教育委員会													エコパーク	ユネスコスクール	海洋教育				
岩手県平泉町																			
高等学校課題研究SDGs																			

8

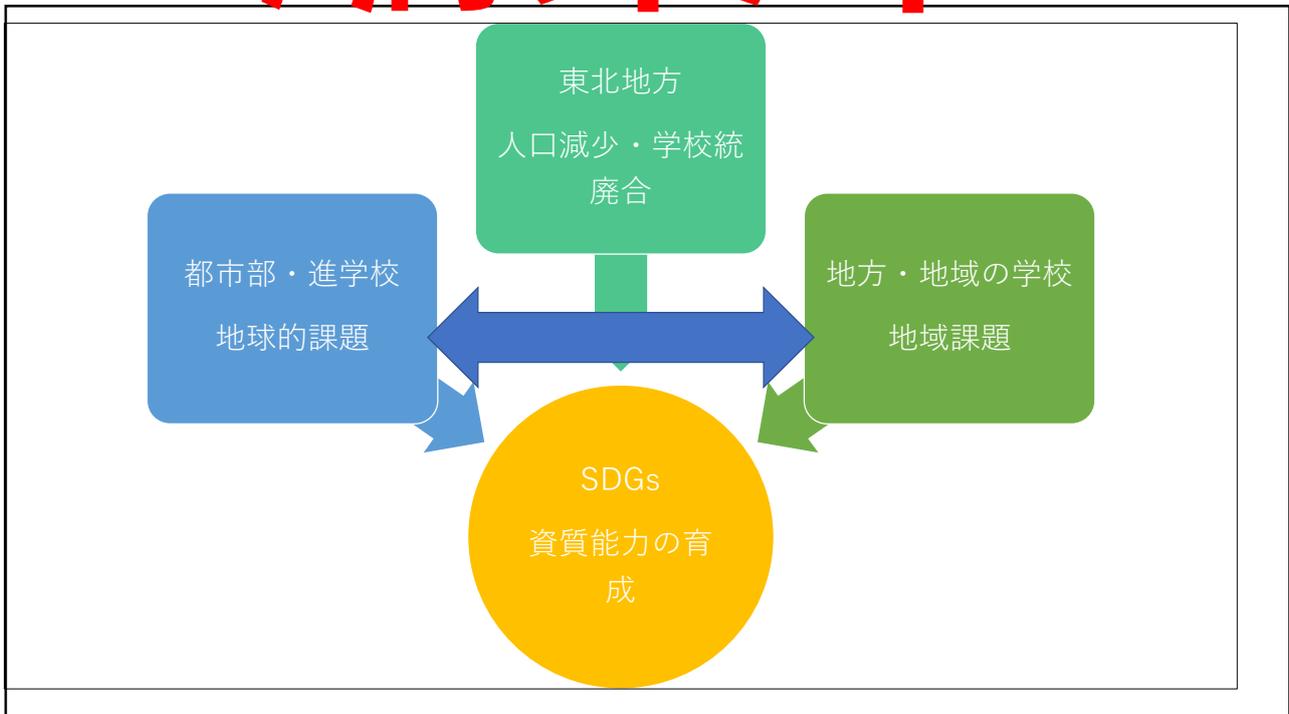
### 3.コンソーシアムの課題

教員・学校・地域間の相互エンパワーメントによる「SDGsカリキュラム」の展開と評価方法の開発



9

# 編集集中



10

## 只見町ESDの特徴

- 行政のバックアップ（第7次只見町振興計画）
- 保育所から小中学校、高校までがつながっている。
- 山から海へ、ローカルからグローバルへとつながっている。
- 学校発で地域社会の変容をはかっている。

保育所・小中学校・只見高校との一貫教育

山間地で「グローバルな視点を付加する教育」

学ぶ教育から「貢献する教育」

「誇り教育」への転換

11

# 編集集中

環境教育（UNESCOエコパーク  
Programme on Man and the Biosphere）

ブナの森の散策  
ふるさと登山  
田子倉湖ボート散策

海洋教育（Ocean Education）

海洋交流学习  
海辺の清掃学習

気候変動教育（Climate Change  
Education）

「気候非常事態宣言」

防災教育、伝統文化教育…

水害出前講座  
水害の語り部活動

只見町  
ESDの多  
様な側面

12

**中学生の思いと行動**

きれいな海を守りたい！！

海洋プラスチックを上流から減らす

自分たちでは限界がある

新聞紙でレジ袋を作成して使ってもらおう

只見にいながら海を守る活動をする

テレビやラジオでも海ゴミを減らすことを訴える

中学生が先生

17番の原点は「結」

**山から海を守る只見中学校**

コロナで元気を失った町をなんとかしたい！！

町内のコンビニが新聞紙レジ袋を採用

中学生を応援したい

町内の調剤薬局でも新聞紙レジ袋を採用

町主催で新聞紙レジ袋教室開催

参加者が新聞紙レジ袋を作って中学校に寄付

海洋ゴミを減らす中学生 町が元気を取り戻す




Transformative Action for 2030  
School Practice example of  
ASPnet school in Tadami Town

13

# 編集集中



## 地域とともに学び 行動する只見中学校

～海と山から学ぶ～

只見町立只見中学校 教諭 目黒英樹

14

1 はじめに 2 昨年までの取組 3 効率と効果 4 町との協働 5 発信 6 これから  
只見中学校が目指す外部とのかかわり方

学校HP 発表会

行政 保護者 町民  
企業 学校 小学校・高校  
教育委員会 地域人材

発信 発信

マスコミ 地域広報誌

只見中学校 (目)

00:06:21

15

# 編集集中

## 地域連携の理論：社会に開かれた教育課程

- 第4章 学習指導要領の枠組みの改善と「社会に開かれた教育課程」
- 1. 「社会に開かれた教育課程」の実現
- こうした社会とのつながりの中で学校教育を展開していくことは、我が国が社会的な課題を乗り越え、未来を切り拓いていくための大きな原動力ともなる50。特に、子供たちが、身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学び、自らの人生や社会をよりよく変えていくことができるという実感を持つことは、困難を乗り越え、未来に向けて進む希望と力を与えることにつながるものである。
- 註50：未曾有の大災害となった東日本大震災における困難を克服する中でも、子供たちが現実の課題と向き合いながら学び、国内外の多様な人々と協力し、被災地や日本の未来を考えていく姿が、復興に向けての大きな希望となった。人口減少下での様々な地域課題の解決に向けても、社会に開かれた学校での学びが、子供たち自身の生き方や地域貢献につながっていくとともに、地域が総掛かりで子供の成長を応援し、そこで生まれる絆(きずな)を地域活性化の基盤としていくという好循環をもたらすことになる。ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育(ESD)や主権者教育も、身近な課題について自分ができることを考え行動していくという学びが、地球規模から身近な地域の課題の解決の手掛かりとなるとという理念に基づくものである。

16

## 地域連携の理論： Global Action Program 5つの優先分野と教育実践にかかわる課題

GAPの5つの優先分野	GAPの教育実践にかかわる課題
I.政策的支援(ESDに対する政策的支援)	教育政策、カリキュラム及び国家的なスタンダード、学習評価を確立。指標となる枠組み等にESDを導入。
II.機関包括型アプローチ (ESDへの包括的取組)	教授内容や方法論の再方向付け、コミュニティ、ステークホルダーとの連携、持続可能な開発に則した学校園やや施設管理を行う
III.教育者(ESDを実践する教育者の育成)	教員養成及び現職教員研修へのESDの導入。学校管理者に対するESD研修。教科への浸透。教科横断的な項目としてのESDの統合
IV.ユース(ESDへの若者の参加の支援)	(a)学習者中心のノンフォーマル及びインフォーマルな場でのESDの学習の機会の充実。
V.地域コミュニティ(ESDへの地域コミュニティの参加促進)	(b)地方機関や地方自治体によるESD学習機会の提供。地域レベルでのESDの学校への導入を支援。

17

# 編集集中

## 地域連携の理論：最近の第2期ESD国内実施計画



### 1. 政策の推進

- ・SDGs 関連政策へのESDの反映
- ・教育政策へのESDの位置付け
- ・地球規模課題に係る施策におけるESDの実施等について記載。



### 2. 学習環境の変革

- ・学習指導要領に基づくESDの実施
- ・ICT化を通じた教育環境の充実
- ・機関包括型アプローチの推進に向けたネットワークの形成・強化等について記載。



### 3. 教育者の能力構築

- ・教員等に対する研修等
- ・ESD推進の手引の作成・活用
- ・各機関においてESDを実践する者の育成等について記載。



### 4. ユースのエンパワーメントと参加の奨励

- ・ユース同士のコミュニティづくり
- ・国際的な議論にユースが参加できる環境づくり
- ・青少年の交流の推進等について記載。



### 5. 地域レベルでの活動の促進

- ・ESDによるローカルSDGsの推進
- ・全国的なESD支援のためのネットワーク機能の発揮等について記載。

18

## 地域連携の課題

「地域学習の体験学習では、体験することが目的となってしまう、問題解決のための知識や技能を身に着けたり、自分たちにできることを考え実践しようとしたりする意欲や態度を育てることが難しい。」(新城小学校 2019年度 第2回)

本研修会では、毎年同じ体験学習を繰り返すことについての問題意識が幾度となく提起されている。

19

# 編集集中

## ESDを取り入れストーリーをつくること

- 只見を愛し、未来の只見を考えられる子どもの育成△

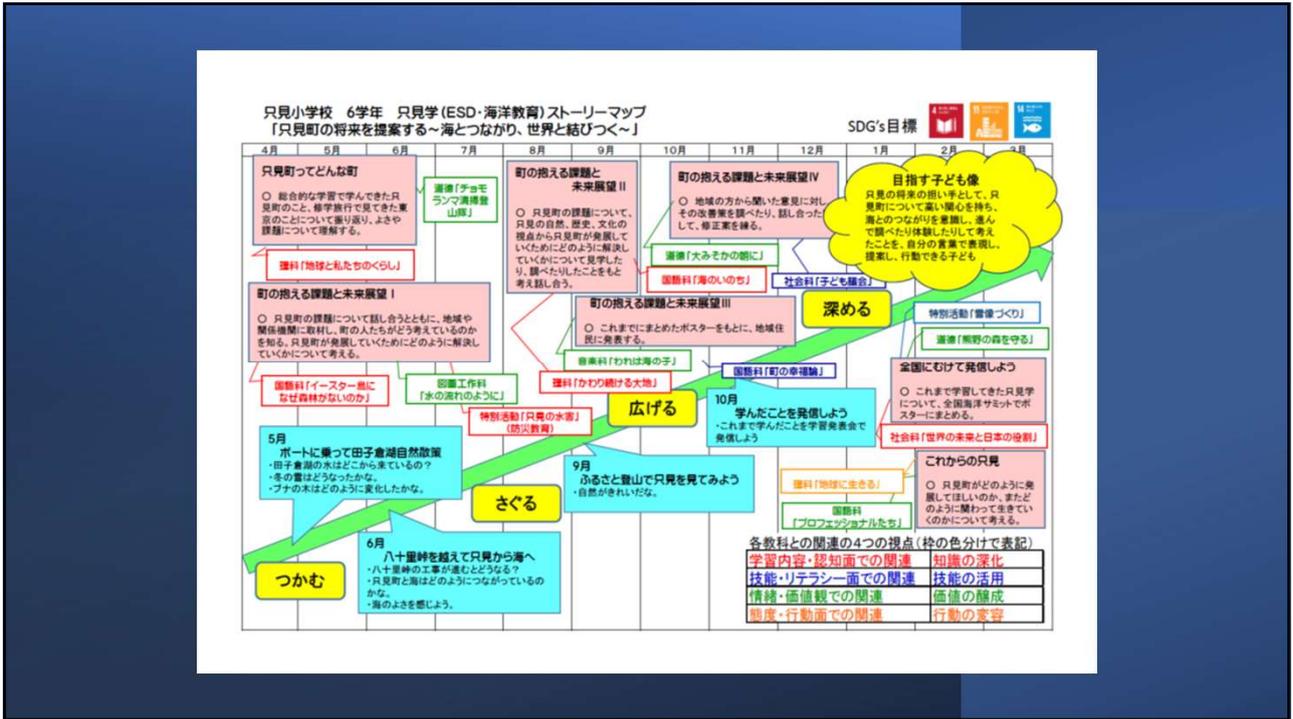
生徒の変容やアクションが見えない。

生徒がストーリーにかかわり、生徒とともに作り上げ、具体化していくことが望ましい。

- 只見小学校：

「郷土料理について知り調理しそのよさをたたえていく」⇒地域の食材を大切にしながらも、海とのかかわりから食材や調理法を考え、現在から未来へ伝えていくことのできるオリジナル料理をつくり発信していくこと

20



21

# 編集集中

ふるさと教育・地域学習とESDは何が違うのか

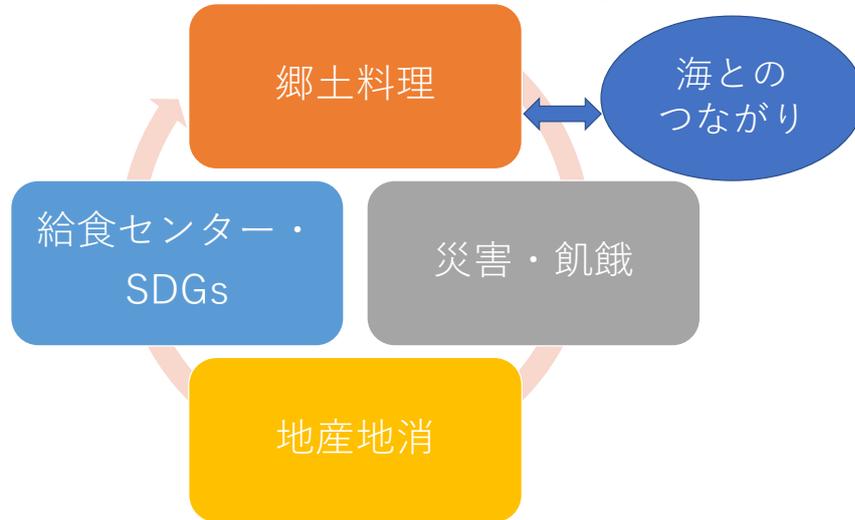
伝統芸能を学ぶ：明和小学校  
 伝統料理を学ぶ：朝日小学校  
 年中行事体験：只見小学校  
 伝統工芸（つる細工）を学ぶ  
 文化財を学ぶ：生涯学習

ものと暮ら  
 らしの  
 ミュージ  
 アム

Local Knowledge  
 伝統から学ぶ生活の知恵とは何  
 か？  
 Sustainability

22

ふるさと教育・地域学習とESDは何が違うのか



23

# 編集集中

ふるさと教育・地域学習とESDは何が違うのか

結びつけて考える・循環として考える = System Thinking

- 海につながる川の学習：明和小学校
- 海辺の清掃活動：只見中学校

ローカルからグローバルにつながる

- SDGsバッジの作成と国連への送付：只見中学校
- 「気候非常事態宣言」：只見中学校
- 地域企業の研修生との交流：只見中学校

24

## ふるさと教育・地域学習とESDは何が違うのか

### 保護者＜地域社会への発信

- 「新聞紙レジ袋」「ねっか袋」：只見中学校
- 「PET Free Monday」：只見中学校

### 日本＜国際社会への発信

- SDGsバッジの作成と国連への送付：只見中学校
- 「気候非常事態宣言」：只見中学校
- 「福島議定書」（学校版報告）：朝日小学校

25

# 編集集中

## 体験型学習の学習スタイル

地域人材の活用	体験学習	主体性・協調性 積極性	学習への興味関心
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 地域に根差した学習</li> <li>• 地域の人材やNPOが教育に参画</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• グループ学習</li> <li>• 協働学習</li> <li>• 自主的な活動</li> <li>• ICTの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 他者と協力する力</li> <li>• つながりを重ねる</li> <li>• リーダーシップ</li> <li>• コミュニケーション能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 考える力の向上</li> <li>• 学習への参加意識の向上</li> </ul>

26

## 地域連携の課題

「地域学習の体験学習では、体験することが目的となってしまう、問題解決のための知識や技能を身に着けたり、自分たちにできることを考え実践しようとしたりする意欲や態度を育てることが難しい。」(新城小学校 2019年度 第2回)

本研修会では、毎年同じ体験学習を繰り返すことについての問題意識が幾度となく提起されている。

27

# 編集集中

## 地域連携の課題

唐桑中学校では、2015年にそれまでの学習形態を改めて、学年ごとにテーマを設定し、そのテーマについての課題を解決させることで、探究的な学習をすすめていく手法をとった。

その結果、「従来までの外部講師から学んだことにネットの情報を付け加えながらまとめて発表する、というこれまでの形から、探究的な学習へ移行するための一歩を踏み出すことができた1年となった」としている。

一方で、探究的な学習については「①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の過程が大切であるが、単元の導入時に課題意識を持たせることが不十分であったため、深い課題設定とならなかった生徒が多かったこと、①④のサイクルを繰り返す中でさらに学びを深めていくことができるようになることが課題である」としている。

探究型の学習を展開するためには、課題意識を育てるために準備と時間が必要であるがそうした時間がとれないことや、課題意識の設定の方法についての情報共有が必要。

28

地域とともに学び  
行動する只見中学校  
～海と山から学ぶ～

只見町立只見中学校 教諭 目黒英樹

29

# 編集集中

1 はじめに 2 昨年までの取組 3 効率と効果 4 町との協働 5 発信 6 これから  
只見中学校が目指す外部とのかわり方

学校HP 発表会

発信 発信

行政 保護者 町民  
企業 学校 小学校・高校  
教育委員会 大学  
地域人材

マスコミ 地域広報誌

1 はじめに 2 昨年までの取組 3 効率と効果 4 町との協働 5 発信 6 これから  
従来の学校と社会のかかわり方

保護者  
↓  
学校  
↑  
教育委員会 地域人材

発信等での発表

30

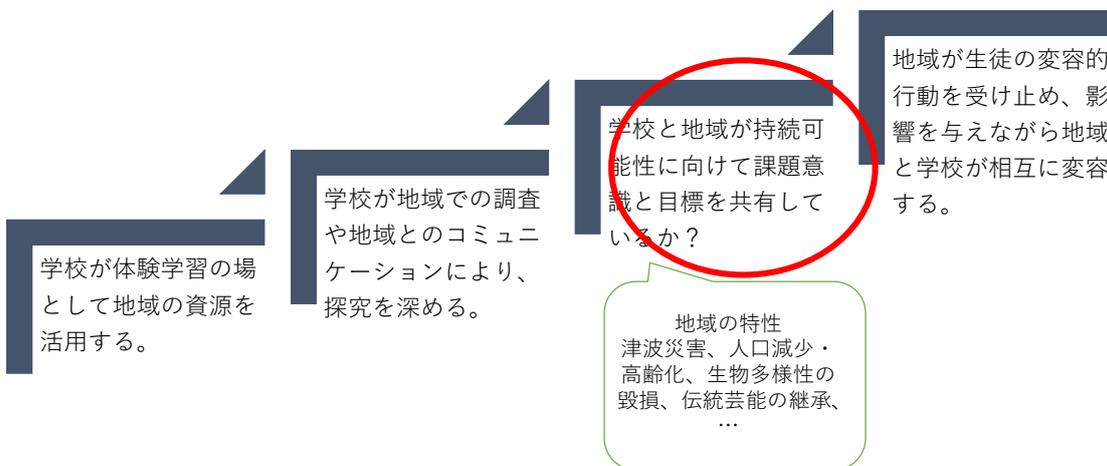
## ESD for 2030が目指す教員・学校・地域の変容

教員	学校	地域社会
<ul style="list-style-type: none"> <li>①学習やプロジェクトを通して生徒の変容をとらえられる。</li> <li>②生徒の変容を教員間で共有できる。</li> <li>③外部と連携するなかで自分自身のキャパシティを広げられる。</li> <li>④多様な研修に参加する中で常に気づきが得られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①民主主義的な学校運営が行われている。</li> <li>②持続可能性についての方向付けが学校全体で行われている。</li> <li>③持続可能性のために校舎や設備を活用できる。</li> <li>④教員の労働条件と幸福が考えられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①地域と学校が持続可能性に向けて目標を共有している。</li> <li>②学校の学びが地域にあり地域の学びが学校にある。</li> <li>③児童生徒（Youth）の変容的行動を受け止め、促す。</li> </ul>

31

# 編集集中

## ESD for 2030が目指す幼小中高連携・地域連携のステップ



32

## 体験活動をマンネリ化させないためには

- ・活動の前に生徒は必ず疑問を出し、問いを立てることに十分な時間を取る。
- ・探究における考察に時間をかける。生徒自ら思考の過程を説明できるようにする（後述）。

明和小学校さんの探究プロセス



33

# 編集集中

## 只見小授業改善の視点

- ・子どもの問いや願いを生かした学習の展開
- ・子どもの問い「～なのかな。」や願い「（活動の目的を示す）～しよう。」を解決するための学習の展開において、具体物を用いたり、ゲストティーチャーを招いたりするなどの体験的な活動を行うことで、子どもが主体的に学習に取り組むことができるようにしたい。

34

## 朝日小「ファシリテーション型授業」の実施

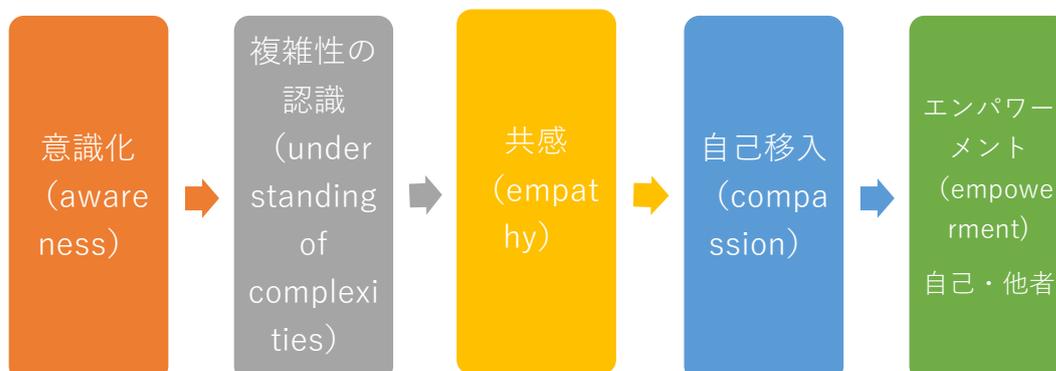
- 子どもたちの主体的な学びを重視した実践
- (教師のファシリテーションスキルの向上)
- 深い学びにつながるためのコーディネート (発問の工夫・葛藤場面を生み出す工夫, 比較・検討する場の設定など)
- 自分の思いや伝えたいことが分かるように表現する場の設定
- 学習形態の工夫

35

# 編集集中

## Education for Sustainable Development: towards achieving the SDGs (ESD for 2030)

- ESD for 2030では「変容的行動変容を主張」
- 変容的行動のステージ (The Stages of Transformation)



36

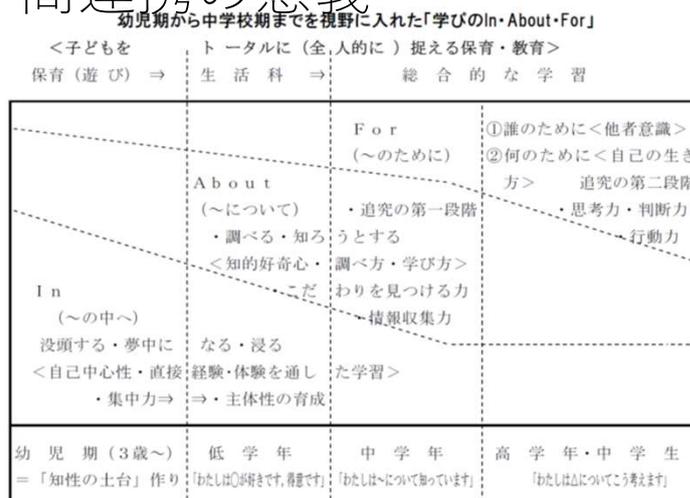
## 朝日小「未来へ向かって行動できる力」

- 「未来へ向かって行動できる力」とは
- 現状や課題を把握する力
- 只見町への影響や関係を考える力（知る）
- 解決のために自分でできることを考える力
- 主体的に関わる力（実行する）

37

# 編集集中

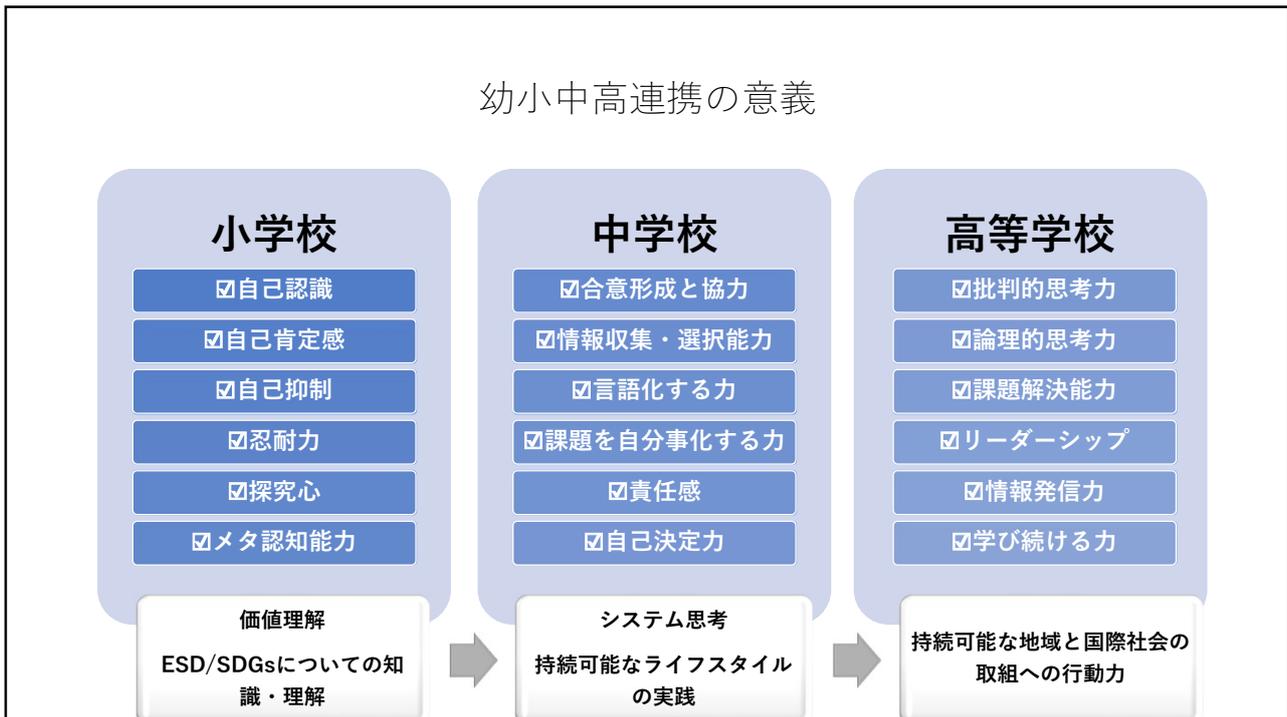
## 幼小中高連携の意義



高階玲治編集『幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開』（教育開発研究所）掲載  
 小中連携と「学びのIn・About・For」  
 上越教育大学大学院 木村吉彦

38

## 幼小中高連携の意義



39

# 編集集中

## 地域連携の理論：社会に開かれた教育課程

- 第4章 学習指導要領の枠組みの改善と「社会に開かれた教育課程」
- 1. 「社会に開かれた教育課程」の実現
- こうした社会とのつながりの中で学校教育を展開していくことは、我が国が社会的な課題を乗り越え、未来を切り拓いていくための大きな原動力ともなる50。特に、子供たちが、身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学び、自らの人生や社会をよりよく変えていくことができるという実感を持つことは、困難を乗り越え、未来に向けて進む希望と力を与えることにつながるものである。
- 註50：未曾有の大災害となった東日本大震災における困難を克服する中でも、子供たちが現実の課題と向き合いながら学び、国内外の多様な人々と協力し、被災地や日本の未来を考えていく姿が、復興に向けての大きな希望となった。人口減少下での様々な地域課題の解決に向けても、社会に開かれた学校での学びが、子供たち自身の生き方や地域貢献につながっていくとともに、地域が総掛かりで子供の成長を応援し、そこで生まれる絆(きずな)を地域活性化の基盤としていくという好循環をもたらすことになる。ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育(ESD)や主権者教育も、身近な課題について自分ができるところから考え行動していくという学びが、地球規模から身近な地域の課題の解決の手掛かりとなるという理念に基づくものである。

40

## 地域連携の理論： Global Action Program 5つの優先分野と教育実践にかかわる課題

GAPの5つの優先分野	GAPの教育実践にかかわる課題
I.政策的支援(ESDに対する政策的支援)	教育政策、カリキュラム及び国家的なスタンダード、学習評価を確立。指標となる枠組み等にESDを導入。
II.機関包括型アプローチ (ESDへの包括的取組)	教授内容や方法論の再方向付け、コミュニティ、ステークホルダーとの連携、持続可能な開発に則した学校園やや施設管理を行う
III.教育者(ESDを実践する教育者の育成)	教員養成及び現職教員研修へのESDの導入。学校管理者に対するESD研修。教科への浸透。教科横断的な項目としてのESDの統合
IV.ユース(ESDへの若者の参加の支援)	(a)学習者中心のノンフォーマル及びインフォーマルな場でのESDの学習の機会の充実。
V.地域コミュニティ(ESDへの地域コミュニティの参加促進)	(b)地方機関や地方自治体によるESD学習機会の提供。地域レベルでのESDの学校への導入を支援。

41

# 編集集中

## 地域連携の理論：最近の第2期ESD国内実施計画



### 1. 政策の推進

- ・SDGs 関連政策へのESDの反映
- ・教育政策へのESDの位置付け
- ・地球規模課題に係る施策におけるESDの実施等について記載。



### 2. 学習環境の変革

- ・学習指導要領に基づくESDの実施
- ・ICT化を通じた教育環境の充実
- ・機関包括型アプローチの推進に向けたネットワークの形成・強化等について記載。



### 3. 教育者の能力構築

- ・教員等に対する研修等
- ・ESD推進の手引の作成・活用
- ・各機関においてESDを実践する者の育成等について記載。



### 4. ユースのエンパワーメントと参加の奨励

- ・ユース同士のコミュニティづくり
- ・国際的な議論にユースが参加できる環境づくり
- ・青少年の交流の推進等について記載。



### 5. 地域レベルでの活動の促進

- ・ESDによるローカルSDGsの推進
- ・全国的なESD支援のためのネットワーク機能の発揮等について記載。

42

## 気仙沼市内学校の連携先例

馬籠風土研究会（地域の団体）
社会福祉協議会、社会福祉法人：気仙沼みのりの園、社会福祉法人：春園苑、小泉幼稚園、公民館、介護老人福祉施設「はまなすの丘、漁業協同組合、消防団
NPO法人自然環境復元協会 島村雅英氏（ピオトープ）5年、地域学習コーディネーター 小野寺雅之氏（ふゆみず田んぼ）5年、日本雁を保護する会 呉地正行氏（ふゆみず田んぼ）5年、気仙沼市社会福祉協議会（キャップハンディ体験）4年
東北大学 災害化学国際研究所、気仙沼市 危機管理課
社会福祉協議会、地元の企業や職場
気仙沼支援学校、気仙沼市社会福祉協議会、気仙沼市危機管理課
気仙沼市危機管理課、気仙沼消防署、気仙沼消防団第7分団、階上地区婦人防火クラブ、階上地区振興協議会、階上地区防犯協会、階上公民館、階上駐在所、階上小学校、階上小・中学校PTA 宮城県漁協大島出張所青年研究会、大島海友会、気仙沼海上保安署、宮城県気仙沼保健福祉事務所、大島みらいプロジェクト、KDDI、大阪そねざきロータリークラブ
NPO法人 シーズアジア、気仙沼復興協会
地域の事業所、気仙沼警察署、気仙沼消防署
産業技術総合研究所からアドバイスや講義をしていただいている。東北電力様からご協力をいただき、講義や講師派遣、見学場所の紹介などをしていただいている。
地元のNPO法人「森は海の恋人」の島山信さんに講義をしていただいたり、同人法森里海研究所において、体験学習などを行ったりしている。
リアスマーク美術館の学芸員さんから講話をいただいた。（津波防災に関する講話）
下川内けんばやし保存会、気仙沼市文化財保護審議会
小泉公民館
東北大学、農協、漁協、森林組合
気仙沼漁業協同組合唐桑支所、宿打ちばやし保存会
幼・保・小連携（気仙沼市津谷保育所・気仙沼市立津谷小学校）、気仙沼市立馬籠幼稚園、JA三陸営農センター、地域に住む外国出身者、仮設住宅住居人など
気仙沼市立馬籠小学校、JA南三陸
JA南三陸、気仙沼市立馬籠幼稚園、気仙沼市立小泉小学校・中学校、気仙沼市立小泉公民館
地域コーディネーターなど

43

# 編集集中

## ESD for 2030が目指す教員・学校・地域の変容

### 教員

- ①学習やプロジェクトを通して生徒の変容をとらえられる。
- ②生徒の変容を教員間で共有できる。
- ③外部と連携するなかで自分自身のキャパシティを広げられる。
- ④多様な研修に参加する中で常に気づきが得られる。

### 学校

- ①民主主義的な学校運営が行われている。
- ②持続可能性についての方向付けが学校全体で行われている。
- ③持続可能性のために校舎や設備を活用できる。
- ④教員の労働条件と幸福が考えられている。

### 地域社会

- ①地域と学校が持続可能性に向けて目標を共有している。
- ②学校の学びが地域にあり地域の学びが学校にある。
- ③児童生徒（Youth）の変容的行動を受け止め、促す。

44

## ESD for 2030が目指す幼小中高連携・地域連携のステップ

学校が体験学習の場として地域の資源を活用する。

学校が地域での調査や地域とのコミュニケーションにより、探究を深める。

学校と地域が持続可能性に向けて課題意識と目標を共有する。

地域が生徒の変容的行動を受け止め、影響を与えながら地域と学校が相互に変容する。

地域の特性  
洪水災害、人口減少・高齢化、生物多様性の毀損、伝統芸能の継承、  
…

45

# 編集集中

学校教育におけるSDGsの教育現場への導入と  
その成果に関する考察  
—東北地方の学校実践を中心に—

市瀬智紀 本図愛実 卜部匡司  
(宮城教育大学) (宮城教育大学) (広島市立大学)

46

## 新学習指導要領 前文

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、**自分のよさや可能性を認識**するとともに、

あらゆる**他者を価値のある存在として尊重**し、**多様な人々と協働**しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、

**持続可能な社会の創り手となる**ことができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、**各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程**である。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通して**よりよい社会を創る**という理念を学校と社会とが共有し、

それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような**資質・能力**を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、

社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、**社会に開かれた教育課程**の実現が重要となる。

47

# 編集集中

## 新学習指導要領とSDGs

### 1. 育成を目指す資質・能力についての基本的な考え方

多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの。

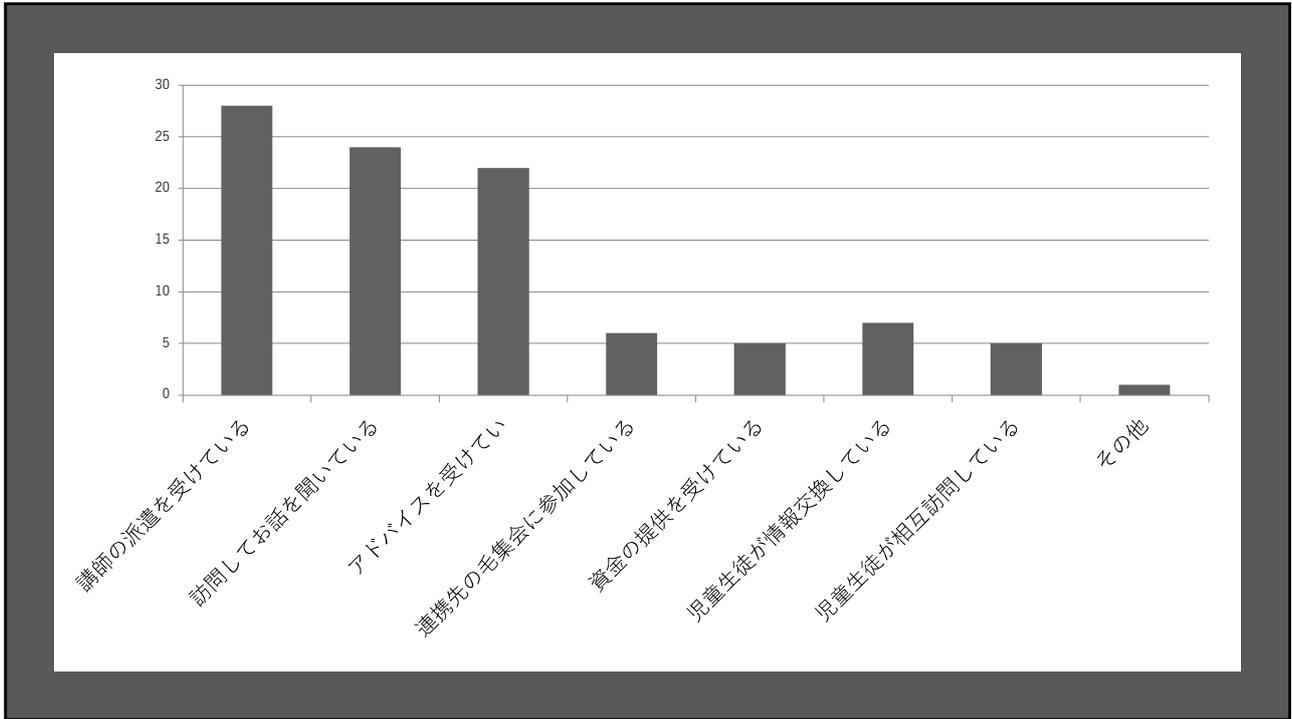
(**資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理**)

また、世界とそこにおける我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるようにしていくことも重要となる。**国際的に共有されている持続可能な開発目標(SDGs)なども踏まえつつ**、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、**地域や地球規模の諸課題**について、子供一人一人が自らの課題として考え、**持続可能な社会づくり**につなげていく力を育てていくことが求められる。

第5章 何ができるようになるか－育成を目指す資質・能力－  
2016(平成28)年12月中央教育審議会答申

48

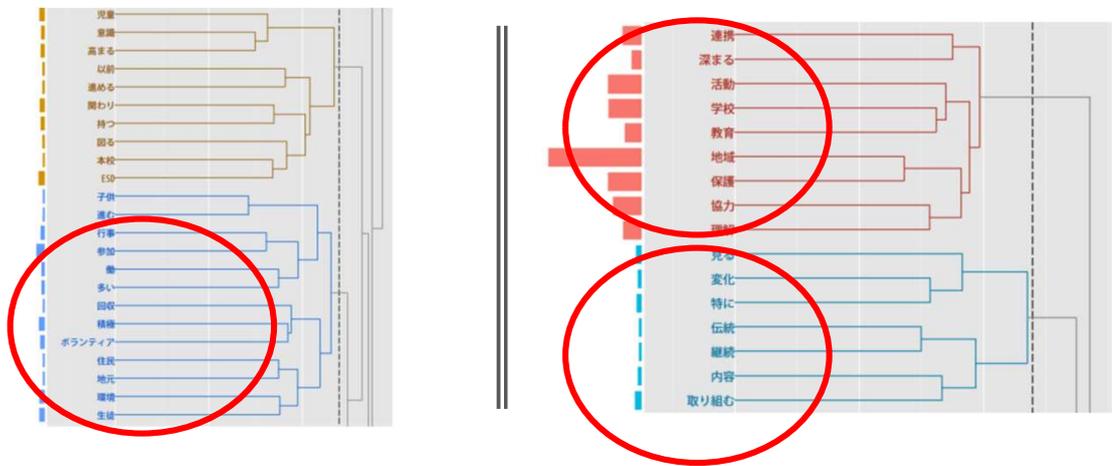




51

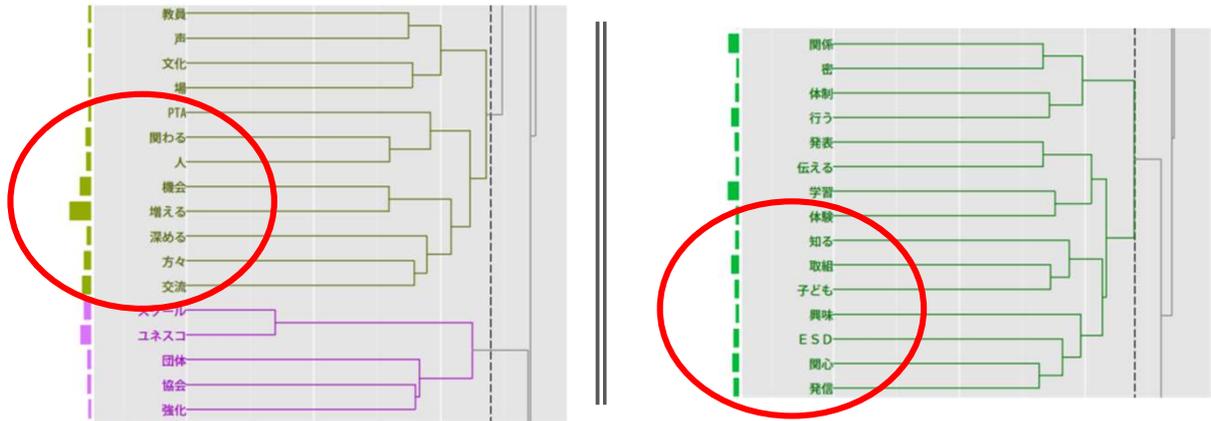
# 編集集中

これまでの気仙沼地域連携の成果



52

## これまでの気仙沼地域連携の成果



53

# 編集集中

## 2. コンソーシアムにおけるSDGs学校実践の特徴

[https://www.youtube.com/watch?v=VzsyCpCcl\\_g](https://www.youtube.com/watch?v=VzsyCpCcl_g)

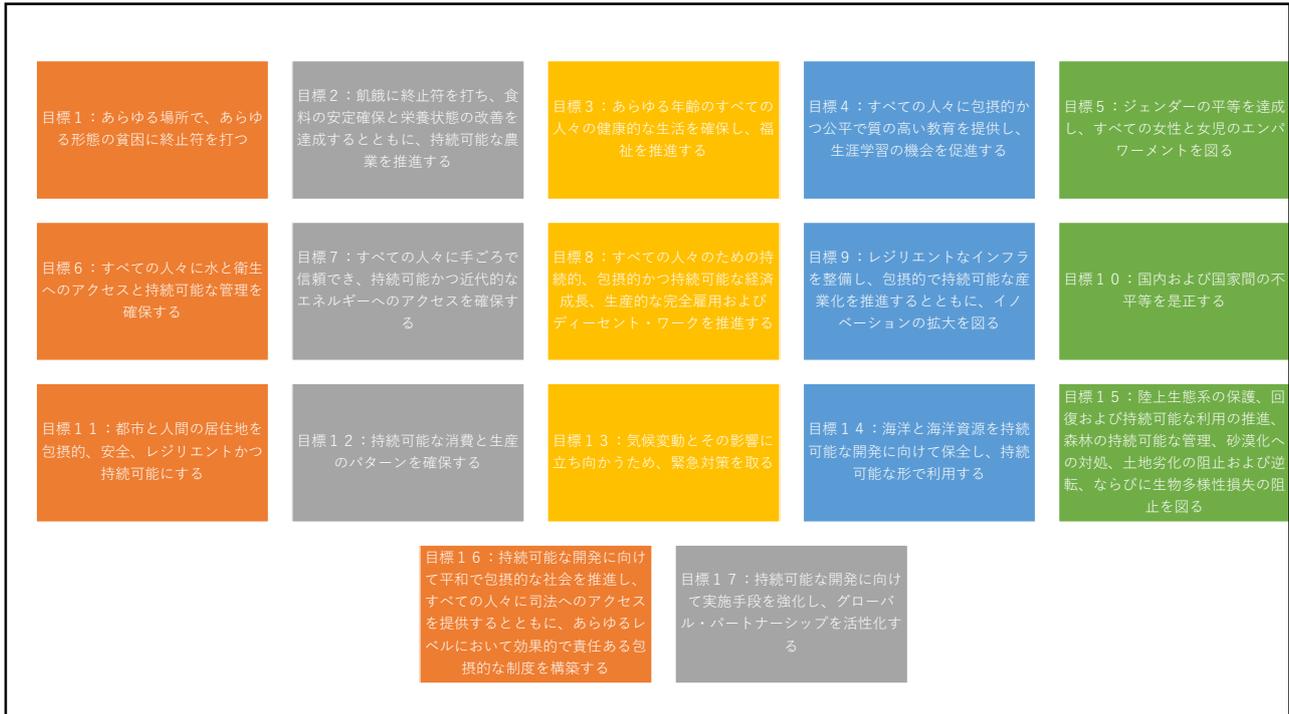
持続可能性の問題を解決するために、多様な手法を総合的に活用しているか。

地域に根差した学習をするとともに、グローバルな視点を取り入れられているか。

競争と共生、消費と節約など、矛盾が生じる正解のない課題が学習に取り入れられているか。

知識や理解にとどまらず、学習したことが行動の変革に結び付いているか。

54



55

# 編集集中

## ESDと関連付けられた3つの観点

持続可能な開発のための教育（ESD）は学習指導要領に示された3つの観点と結び付けられている。

①課程設計の編成（カリキュラムマネジメント）

②資質・能力

③社会に開かれた教育課程、と関連付けられながら言及されている。

56

## 資料：学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)

- 第2章 2030年の社会と子供たちの未来  
(予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる)
- 特に、自然環境や資源の有限性等を理解し、持続可能な社会づくりを実現していくことは、我が国や各地域が直面する課題であるとともに、地球規模の課題でもある。子供たち一人一人が、地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分たちができることを考え、多様な人々と協働し実践できるよう、我が国は、持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議のホスト国としても、先進的な役割を果たすことが求められる。
- 教育課程において、各教科等において何を教えるかという内容は重要ではあるが、前述のとおり、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。特に、これからの時代に求められる資質・能力については、第5章において述べるように、情報活用能力や問題発見・解決能力、様々な現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など、特定の教科等だけではなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多く指摘されている45。
- 註45:持続可能な開発のための教育(ESD)が目指すのも、教科等を越えた教育課程全体の取組を通じて、子供たち一人一人が、自然環境や地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分ができることを考え実践できるようにしていくことである。

57

# 編集集中

## 資料：学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)

- 第4章 学習指導要領の枠組みの改善と「社会に開かれた教育課程」
- 1. 「社会に開かれた教育課程」の実現
- こうした社会とのつながりの中で学校教育を展開していくことは、我が国が社会的な課題を乗り越え、未来を切り拓いていくための大きな原動力ともなる50。特に、子供たちが、身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学び、自らの人生や社会をよりよく変えていくことができるという実感を持つことは、困難を乗り越え、未来に向けて進む希望と力を与えることにつながるものである。
- 註50：未曾有の大災害となった東日本大震災における困難を克服する中でも、子供たちが現実の課題と向き合いながら学び、国内外の多様な人々と協力し、被災地や日本の未来を考えていく姿が、復興に向けての大きな希望となった。人口減少下での様々な地域課題の解決に向けても、社会に開かれた学校での学びが、子供たち自身の生き方や地域貢献につながっていくとともに、地域が総掛かりで子供の成長を応援し、そこで生まれる絆(きずな)を地域活性化の基盤としていくという好循環をもたらすことになる。ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育(ESD)や主権者教育も、身近な課題について自分ができることを考え行動していくという学びが、地球規模から身近な地域の課題の解決の手掛かりとなるという理念に基づくものである。

58

## 資料：学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)

- 第5章 何ができるようになるか－育成を目指す資質・能力－
- 1. 育成を目指す資質・能力についての基本的な考え方
- 多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの。
- (資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理)
- また、世界とそこにおける我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるようにしていくことも重要となる。国際的に共有されている持続可能な開発目標(SDGs)なども踏まえつつ、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力を育てていくことが求められる。

59

# 編集集中

## ESD推進の成果

- 「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会」による報告『ESDの更なる推進に向けて(ESD特別分科会報告書)』（2015）において「ESDの実践を通じて学校間の交流、地域とのつながり、生徒間のつながり等が広がることで、子供たちの学習に対する興味・関心が向上し、子供たちの学びが深まり、自分たちの課題を解決していこうとする意識が高まり、自己肯定感が育成された等、子供の意識の変容がみられた」と報告される。
- 学習指導要領(2020)答申に提示された「自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力」につながる。

60

## ESDの実践 として求め られる事柄

持続可能性の問題を解決するために、多様な手法を総合的に活用しているか。

地域に根差した学習をするとともに、グローバルな視点を取り入れられているか。

競争と共生、消費と節約など、矛盾が生じる正解のない課題が学習に取り入れられているか。

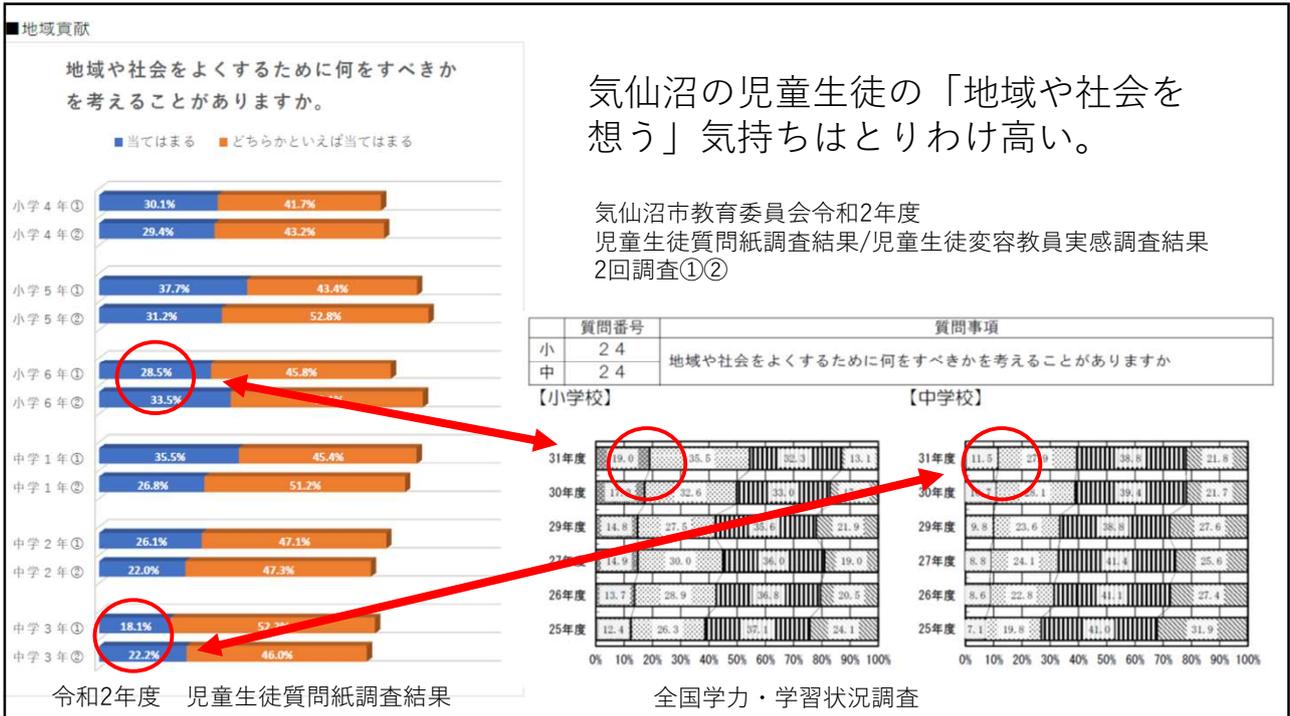
知識や理解にとどまらず、学習したことが行動の変革に結び付いているか。

61

# 編集集中

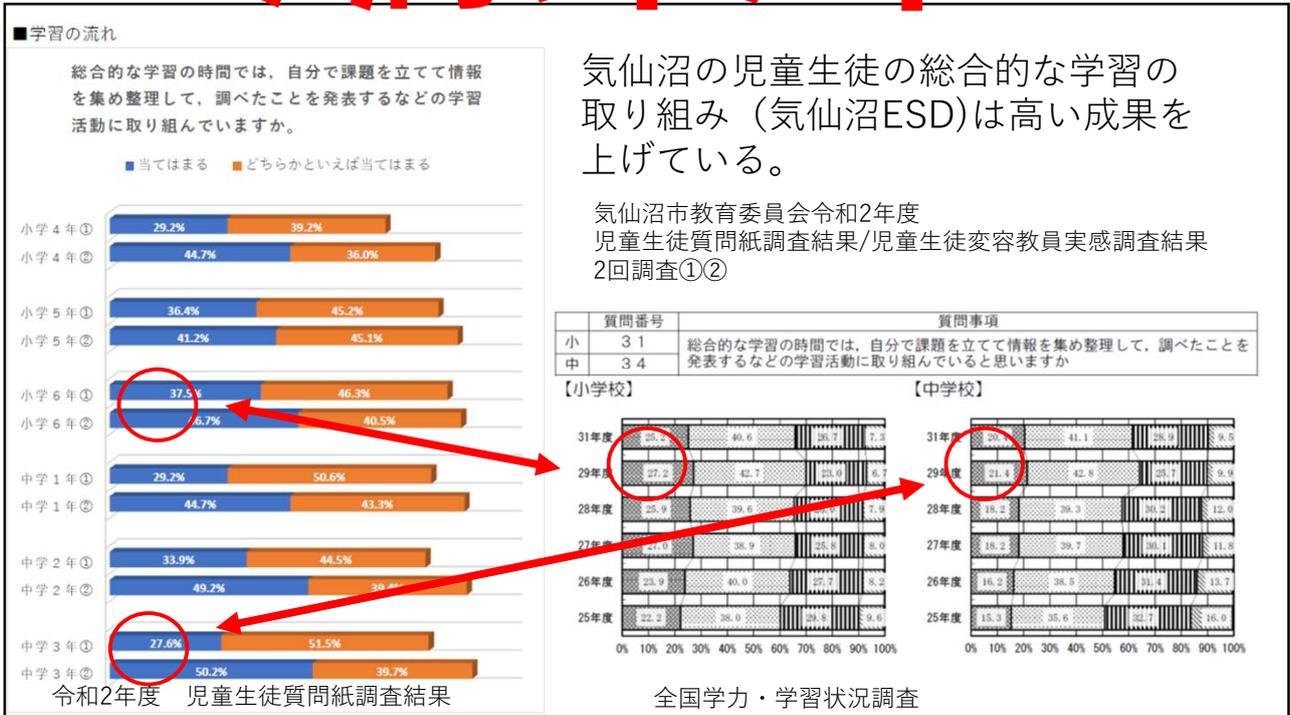


62

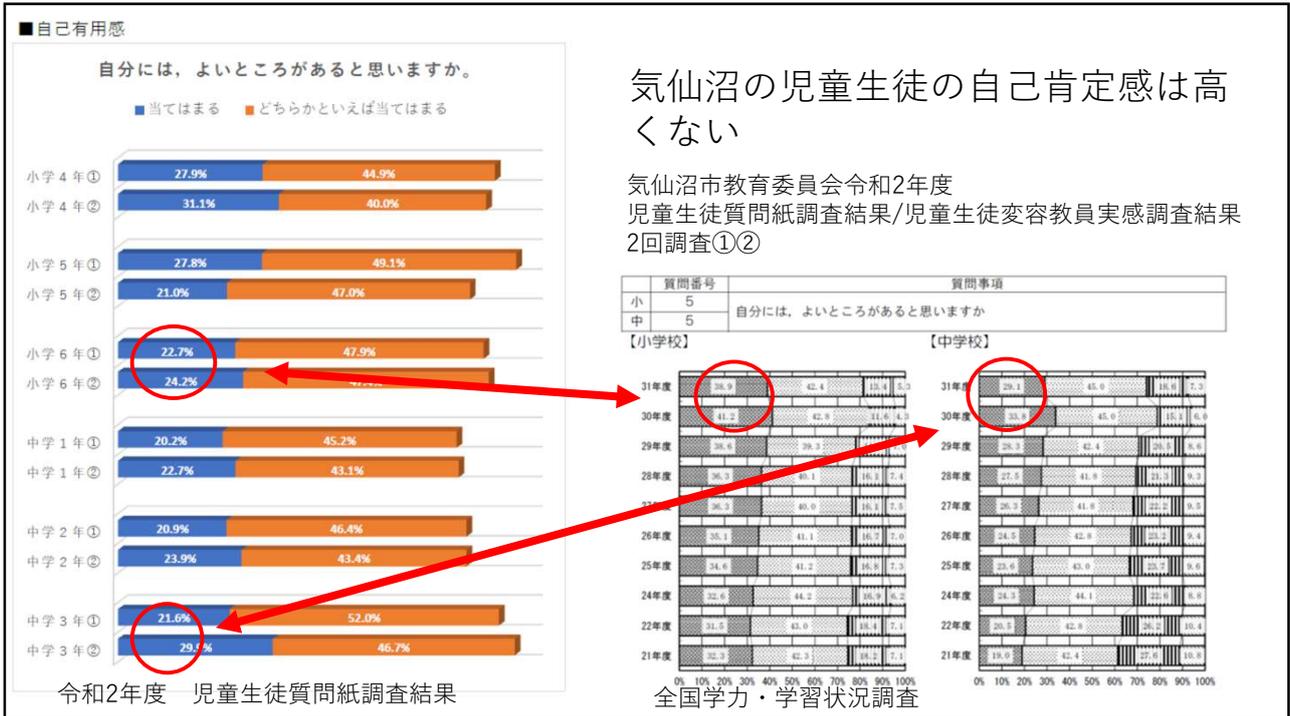


63

# 編集集中

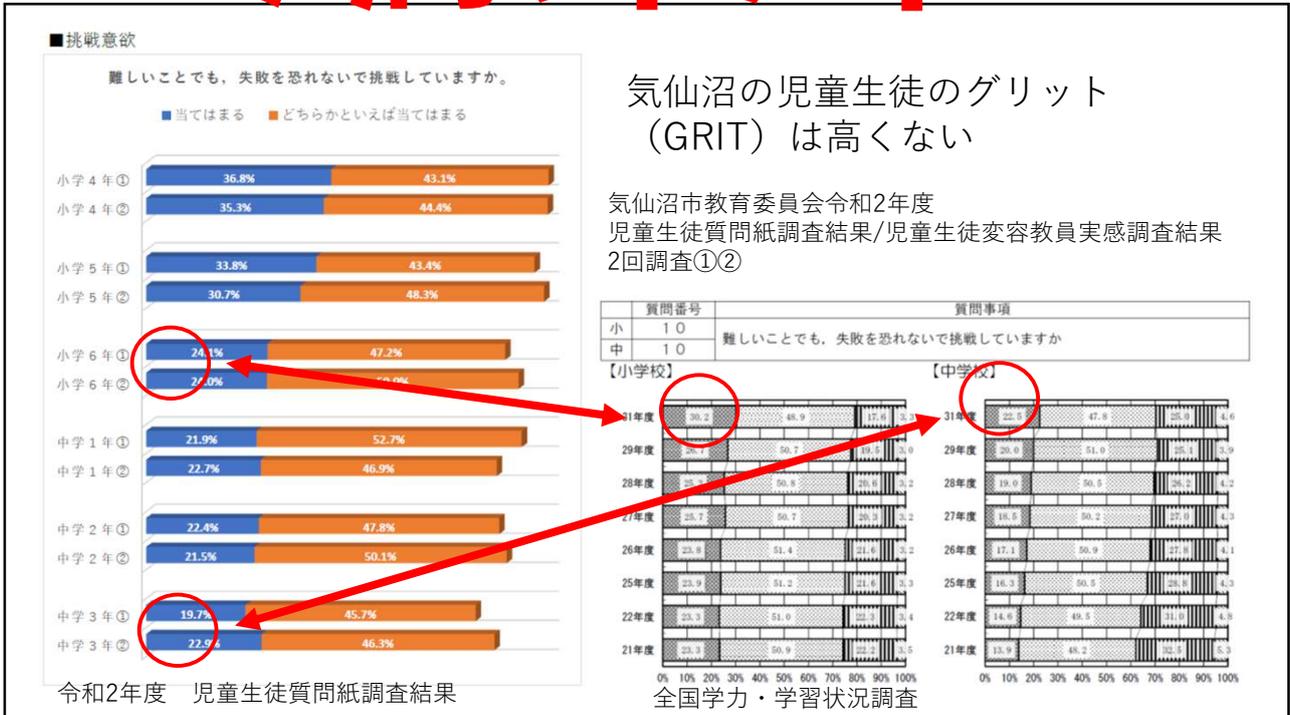


64



65

# 編集集中



66

## 持続可能な開発目標（SDGs）とは

- 開発アジェンダの節目の年、2015年の9月25日－27日、ニューヨーク国連本部において、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、150を超える加盟国首脳に参加のもと、その成果文書として、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。
- アジェンダは、人間、地球及び繁栄のための行動計画として、宣言および目標を掲げました。この目標が、ミレニアム開発目標（MDGs）の後継であり、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs）」。
- 国連に加盟するすべての国は、全会一致で採択したアジェンダをもとに、2015年から2030年までに、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など、持続可能な開発のための諸目標を達成すべく力を尽くす。

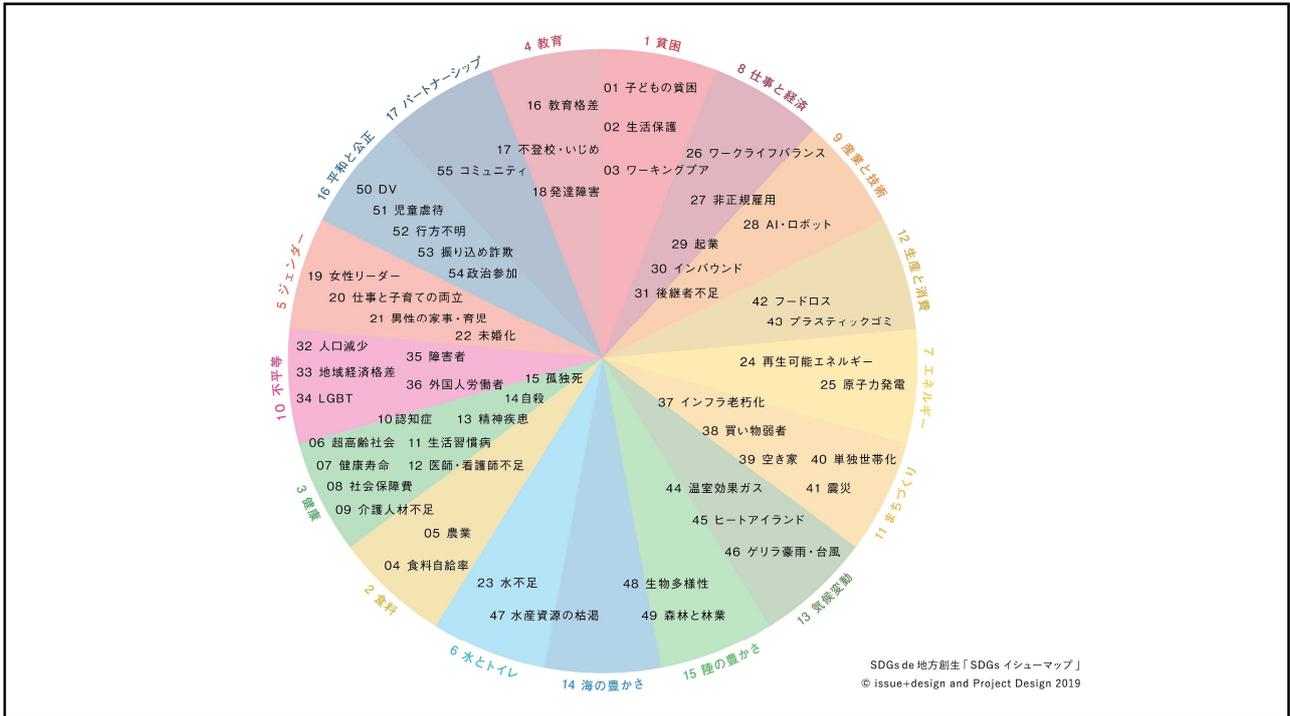
67

# 編集集中

2016(平成28)年12月中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」

- (資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理)
- また、世界とそこにおける我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるようにしていくことも重要となる。国際的に共有されている持続可能な開発目標(SDGs)なども踏まえつつ、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力を育てていくことが求められる。

68



69

# 編集集中

地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力

農村生活体験	グリーンツーリズム	漁業体験
林業体験	前沢曲家集落	大内宿

70

## SDGsの導入を深める

- 修学旅行などをSDGsの調査研究の場として活用する
- 海外交流先においてSDGsについての取組の成果を海外の生徒と共有する。（ZOOMなどで日常的に）
- SDGsの取組み熱心な企業（地元企業を含む）などと連携し、生徒の社会的な活動や調査の場を広げる。
- 学校内のみならず、国内外の学会や発表会でSDGsにかかわる課題研究を発表する。

以下はESDの手法

- 学校の行事や活動をESD/SDGsでまとめる。
- 教科においてもESD/SDGsを意識した授業を行う。

71

# 編集集中

ユネスコスクール・ESDの活動としての総合的な学習の時間

[https://www.youtube.com/watch?v=VzsyCpCcl\\_g](https://www.youtube.com/watch?v=VzsyCpCcl_g)

[Zoom meeting invitation - Tomonori ICHINOSEのZoomミーティング - Zoom](#)

---

持続可能性の問題を解決するために、多様な手法を総合的に活用しているか。

---

地域に根差した学習をするとともに、グローバルな視点を取り入れられているか。

---

競争と共生、消費と節約など、矛盾が生じる正解のない課題が学習に取り入れられているか。

---

知識や理解にとどまらず、学習したことが行動の変革に結び付いているか。

72



3

# 編集集中

Think for others  
Express themselves in a different way!



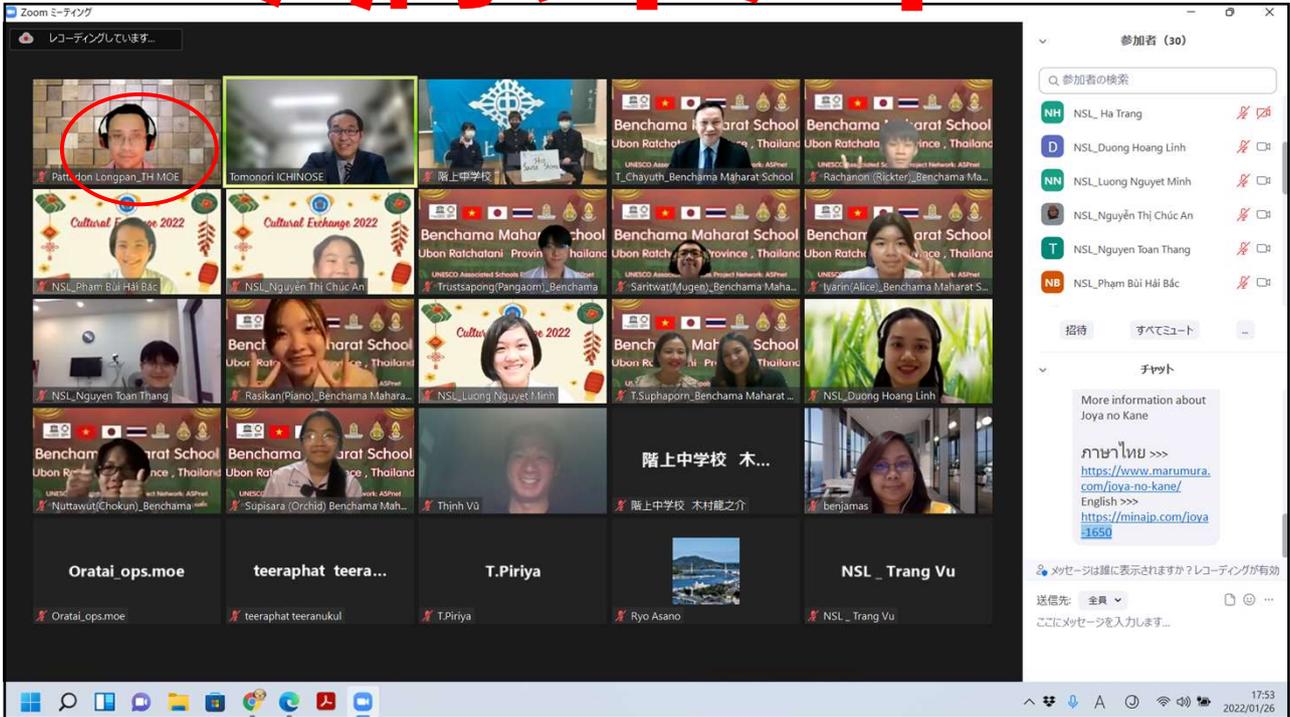
4

4



5

# 編集集中

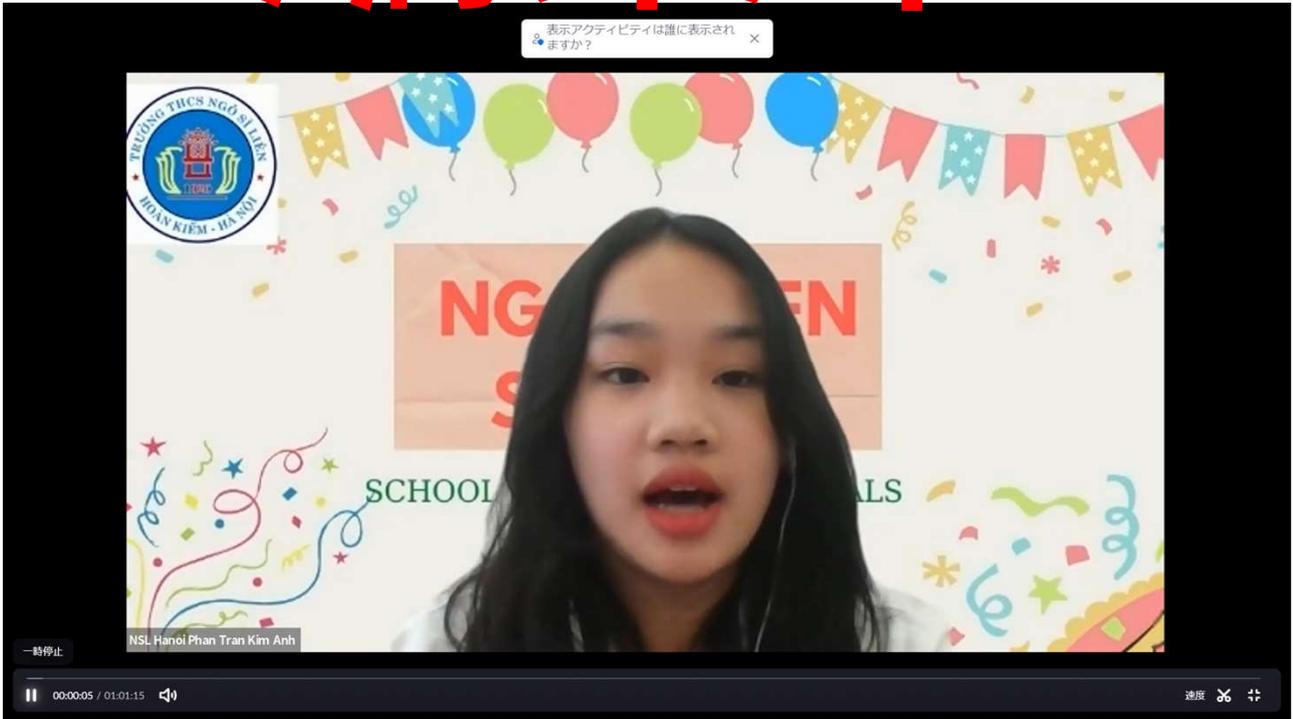


6



7

# 編集集中



8

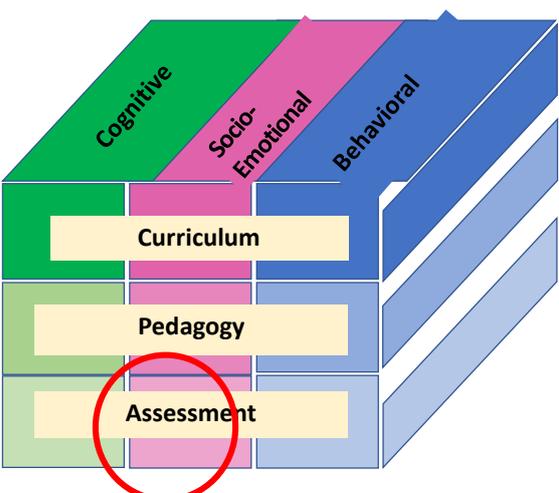
### Global Citizenship in the New Normal for ASPnet

19 มีนาคม 2565 เวลา 9.00 - 16.00 น.

9

# 編集中

### Three pillars of learning for ESD (UNESCO 2017)



Domain	Required competencies
<b>Cognitive domain</b>	Knowledge and thinking skills necessary to better understand the SDGs and the challenges in achieving them.
<b>Socio-emotional domain</b>	Social skills that enable learners to collaborate, negotiate and communicate to promote the SDGs as well as self-reflection skills, values, attitudes and motivations that enable learners to develop themselves.
<b>Behavioral domain</b>	Action competencies

Source: Education for Sustainable Development Goals: learning objectives - UNESCO Digital Library




10

## National Competencies framework and UNESCO's framework

### Knowledge and Skills

- Cognitive Domain

### Thinking, Judgement, Expression

- Social-Emotional Domain

### Motivation of Learning, Humanity

- Behavioral Domain

11

# 編集集中

**Start Inquiry Based Learning**

**Disaster Stricken Area**

**Experiential Exposure to the Realities**

**Experiential Learning Program**

**HASHIKAMI JUNIOR HIGH SCHOOL**

Location	Magnitude
Hakusai, Hokkaido	2.4m
Mutsu, Aomori	2.9m
Erimo, Hokkaido	3.0m
Hachinohe, Aomori	More than 2.7m
Miyako, Iwate	More than 8.5m
Kamaishi, Iwate	More than 4.1m
Ofunato, Iwate	More than 8.0m
Ishinomaki, Miyagi	More than 7.6m
Sōma, Fukushima	More than 9.3m
Onahama, Fukushima	3.3m
Ōarai, Ibaraki	4.2m
Chōshi, Chiba	2.4m
Harumi, Tokyo	1.3m
Chiba, Chiba	0.9m
Yokohama, Kanagawa	1.6m
Yokosuka, Kanagawa	1.6m
Tateyama, Chiba	1.6m
Hachijōjima	1.4m
Miyakejima	0.8m
Kōzushima	0.8m
Numazu, Shizuoka	1.4m
Sakata, Yamagata	0.4m
Niigata, Niigata	0.2m
Kanazawa, Ishikawa	0.3m
Tsuruga, Fukui	0.3m
Sakaiminato, Tottori	0.3m
Kure, Hiroshima	0.3m
Hakata, Fukuoka	0.3m
Nagasaki, Nagasaki	0.8m
Osaka, Osaka	0.6m
Komatsushima, Ehime	0.3m
Odawara, Kanagawa	0.9m

12



13

# 編集集中



14

## Competencies that are focused on in each activity: Example of Hashikami J.H

- In order to nurture leaders of a sustainable society, They have set disaster risk reduction as a pillar and set the following according to three areas, with the aim of nurturing students who can independently find and solve issues.

### A Ability to think critically (Cognitive Area)

- A-1: Able to identify what is needed to resolve local issues related to disaster prevention.
- A-2: Able to get the knowledge such as climate change, biodiversity, human rights and welfare.

### B Ability to predict and plan for the future/ transform it (social emotional area)

- B-1: Able to plan and propose specific solutions for disaster prevention and mitigation.
- B-2: Has begun to actively work on solving local issues related to disaster prevention and mitigation on his own.

### C Ability to communicate (behavioral area)

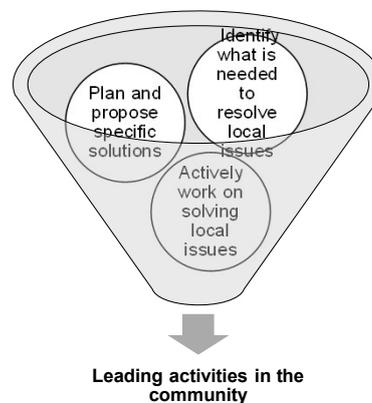
- C-1: Able to communicate with classmates (group members) and local residents through disaster prevention study so that new ideas can be generated.
- C-2: Able to lead the presentations on disaster prevention learning and activities in the community.
- C-3: Able to lead presentations in English on disaster prevention, etc. in the scenario of international exchange.

15

# 編集集中

## Linkage of competencies

- Originally considering about competencies, competency A, B and C has been connected. Using evaluation sheet (Rubric), Hashikami school will later make clear the relationship between above mentioned competencies by evaluation sheets.
- Cognitive skill, A-1 and A-2 are the basic competencies. C Ability to communicate (behavioral area), C-1 and C-2 competencies are usually required. In social emotional dimension, B-1 and B-2 will be mainly obtained on the latter half of the year.



16

# What indicators and Materials are used for learning assessment?



Ordinary Assessment and Academic assessment



Questionary survey for inquiry-based learning



Rubric developed for this project

17

# 編集集中

① 防災学習は楽しいですか	1 あまり楽しくない	2 楽しい時もあるが、楽しくない時もある	3 表面的な楽しさではなく、学ぶ意義を感じ、充実感を感じることが多い	4 表面的な楽しさではなく、学ぶ意義を感じ、充実感を感じることが多い	5 表面的な楽しさではなく、学ぶ意義を感じ、充実感を感じることが多い
② 防災学習にどのくらい継続的に取り組めると思いますか。(おぼろげさ)	1 難しいことやわからないことがあると、イヤになって、学習や行動をあきらめてしまう	2 難しいことやわからないことがあると、イヤになるが、学習や行動はなんとか継続できる	3 難しいことやわからないことがあると、イヤになるが、学習や行動はなんとか継続できる	4 難しいことやわからないことがあると、イヤになるが、学習や行動はなんとか継続できる	5 どんなに難しいことやわからないことがあっても、それを通じて学びながら学習や行動に取り組むことができ、学習や行動をやめたくはない
③ 防災・減災に関して、あなたほどくらい役に立てると思いますか。(自己肯定感)	1 ほとんど役に立たないと思う	2 少し役に立てると思う	3 役に立てると思う	4 近所の人々の役に立てると思う	5 地域全体の役に立てると思う
④ 将来自分は地域や社会のために役立つことができると思えますか。(自己有用感)	1 役立つ人間になる必要をそれほど感じない	2 どちらかというと役立つ人間になりたいと思う	3 役立つ人間になりたいと思う	4 役立つ人間になりたいと思う	5 役立つ人間になりたいと非常に強く思う
⑤ 防災の学習と実践行動で、あなたは学校の生徒とどのくらい協力できると思いますか。(協調性)	1 協力の自信がない	2 仲の良い数人の生徒となら協力できる	3 普段はあまり話さない生徒とも、声をかければ協力できる	4 普段はあまり話さない生徒に自分から声をかけて協力できる	5 協力関係をそつんとして立ち上げ、継続的に協力できる
⑥ 防災の学習と実践行動で、あなたは地域の大人たちと協力することができますか。	1 協力の自信がない	2 地域の大人たちに家を知っている大人となら協力できる	3 知っている大人となら協力できる	4 地域の大人たちに自ら声をかけて協力できる	5 地域の大人たちと協力できる

social

emotional

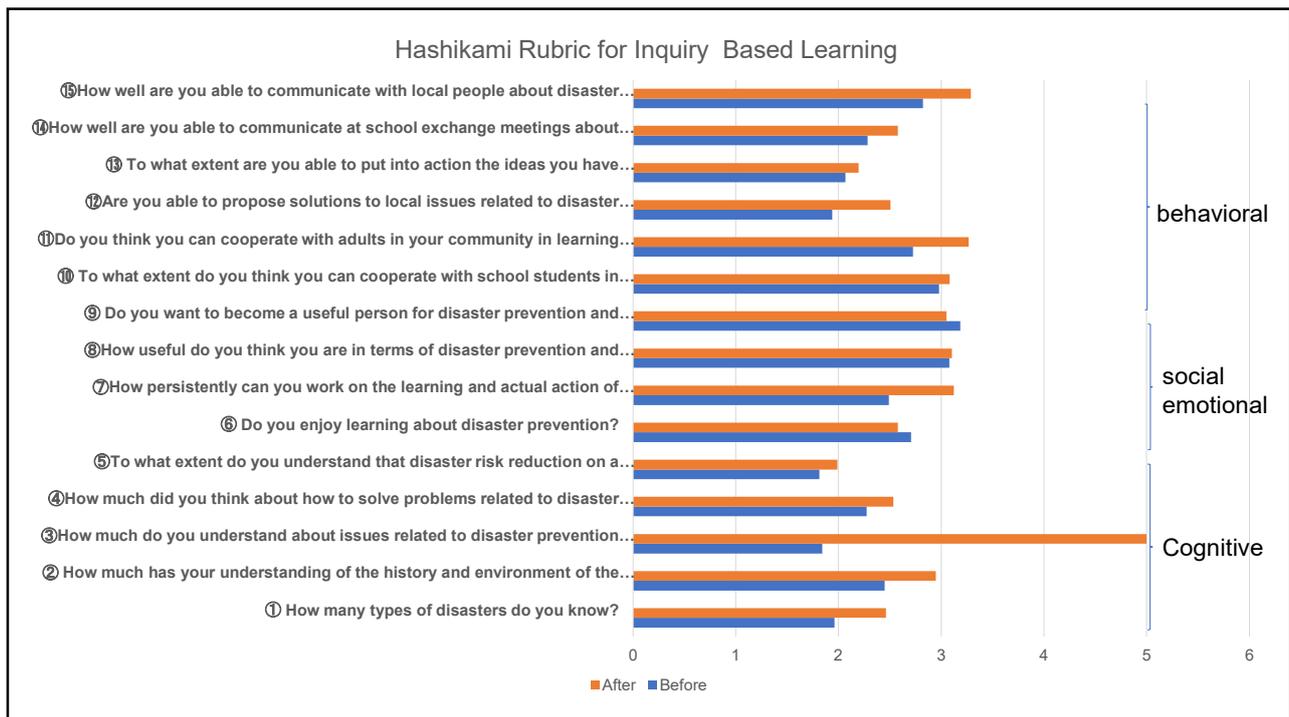
behavioral

Cognitive

① 防災・減災に関する地域の課題の解決方法、どのくらい自分から提案できるか。(能力)	1 提案はできず、自分からは提案できない	2 提案はできず、自分からは提案できない	3 提案はできず、自分からは提案できない	4 提案はできず、自分からは提案できない	5 提案はできず、自分からは提案できない
② 防災・減災について他者から提案された課題解決方法(作業、アクション)に、自分から提案する手助けを求めたいか。	1 求めない	2 求めない	3 求めない	4 求めない	5 求めない
③ 防災・減災について他者から提案された課題解決方法(作業、アクション)に、自分から提案する手助けを求めたいか。	1 求めない	2 求めない	3 求めない	4 求めない	5 求めない
④ 防災・減災について他者から提案された課題解決方法(作業、アクション)に、自分から提案する手助けを求めたいか。	1 求めない	2 求めない	3 求めない	4 求めない	5 求めない
⑤ 防災・減災について他者から提案された課題解決方法(作業、アクション)に、自分から提案する手助けを求めたいか。	1 求めない	2 求めない	3 求めない	4 求めない	5 求めない

① 防災・減災に関する地域の課題の解決方法、どのくらい自分から提案できるか。(能力)	1 1~4週間	2 5~6週間	3 7~8週間	4 10~14週間	5 15週間以上
② 防災・減災に関する地域の課題の解決方法、どのくらい自分から提案できるか。(能力)	1 1~4週間	2 5~6週間	3 7~8週間	4 10~14週間	5 15週間以上
③ 防災・減災に関する地域の課題の解決方法、どのくらい自分から提案できるか。(能力)	1 1~4週間	2 5~6週間	3 7~8週間	4 10~14週間	5 15週間以上
④ 防災・減災に関する地域の課題の解決方法、どのくらい自分から提案できるか。(能力)	1 1~4週間	2 5~6週間	3 7~8週間	4 10~14週間	5 15週間以上
⑤ 防災・減災に関する地域の課題の解決方法、どのくらい自分から提案できるか。(能力)	1 1~4週間	2 5~6週間	3 7~8週間	4 10~14週間	5 15週間以上

18



19

# 編集集中

## Result of rubric assessment

1. Knowledge acquisition in cognitive domain is generally high in the three domains of cognitive, social emotional, and behavioral.

2. In cognitive domain, many students feel that their understanding of the issues has increased (③).

3. Among the three areas, the social-emotional domain has not been evaluated highly, but it is recognized that "perseverance" GRIT⑦ is increasing.

4. In social emotional domain, the part related to self-esteem did not improve (⑧, ⑨). It is thought that students have learned the difficulties to act for the real society.

5. In the field of behavioral domain, Ability to cooperate with local people (⑪) and communicate with them (⑭) has improved. This is the effect of setting such a situation.

6. In the field related to behavioral domain, ability to make proposals for issues has increased (⑫). This is the result of setting such a situation.

20

## Impression of transformation of students

### 1. Transformation of Students

- Discussion activities between students and discussions with teachers and inquiry learning coordinators leads to the creation of new ideas.
- In international exchange, there was a strong tendency to resist interaction due to anxiety about not being able to verbally communicate, but this feeling of resistance among the participating students gradually decreased as they actually communicated. In addition, they showed a broader perspective.
- it became an opportunity to think about the importance and difficulty of communication using English.

21

# 編集集中

## Impression of transformation of teachers, and schools

### 2. Transformation of teachers

- By utilizing the inquiry learning coordinator and obtaining advice, the teacher in charge can clearly show the points to keep in mind during the research time and the ideal way of support. Furthermore, by sharing the information among all the teachers, it became possible to support students in conventional learning.
- Proactively communicating external evaluations from experts and the media to students enhances their feeling of usefulness and satisfaction towards these efforts, which leads to the continuation of the students' motivation for learning.

### 3. Transformation of the School

- In order to make disaster prevention learning more exploratory, the city inquiry learning coordinator was utilized. In addition, by reviewing the curriculum of disaster prevention learning and incorporating experiential learning programs such as marine learning, welfare experience learning, the school develops learning that considers disaster prevention from a broad perspective that is not bound by conventional learning.

22

UNESCO School Network (ASPnet): Collaborative Action Research on the Role of Schools in Achieving SDGs in Asia-Pacific

How does teachers use the assessment in improving their teaching and learning?

National University Corporation Miyagi University of Education  
Tom ICHINOSE, Ph.D. Professor





United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

UNESCO Ass

23

# 編集集中



24



25

# 編集集中

How does teachers use the assessment in improving their teaching and learning?  
Question

What is the target?	Students' group activities	
	Project based learning	
	Subject based study	←
What assessment for?	Academic skills	
	Competencies	←
Which period we asses?	Each study unit	←
	School term	
	School Year	

26

## ACCU "Evaluation Method Development Project for Fostering Sustainable Future Leaders by School Teachers 2020-2021"

27

# 編集集中

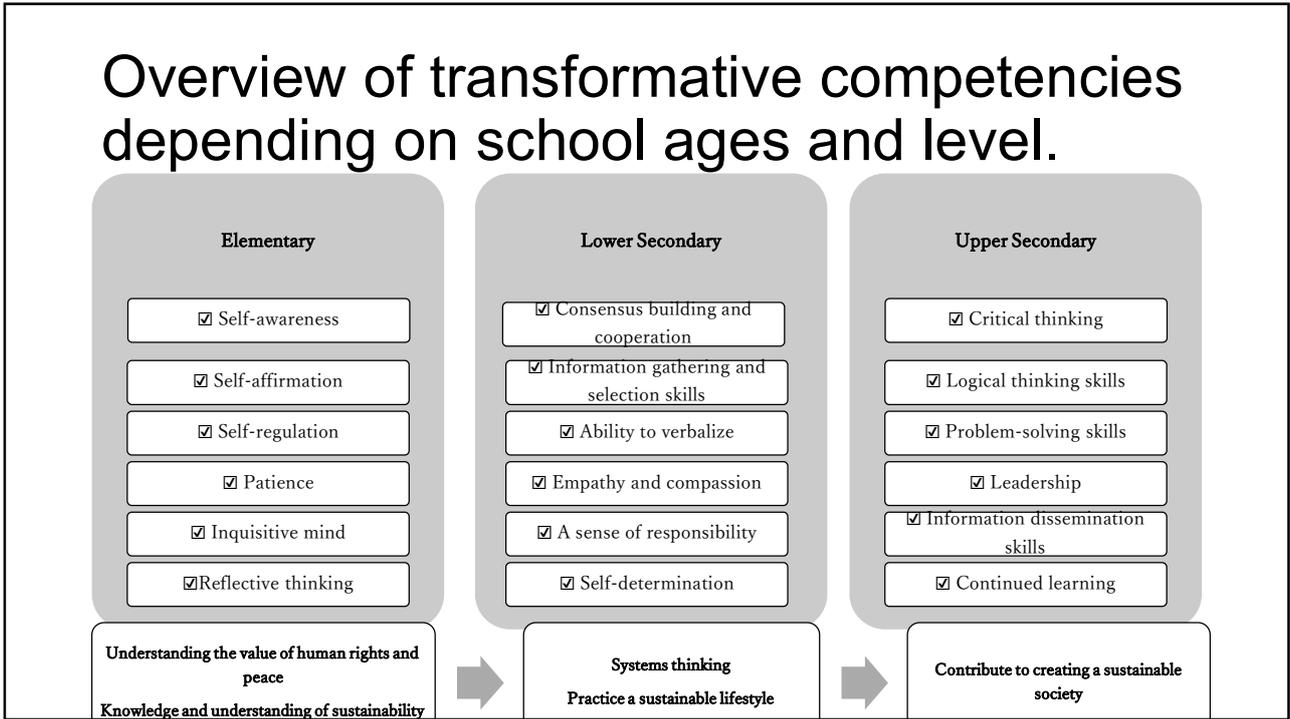
## Transformative competencies were chosen

The result of action-based research titled "Evaluation Method Development Project for Fostering Sustainable Future Leaders by School Teachers 2020-2021" from the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), involving 20 schoolteachers at different school levels, both public and private, from all over Japan.

Thorough schoolteachers' discussions, elements of evaluation that promote transformative action were selected. Then, self-evaluation sheets consisting of the transformative competencies were created by teachers and adapted to school practices. The self-evaluation sheets was delivered to the students. Quantitative and qualitative analyses were performed and data were collected.

28

# Overview of transformative competencies depending on school ages and level.



29

# 編集集中

ESDルーブリック <中学段階>  
 科目【理科】学年【生物】  
 3年1組12号 名刺【中村 恒太】

領域	評価要素	評価	得点	合計
自己啓発	・自分の長所を認められることができる。	4	20	
	・得意な科目を伸ばし、自分自身でいかに学ぶことができる。	4		
	・自分の強みや長所を認め、自分の強みを多面的に活用できる。	4		
	・新しいことでも、失敗を恐れず取り組むことができる。	4		
	・自分の長所を伸ばし、他者と互いに協力しあうことができる。	4		
	・自分の興味関心に基づいて、自ら学習しつづけることができる。	4		
	・自分の得意な科目を伸ばし、他者から学びを得ることができる。	4		
	・自分の得意な科目、強み、弱み、長所を伸ばし、得意を補完し、得意を伸ばしつづけることができる。	4		
	・自分の得意な科目に対して他者の得意な科目を伸ばし、得意を補完しつづけることができる。	4		
	・自分の得意な科目を伸ばし、得意を補完しつづけることができる。	4		
ESDの理解	・持続可能な開発のための目標（SDGs）をいくつ知っている。	4	18	
	・地球規模の課題があることを知っている。	4		
	・地球に持続可能な開発のための目標（SDGs）を理解することができる。	4		
	・日常生活でSDGsの目標達成を意識している。	3		
ESDの理解	・SDGsの目標達成のために行動している。	3		
	・持続可能な開発についての課題について情報収集、情報共有することができる。	4		
	・適切な情報源から情報を収集し、活用することができる。	4		
	・適切な情報源から情報を収集し、活用することができる。	4		
ESDの理解	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	4	20	
	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	4		
	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	4		
ESDの理解	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	4	16	
	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	3		
	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	2		
	・ESD（持続可能な開発）の重要性を理解することができる。	3		

運用する力	評価要素	評価
思考力	・多様な課題を発見し、考え出すことができる。	4
	・多様な課題に対して自分の考えを持つことができる。	4
	・他者との協働によって、自分と他者の考えの、共通点や相違点がわかる。	4
	・自分の考えに対して批判的（クリティカル）な観点で、考えを持つことができる。	4
判断力	・現状を分析し、課題を発見できる。	4
	・正しい未来像を、多面的な視点から情報分析することができる。	4
	・正しい未来像を、他者と協働して決めることができる。	4
	・正しい未来像の実現のために、何をどうすべきか考えることができる。	4
実践力	・正しい未来像の実現のための計画を立てることができる。	4
	・課題を理解し、自分の意見で決めることができる。	4
	・課題を解決し、課題解決のための意見を述べることができる。	4
	・他者に対して、自分の意見を積極的に言うことができる。	4

具体的な結果を残した訳ではないが、将来の夢と自分の意見とあたりを持つ事が出来るようになった。世のこれからはどうなるのか、自分が先導して、自分が責任を肩負い、高校受験がゴールになって、将来を考えあつたと思う。

どの場面で意識して行動できましたか？

全ての行動に最大限の緊張感を持っていく訳ではないが、部活の明け方を消したと見ると、凄く気持ちよくなる。六中に入ってから忘れたような気がする。地球のために、快適には出来ないが、出来ればせめて、常に、行きたいと思

Example of Omori No.6 J.H.

ASPNetアクションリサーチ事業

30

15

学びに向かう力・人間性	自己肯定感	・自分の弱みを見せることができ、他者の弱みを多様性として受け入れられる。	4	22%
		・難しいことでも、失敗を恐れず粘り強く取り組むことができる。	4	
		・自分の長所を生かし、他者と互いに補いながら活動することができる。	4	
	ESDの態度	自分の考えや発言に自信を持ち、物事を前向きにとらえられる。	4	20%
		・自分の興味関心に目を向け、それを学びとつなげることができる。	4	
		・他者の発言を真剣に聞くことができる。	4	
		・他者の意見、価値観、個性、背景を尊重し、共感を示したり、意見を述べたりすることができる。	4	
		・他者の意見に対して批判的な意図を持たずながら、共通の課題を解決しようとするすることができる。	4	
		・学んだことを、既習事項や経験と結びつけて考え、日常生活に活かして行動することができる。	4	
		・SDGsをいくつか知っている。	3	
・SDGsについて知っている。	4			
・目標(SDGs)を説明することができる。	3			
・SDGsに関心を持っている。	4			
		自分のため自分の考えを持っている。	1	
		インターネットで情報検索・情報収集することができる。	3	
		・収集した情報の分類・分析ができる。	4	
			3	

• students are asked to write down their own goals, there were some items and students who set their own goals.

• In the self-affirmation column, this student wrote, "I have confidence in my thoughts and statements, and I can see things positively."

31

# 編集集中

## 大森六中 ESDルーブリック

(3112) 中村 桂太

---

教科名【 理科 】 単元名【 地球と宇宙 】

**どのような場面で、自分のがんばれたか。**

「考える」という面で頑張ることが出来たと思う。生命の生存には向かふ必要なのか...それを満たしていると考えれば星は何か、またそれを集める理由は何なのか...。それだけでなく、それを調べたことによりがに上手に、分かりやすい発表をするか、いろいろなことを考えた。考える力は人が持つ大きな特徴だが、それを生かすこともたいがいと思う。

**以前と比べて、成長したと思われる面**

上でも書いていたが、本気でいろいろ考え、調べようになったと思う。宇宙の空間が膨張し続けていて、それは光よりも速い速度で広がっている。宇宙の膨張に限りがない限り宇宙の果ては見えないのではないか。といったこと、そもそも世の中のものには限りがないものも有りから、光速以上はないと、言い切れないのではないか。(特殊な状況下だとニュートリノがあるし...)などである。

世界が様々な問題に直面している今、問題が解決できる、できないは置いておいて、考え続けることを放棄しては行かないと思う。自分は考え続ける人でありたい。そう思うようになった。

32





How does teachers use the assessment in improving their teaching and learning?

Assessment tool is a student's self-evaluation and also it is a teacher's teaching evaluation.

Students will be able to aware self-transformation through self portfolio.

Assessment can evaluate the effect of each unit to improve classroom teaching.

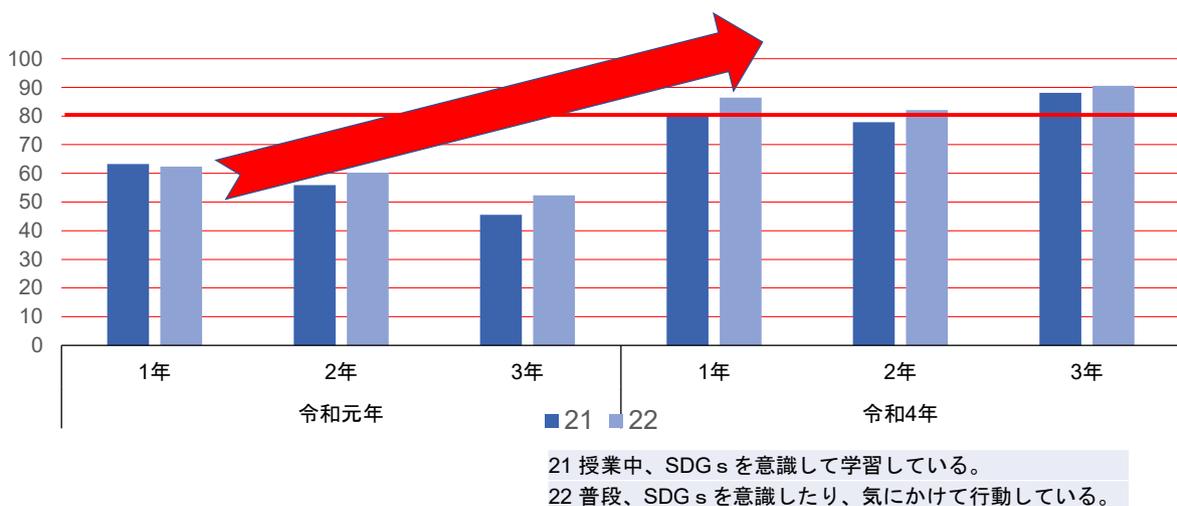
The items in the rubric become student goals and have a great influence on the students.

Conduct evaluations beyond the fiscal year and promote long-term development.

37

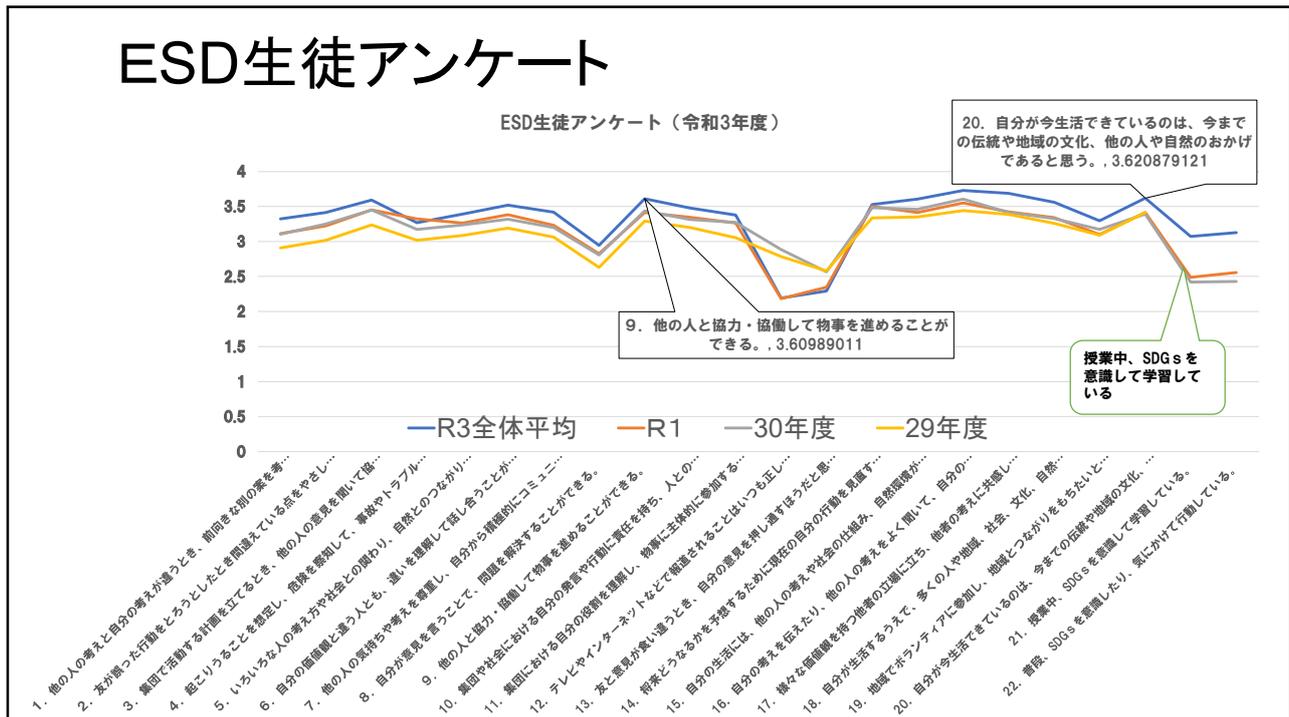
# 編集集中

Omori No.6 J.H. Development of SDGs Sense over year



38

# ESD生徒アンケート



39

# 編集集中

Address;  
Tomonori ICHINOSE(TOM) Ph.D.

- National University Corporation Miyagi University of Education, Professor
- 〒980-0845 149,AramakaiazaAoba,Aobaku,Sendai
- TEL :+81-22-214-3382 FAX :+81-22-214-3382
- MAIL : [ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp](mailto:ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp)
- Director, Japan Association for International Education
- Director, Japan Association for Citizenship Education
- Executive Director, Japanese Society of ESD
- External Examiner, Master of Arts in Education for Sustainability ,The Education University of Hong Kong
- Supervisor for the Immigrant students in school, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

40